

高知県春野町

# 芳原城跡 II

YOSIHARA

—第2～4次発掘調査報告書—



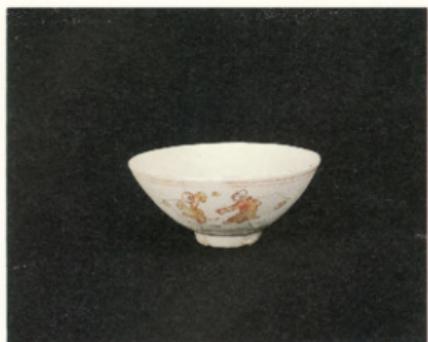
春野町教育委員会

# 芳原城跡 II

—第2～4次発掘調査報告書—



芳原城跡航空写真



赤絵碗



銅碗



石硯



天目茶碗

# 序

昭和58年度「芳原城跡発掘調査」に續いて、城山の農地整備に当る範囲の発掘調査を平成2年度から4年度にわたり3次計画で進めてきました。そこで芳原城の全容に近い詰の段と二の段に当る部分が、虎口の一部を残し、500年の年月を経過してほぼもとの姿で再び現れました。その成果としての報告書が今発刊されました。

発掘が進むにつれて出土する遺物や建物跡等は想像以上のものがあり、春野の中世を知るうえでの貴重な資料を得ることができたことを喜んでいます。

そしてこれ等の調査結果をもとに広く先人の生きざまにふれることができる事を期待すると共に、後世に郷土の歴史を正しく伝えねばならぬ使命を少しでも果たすことができたと思います。緑と太陽の町、平和で活力に満ちた文化の町春野の前進に寄与したいものです。

この度の調査に当り国・県の援助、土地所有者をはじめ隣接する地主の皆様方の御理解と数多くの方々の御協力をいただきました。

また調査担当者として高知県教育委員会文化振興課・高知県埋蔵文化財センター松田直則先生をはじめ諸先生方には日夜大変なご指導、ご尽力をいただきました。

調査にあたりお世話になった機関・団体・関係者の皆様方に、あらためて御礼を申し上げ、言葉は足りませんが序といたします。

平成5年3月

春野町教育委員会  
教育長 岡 内 勉

## 例　　言

1. 本書は、春野町教育委員会が国庫補助を受けて、平成2～4年度に実施した個人農地開発にかかる芳原城跡の発掘調査報告書である。
2. 城跡は、高知県吾川郡春野町芳原に所在する。
3. 発掘調査は、平成2年1～3月、平成3年4～6月、平成4年10～12月に実施し平成4年度に整理作業・報告書作成を行った。調査面積は3,500m<sup>2</sup>である。
4. 調査は、春野町教育委員会が主体となって行い、各年次の発掘調査を通して松田直則が担当し、近森康子・江戸秀樹・藤方正治・坂本憲昭（高知県埋蔵文化財センター調査員）、武吉真裕・竹村三葉（高知県埋蔵文化財センター調査補助員）に協力を得た。城跡の航空写真・測量は株式会社アイシーに委託した。事務総括は春野町教育委員会が行い下記の通りである。

平成2年度　岡村　睦男（公民館長）

平成3年度　岸田久美子（公民館長）・藤井　智弘

平成4年度　山崎　毅（公民館長）・中山　朋之

5. 発掘調査・本書の作成に際し、池田誠・伊藤晃・千田嘉博・中井均・福田正嗣・前川要の各氏に御教示をいただいた。記して感謝する次第である。尚、城跡の縄張り図については、池田誠氏の作成による。
6. 本書の執筆・編集は松田直則（高知県埋蔵文化財センター調査員）が行った。
7. 調査にあたっては、春野町文化財審議会、春野町同和対策課、地元関係者に全面的な協力をいただいた。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。
8. 発掘調査及び遺物整理には下記の方々の協力をいただいた。（順不同、敬称略）  
発掘作業……井上虎次・岡田稔夫・尾崎俊郎・高橋長雄・広田三郎・万々氏広・山本徳一・邑中三代市・沢田孝男・高橋俊・山本崇・島田昭二・吉井井・藤原利行・上田秀美・岡村昭子・加志崎悦子・金子睦子・工藤留美・国沢数代・国沢喜代子・高橋春子・土居内瑞江・中山富美恵・松本明美・森下悦子・横川睦子・西森愛子  
遺物整理……吉本睦子・大原喜子・前田玲子・向井知佳
9. 出土遺物等の資料は、春野町教育委員会が保管している。尚、遺物の注記は各年度で平成2年度を90YC、平成3年度を91YC、平成4年度を92-2YCとしている。

## 報告書要約

1. 遺跡名 芳原城跡 遺跡番号340016 地図番号NO.23-5(土佐・吾川)
2. 所在地 高知県吾川郡春野町芳原
3. 立地 吾南平野中央部の独立丘陵 標高32m
4. 種類 戦国時代 山城跡
5. 調査主体 春野町教育委員会
6. 調査契機 個人農地開発に伴う発掘調査
7. 調査期間 第2次調査……平成3年1月24日～3月20日  
第3次調査……平成3年4月22日～6月20日  
第4次調査……平成4年10月1日～12月19日
8. 調査面積 3,500m<sup>2</sup>
9. 検出遺構 掘立柱建物跡7棟 土坑4基 溝跡8条 櫛列跡4列 基壇状遺構 土壘状遺構 虎口遺構 ピット群
10. 出土遺物 土師質土器 小皿・皿・小杯・杯・鍋・釜  
輸入陶磁器 青磁・染付・白磁・赤絵  
国産陶器 備前焼・常滑焼・瀬戸美濃系  
土製品 土錐・羽口・トリベ  
石製品 砥・砥石・茶臼・投弾  
金属製品 銅碗・銅蓋・飾り金具・鉄釘・小刀・古錢
11. 要約内容 個人農地に伴う調査で、詰とされるⅠ郭とそれを取り巻く曲輪のⅡ郭・Ⅲ郭が対象である。Ⅰ郭では掘立柱建物跡と櫛列を検出している。Ⅱ郭では掘立柱建物跡6棟、溝跡8条、櫛列3列、土坑4基、基壇状遺構、土壘状遺構、虎口を検出した。Ⅱ郭に建物跡を多く検出することができ、中でも2間×7間の建物は城跡の中では大規模なものであり、その性格を考えて行く上で貴重な資料である。長宗我部地検帳では、城跡内に詰・北蔵ノタン・政所ノタンの記載が見られるが、検出した遺構とホノギが一致する可能性があり城跡内の機能まで推考することができる。その他Ⅱ郭の東側で虎口を検出した。この虎口は枠形空間を持つもので、出土遺物から16世紀前半頃機能していたと考えられ、虎口研究に重要な資料を提供できた。出土遺物も赤絵を始めとする輸入陶磁器、備前焼・常滑焼・瀬戸美濃系などの国産陶器、土師質土器、硯・銅碗など35,000点に及び、15世紀後半から16世紀前半を中心とした時期を考えることができる。

## 本文目次

I 調査に至る経過.....	1
II 芳原城跡と周辺の歴史的環境.....	2
III 城跡の概要.....	5
IV 調査の概要.....	9
1 調査の方法.....	9
2 第2～4次調査の概要.....	9
3 基本層序.....	12
V 検出遺構.....	17
VI 出土遺物.....	41
1 遺構内出土遺物.....	41
2 遺構外出土遺物.....	47
VII 考 察.....	104

## 挿 図 目 次

第1図 春野町位置図	1	第32図 土師質土器2（小皿・杯）	61
第2図 春野町の遺跡分布図	3	第33図 土師質土器3（杯）	62
第3図 芳原城跡周辺小字図	6	第34図 土師質土器4（杯）	63
第4図 芳原城跡概要図	8	第35図 土師質土器5（杯・皿）	64
第5図 発掘調査区位置図	10	第36図 土師質土器6（皿）	65
第6図 発掘調査区全体図	13～14	第37図 土師質土器7（鍋）	66
第7図 I郭セクション図	15	第38図 土師質土器8（鍋・釜）、 瓦質土器（鍋・擂鉢）	67
第8図 II郭セクション図	16	第39図 瀬戸・美濃系陶器 (碗・皿・壺)	68
第9図 I郭遺構全体図	18	第40図 備前焼1（擂鉢）	69
第10図 SB1実測図	19	第41図 備前焼2（擂鉢）	70
第11図 II郭A区遺構全体図	21	第42図 備前焼3（擂鉢・壺）	71
第12図 SA1～4、SD6断面図	22	第43図 備前焼4（壺・甕）	72
第13図 虎口実測図	23	第44図 備前焼5（甕）、常滑焼（甕）	73
第14図 II郭B区遺構全体図	25	第45図 備前焼6（甕）	74
第15図 SB2実測図	26	第46図 備前焼7（甕）	75
第16図 SB3実測図	27	第47図 青磁1（碗）	76
第17図 II郭C区遺構全体図	28	第48図 青磁2（碗）	77
第18図 SB4・5、SA4、 SD1～5実測図	30	第49図 青磁3（碗）	78
第19図 SB6実測図	31	第50図 青磁4（皿・壺・盤）	79
第20図 SK4実測図	32	第51図 青磁5（盤）	80
第21図 II郭D区遺構全体図	34	第52図 赤絵（碗）、染付（皿・碗・甕）	81
第22図 SB7実測図	35	第53図 白磁1（皿）	82
第23図 SK1実測図	36	第54図 白磁2（皿・小杯・碗）、 土製品、石製品	83
第24図 SK2実測図	37	第55図 石製品、金属・青銅製品	84
第25図 SK3実測図	39	第56図 土師質土器底部拓本	85
第26図 III郭遺構全体図	39	第57図 古錢拓本	86
第27図 SB5・7、SA4、SK1出土遺物	42	第58図 芳原城跡縄張り図	105
第28図 SK1～3出土遺物	43	第59図 I・II郭機能分化想定図	107
第29図 SD1～4・6出土遺物	45	第60図 輸入陶磁器出土分布図	112
第30図 Pit群出土遺物	48		
第31図 土師質土器1（小杯・小皿）	60		

## 図版目次

図版 1 芳原城跡遠景	119	図版 17 染付碗出土状況	135
I・II郭調査前近景	119	備前焼出土状況	135
図版 2 II郭西側調査前近景	120	図版 18 遺構出土遺物 1	136
II郭東側調査前近景	120	図版 19 遺構出土遺物 2	136
図版 3 芳原城跡航空写真	121	遺構出土遺物 3	137
I郭調査状況	121	図版 20 遺構出土遺物 4	138
図版 4 I郭完掘状況	122	図版 21 遺構出土遺物 5	139
SB 1	122	遺構出土遺物 6	139
図版 5 II郭-B区完掘状況	123	図版 22 遺構出土遺物 7 (外面)	140
SB 2	123	同上 (内面)	140
図版 6 SB 3	124	図版 23 土師質土器 1	141
II郭-C区完掘状況	124	図版 24 土師質土器 2	142
図版 7 SB 4	125	図版 25 土師質土器 3	143
SB 5	125	図版 26 土師質土器 4	144
図版 8 SB 6	126	図版 27 土師質土器 5	145
SB 7	126	図版 28 土師質土器 6	146
図版 9 SB 7周辺	127	図版 29 土師質土器 7	147
SB 7・SK 1	127	図版 30 土師質土器 8	148
図版 10 SK 2・SK 3	128	図版 31 土師質土器 9	149
II郭石列	128	土師質土器 10	149
図版 11 SK 1セクション	129	図版 32 土師質土器、瓦質土器、 産地不明陶器	150
SK 1	129	図版 33 輸入・国産陶磁器類、 瓦質土器、土製品	151
図版 12 SK 1完掘状況	130	図版 34 瀬戸・美濃系陶器 (外面)	152
II郭-A区近景	130	同上 (内面)	152
図版 13 II郭虎口	131	図版 35 備前焼 1 (外面)	153
天目茶碗出土状況	131	同上 (内面)	153
図版 14 砥出土状況	132	図版 36 備前焼 2 (外面)	154
青磁稜花皿出土状況	132	同上 (内面)	154
図版 15 常滑焼出土状況	133	図版 37 備前焼 3 (外面)	155
銅碗出土状況	133	同上 (内面)	155
図版 16 SD 6 遺物出土状況	134		
土師質土器出土状況	134		

图版38 備前焼 4	156	图版46 青磁 9	164
備前焼 5	156	白磁 1	164
图版39 備前焼 6・常滑焼	157	图版47 染付 1 (外面)	165
備前焼 7	157	同上 (内面)	165
图版40 備前焼 8	158	图版48 染付 2 (外面)	166
備前焼 9	158	同上 (内面)	166
图版41 青磁 1	159	图版49 白磁 2	167
青磁 2	159	白磁 3	167
图版42 青磁 3 (外面)	160	图版50 白磁 4	168
同上 (内面)	160	石製品 投彈・砥石・白	168
图版43 青磁 4	161	图版51 石硯	169
青磁 5	161	土製品 土鍤・トリベ	169
图版44 青磁 6	162	图版52 金属・青銅製品	170
青磁 7	162	古錢	170
图版45 青磁 8 (外面)	163		
同上 (内面)	163		

## 表 目 次

第1表 出土古錢計測表	59	第12表 出土土器法量表11	97
第2表 出土土器法量表1	87	第13表 出土土器法量表12	98
第3表 出土土器法量表2	88	第14表 出土土器法量表13	99
第4表 出土土器法量表3	89	第15表 出土土器法量表14	100
第5表 出土土器法量表4	90	第16表 出土土器法量表15	101
第6表 出土土器法量表5	91	第17表 出土土器法量表16	102
第7表 出土土器法量表6	92	第18表 出土土器法量表17	103
第8表 出土土器法量表7	93	第19表 土師質土器 杯·皿·小壘法量表	110
第9表 出土土器法量表8	94		
第10表 出土土器法量表9	95		
第11表 出土土器法量表10	96		

## I 調査に至る経過

春野町は、高知県中央部で高知市の西部に位置し、その地形は東西帯状に伸びる北部山地、吾南平野を形成する中央低地、南部丘陵からなり、南に太平洋を望める町である。西部に流れる仁淀川によって形成された中央低地は、県下でも主要な農業地帯として知られる所である。吾南平野は、米作を中心に施設園芸作物の栽培が盛んに行われており、高知市に隣接することから春野町は都市近郊型農業を目指している。

昭和54年春野町は、水田利用再編成対策の推進及び転作の定着化を図るために県営圃場整備計画をし、芳原城跡を含む地域の農業用地120ヘクタールを開発した。この圃場整備に伴い芳原城の堀状地形部分の発掘調査が実施された。さらにこの圃場整備は大規模なものでその他西分増井遺跡なども調査されている。春野町で実施された大規模な調査は、すべてこの圃場整備にかかるものが多い。芳原城跡周辺も低湿地で農業生産がきわめて低かったが、土地基盤の整備が進み農業生産環境が著しく変化してき始めた。これら環境の変化に伴い、個人においても施設園芸作物の栽培を行い、安定した農業経営及び後継者の確保を図ることが望まれ始めた。芳原城跡を所有する持田地区に在住の上田氏が芳原城跡の跡と二の段部分を削平し、ハウス栽培を行う目的で開発したい旨の届けが平成元年春野町を経由して、高知県教育委員会文化振興課に提出された。

芳原城跡は、昭和58年県営圃場整備事業にともない堀状地形部分の発掘調査が実施されており、輸入陶器や木製品類が多量に出土した。城跡の周辺調査で、これほど多量の木製品が出土した例は少なく、特に明応2年（1493）の紀年銘が残る護符の出土は、城館の機能した時期を探るうえで貴重な資料として全国的にも注目された。さらに昭和58年の圃場整備計画に伴う調査前段階の協議で、城山の削除については計画変更して現状保存した経過も踏まえ、文化財保護部局である町教育委員会と県文化振興課は、地主の上田氏に開発を再考して



第1図 春野町位置図

いただくよう要請した。しかし上田氏との協議の結果、城跡は大部分みかんの植えつけで破壊されている可能性が強いことや、地主の開発に対する強い意向から、発掘調査を実施し確認を行うことで合意した。調査は春野町教育委員会が高知県教育委員会の指導を受け国庫補助金で平成2年度から4年度にかけて実施する運びとなった。

## II 周辺の遺跡と芳原城の歴史的環境

春野町では、昭和48年頃から発掘調査が進み、しだいに旧石器時代を除き縄文時代から連続と続く春野地方の歴史が明らかになり始めた。山根石屋敷遺跡、竹ノ内遺跡、馬場末遺跡が昭和48年から55年までに発掘調査が実施された遺跡である。これらの遺跡群は、春野町役場が所在する西分に位置し、馬場末遺跡などは隣接して春野町最大規模の西分増井遺跡群が所在していることなど、これら一群の遺跡として捉えられるものである。

山根石屋敷遺跡は、昭和48年から55年まで4次の学術調査と2次の緊急調査が実施され縄文時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。中でも古墳時代初頭の土師器、平安時代後期の回転台土師器などはまとまって出土している。

馬場末遺跡は、昭和50年に小規模なトレンチ調査が実施されているが、古式土師器が大量に集中出土している。これら一括性の高い土器群を用い馬場末式土器として形式設定されている。

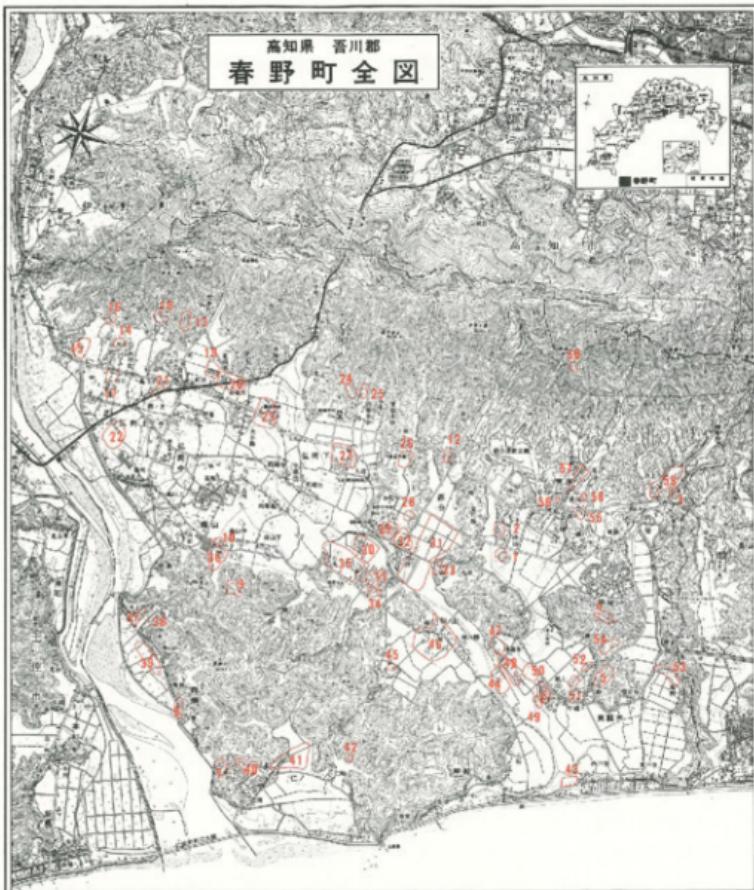
昭和50年前半は、小規模な発掘調査が散発的に実施されているのみであった。昭和58年芳原城跡の堀状地形部分の発掘調査から比較的大きい調査が始まった。芳原城跡については後述するとして、平成元年には西分増井遺跡群の一部1100m<sup>2</sup>が調査され縄文時代から古墳時代の様相が明らかにされ始めた。縄文時代では、津雲A、北白川上層式Ⅰ期～Ⅲ期、彦崎KⅠ、福田KⅢ、宮滝式まで連続する土器群が出土している。これら土器群の分析で、縄文時代後期中・後葉の南四国の土器形式の変化を見ると、近畿地方からの影響が強く、すなわち東から西への流れで土器文化を考えている。弥生時代では、松菊里型住居跡が検出され南国市田村遺跡も含め弥生文化の成立・発展を考えるうえで貴重な資料を提供した。古墳時代では、方形周溝墓が初めて検出され本県に於ける墓制の問題を提起することができた。

以上が発掘調査の成果の概略であるが、その他畠地などから表探された遺物から、重要な遺跡が確認されたものとして馬場末遺跡の西隣に位置する大寺廃寺がある。表探品の中には、百済系の有稜線素弁八葉蓮華文鏡瓦が存在し、7世紀の高知市秦泉寺廃寺も含め白鳳期の寺院研究にとって貴重な資料を提供している。さらに太用遺跡などは、須恵器の表探などから大寺廃寺に關係する窺跡として注目される遺跡である。

古代末から中世にかけては、未報告ではあるが最近王子遺跡や西畠遺跡で、円盤状高台の回転台土師器や須恵器、綠釉陶器、瓦器などが出土しており、今まで空白だった時期を埋める遺物群が出土している。

中世では吉良城跡、木塚城跡、芳原城跡の堀状地形部分が調査され、山城を中心に調査が進んでいる。ここでは、戦国時代を中心とする歴史的背景を若干述べることにする。室町時代の14世紀後半、土佐では守護領国体制が確立していく。その体制下における支配というものは、守護・有力国人・国人という形とされている。吾南平野は、吉良・木塚・森山・小島氏

高知県 菅川郡  
春野町全図



第2図 春野町の遺跡分布図

などの国人が当時支配圏を広く持っていた有力国人である大平氏を支えて存在していた。さらに大平氏を介して南国市田村に居館を構えた守護代細川氏の傘下にいたと考えられている。そして応仁の乱以降全国的な守護領国体制の崩壊に伴い、土佐でも細川氏の帰京から戦国時代の始まりを迎える。この時期春野地方では、吉良氏が有力国人に成長し始め「吉良物語」によれば、吉良条目の制定など積極的な領地支配を行っている。しかし、永正年間の末から大永年間頃北から南下する本山氏と西から勢力を伸ばす一条氏に挟まれ、吉良氏は滅ぼされることになる。天文九年（1544）には吉良氏はこの地を本山氏に明け渡していたと考えられている。吾南の有力国人であった大平氏も衰え、大永年間から天文年間には一条氏と本山氏の二つの勢力に分割され、弘治3年（1557）に一条氏が伊予攻略失敗による隙を突き本山氏がこの地の支配を確立する。本山氏の支配もつかの間で、岡豊城を居城に持つ長宗我部氏が勢力を伸ばしてきて、この地は本山氏と長宗我部氏の戦いの場となる。長宗我部軍の吾南侵攻は激しいものがあり、永禄6年（1563）本山氏はその勢力を本山に引き揚げ、吾南平野は長宗我部氏の支配に入ることになる。

春野町には、中世城郭が芳原城他19城跡確認されている。この中で一部発掘調査が実施されている城跡は、吉良城跡、木塚城跡、芳原城跡である。

吉良城跡は、屋敷跡の確認調査を含めた調査が実施され、北嶺・南嶺を主郭に持ち、畝型堅堀群や堀切・堅堀で構成される山城である。北嶺部分の調査が昭和59年度に行われ、掘立柱建物跡・柵列状ピット・集石群が検出されているが、本城において望楼的な役割を果す位置は南嶺と考えている。さらに昭和60年次調査から62年次調査は、土居の谷・大谷地区の平地部分の調査であった。土居の谷地区は、小字名に「土居」の名称が冠されていることから長宗我部地検帳に記載されている「御土居」の所在地と推定されていた。土居の谷地区では、小規模な調査であったが石垣遺構・柱穴群が確認されていることから出土遺物も含めて考えると、この周囲に屋敷が残存している可能性がある。

木塚城は、芳原城跡の北側約2kmの西分城山に位置する中世山城である。城跡の斜面部分の発掘調査の一部と、城跡の測量調査が昭和59年に実施された。この木塚城は多くの文献で木塚氏の居城としているが、長宗我部地検帳の記載内容や周辺の土居の様相、さらに城跡の規模地理的環境などから、芳原城跡が木塚氏の拠点ではないかと考察している。

木塚氏の拠点とされている芳原城跡であるが、昭和58年に堀状地形部分の調査が実施されている。この調査は、3000m<sup>2</sup>の発掘調査で多量の土器片と木製品が出土している。木製品の中では、特に注目されるものとして明応2年（1493）の紀年銘の護符が出土していることである。芳原城跡の機能した時期の推定や、同層位出土の土器・木製品に実年代を与えることが可能となった。さらに土師質土器が多量に出土しており、城内での生産も示唆している。春野町の中世城跡は、城郭研究で縄張り調査も進んでおり吾南平野の戦国期の様相も徐々に解明され始めている。

### III 城跡の概要

芳原城跡は、芳原と西分の境に位置する独立丘陵を利用した平山城である。文献面資料は数少なく、南路志・土佐州郡志・土佐国古城略史・土佐国古城記・大日本資料などの文献に芳原城跡の記載がなされている。

南路志では、吉原村中村郷の中で明確に芳原城跡の記載はないが、「古城・片山大夫居之或吉原左衛文佐一説朝野大夫」と記されている。さらに「出城・武ヶ所ニ有捨ケ森同所ノ北」とされており古城の北に出城として捨ケ森が所在している。芳原城跡の北方「北堀」を隔てて「持田」の集落が所在するが、そのさらに北方に捨ケ森と呼ばれる小丘がある。この捨ケ森との関係から、古城という記載は芳原城跡ということになる。この古城の城主として片山大夫、吉原左衛門、朝野大夫などの名前が登場してくる。同様に土佐州郡志に於いても吉原氏と朝野氏が記載されており、さらに土佐国古城記では片山修理大夫、土佐国古城略史では片山氏と新たに弘田伊賀守が登場してくる。大日本資料では、吉原の項に鷺尾權頭が記載されている。このように文献面では城主の記載を中心で、城跡の内容まで記載しているものは土佐国古城略史のみで、簡単に詰や二の段の広さなどを述べている。これは明治17年に著者の宮地森城が陪遊して城跡の概略を著した内容である。

考古学的芳原城跡についての研究は、昭和58年の堀状地形の発掘調査まで待たなければならない。さらに歴史地理的にも、長宗我部地検帳の記載と城跡周辺の小字図を検討している。現存する地名で「城山」を取り囲むように「北堀」「東堀」「南堀」「大門」「城前」などのホノギが残っている。「城山」の中には、詰・北蔵ノタン・政所ノタン・弓場ノタンなどが記載されている。この中で詰の所在地点は明確にできるが、その他の「タン」の場所は今後の研究課題とされている。調査成果については、前章で若干述べている通りであるが城跡の機能した時期を決める紀年銘の有る護符の出土など、貿易陶磁器を始め出土遺物についての検討が進められ、土佐の中世土器の編年で15～16世紀の基準資料となっている。

縄張り調査からの城郭研究は未調査であるが、今回の発掘調査段階で検出遺構を含めた縄張り図を作成した。この縄張り図に基づき各郭の概略を説明していくこととする。

I郭：城山の頂上平坦部である。長宗我部地検帳に記載されている「詰」に当たる場所である。調査前は、みかん畑として利用されている状況であり遺構の残存状況は悪いものと推定されていた。標高32.4mを測り東西40m、南北15mの瓢箪形をした平坦部で約520m<sup>2</sup>の面積を有している。中央部東寄りには、セメント造りの小さな祠が鎮座し城八幡として地元の住民から祭られている。その祠から東側部分



図3第3圖 芳原城跡周辺小字図

にⅡ郭への降り口があり急傾斜の登山道となっている。さらに平坦部南西隅にも上り降りの道がついている。平坦部は、北側部分にやや傾斜して広さも狭くなってしまっており、周囲はみかん畠の防風林として杉及び雑木が植えられている。Ⅰ郭は断面台形状を呈しており、Ⅱ郭との比高は7~8mを測る急峻な地形になっている。Ⅰ郭からの展望は良く、東側では一部太平洋を望むことができる。

Ⅱ郭：詰をめぐる腰曲輪とされている所であるが、北部・北東部・南西部がやや広く膨らんでいる地形である。土佐古城略史を著した宮地森城は、「八間或は五六間にて、廣狹不同の地周廻するにあり」と表現している。平均的に西側は南から北へ、東側は中央部がやや盛り上がり北側にむけてやや傾斜している地形で、総面積は2,330m<sup>2</sup>である。この場所も、みかん畠として利用されていた所で城跡の中で一番広い面積を有する。Ⅱ郭の周縁部も詰と同様、みかん畠の防風林として杉・雑木が傾斜地に植えられている。この平坦部の東側中央部が虎口と考えられ、現在のⅡ郭への登り口として道がついている。

Ⅲ郭：Ⅱ郭の北部に位置しているが、現在は畠地造成工事によって削平され、曲輪としての景観を失っている。削平される以前の状況は、1,000m<sup>2</sup>の広さを持ちみかん畠として利用された平坦地とされている。Ⅱ郭との比高差が約5mあり標高は17mを測る。

Ⅳ郭：Ⅱ郭の南東部に位置し、Ⅱ郭の虎口部分に入る道を挟んで曲輪が形成されている。現況は、雑木と竹林になっており当時の地形とほとんど変わらないものと考えられる。この曲輪から道に沿った北側には一段高く狭い平坦部が作られている。この平坦部の両側には堅堀状の遺構が存在するが、Ⅱ郭の虎口部分と関連する遺構と考えられる。

Ⅴ郭：Ⅳ郭の南部に位置し、現況は畠地となっており約2,170m<sup>2</sup>の広さを持つ。ホノギでは、「南堀」となっており昭和58年の調査の段階で山裾を崩して南に大きく拡大整地した地形であることが確認されている。しかしこの地点でも土師質土器等が表採されており、今後の調査によって明らかにして行かなければならない。

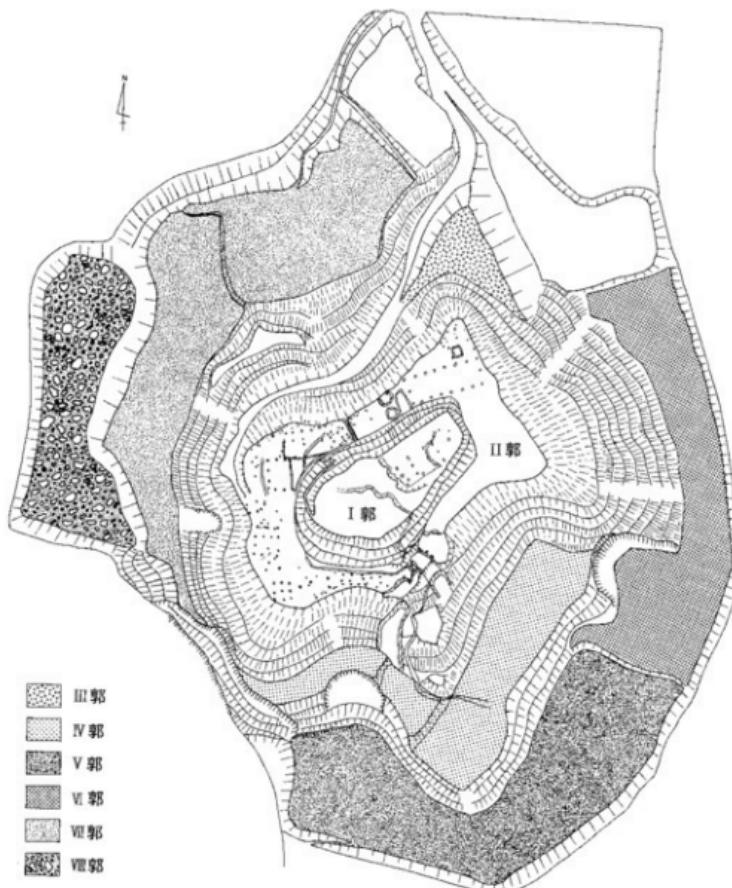
VI郭：V郭の北東側に位置する南北に長い平坦地である。ホノギでは、「東堀」とされている地点であり、城跡の東裾部分に当る。現状は竹林と雑木林で北部は造園業の庭木類が植えつけられ破壊されている。約1,400m<sup>2</sup>の広さを持つものであるが、V郭同様城山を崩して「東堀」部分へおき出したと考えられている。

VII郭：Ⅲ郭の南西側に位置する曲輪である。VI郭に近い北側部分は破壊が著しく不明な部分が存在するが、東側に一段高く狭い平坦部も存在する。VII郭の南側部分は残りが良く、標高が約10m内外で、面積は約1,800m<sup>2</sup>を測る。この平坦面は、通称井戸の段と呼ばれている所であるが、官地森城の「古井あるを聞く」の地点と考

えることができる。現況では畠地及び竹林となっているが、南端部では「大門」からⅡ郭に登る小道が残る。

Ⅶ郭：Ⅶ郭の西側に位置し、南側はホノギで「大門」の小字が残る所である。現況は竹林であるが近年の整地削平による変化が著しく、曲輪として機能していたかどうか不明な所でもある。

以上各曲輪の概略を説明してきたが、詰のⅠ郭とその斜面、詰を取り巻くⅡ郭の部分を今回調査し、Ⅱ郭で建物跡の配置など城跡の重要な部分の解明はできた。しかし、城跡の全体像は全面に渡る詳細な調査を待たなければならない。



第4図 芳原城跡概要図

## IV 調査の概要

### 1 調査方法

個人農地の開発で、地主の所有する土地での削平計画の範囲ということで調査区を設定した。調査区設定のため便宜上、長宗我部地検帳で「詰」と記載されている城跡の頂上平坦部とその斜面をⅠ郭とし、Ⅰ郭の周囲を取り巻く曲輪をⅡ郭とした。さらにⅡ郭の北部に位置し、以前畠地造成工事によって削平された残り部分をⅢ郭と名称し調査を実施した。

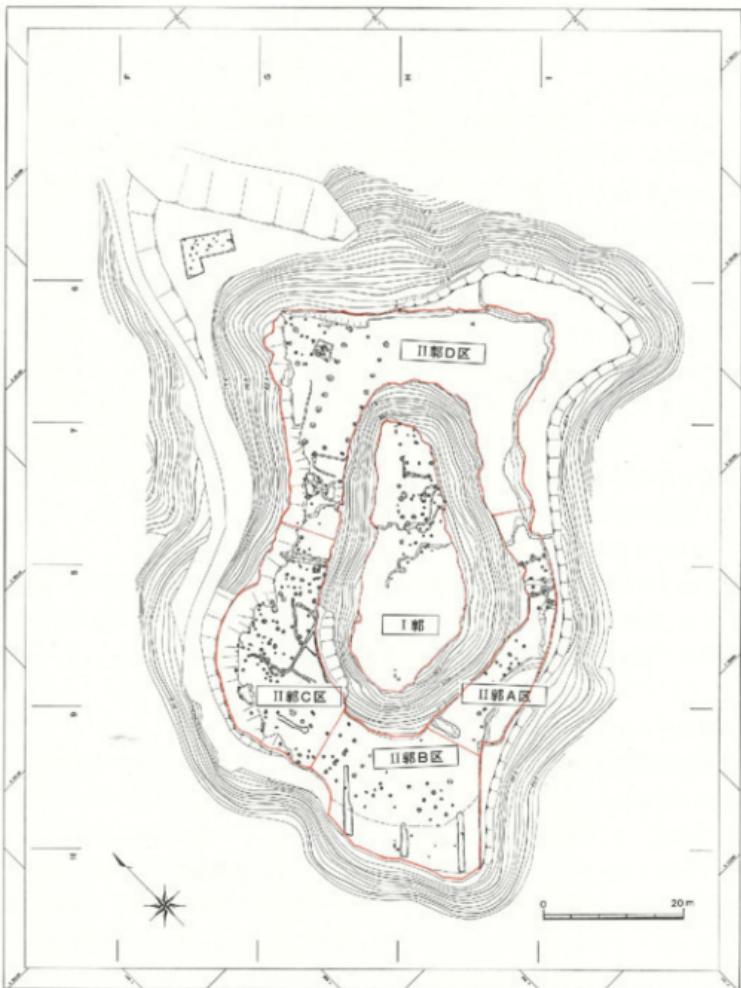
調査対象範囲は、Ⅰ郭とその斜面、そしてⅡ郭部分と北部のⅢ郭であるが、Ⅱ郭の斜面部分は急傾斜であることや廃土の処理関係と斜面部分の杉・桧等の伐採許可の問題で、今回は調査が不可能であった。

調査方法は、調査対象範囲全域を20m方眼で分割し、基準方位をN-45°-Eとしほば地形に沿ってポイントを設定した。調査区は、大きく20×20mで区切り東西を西からA→B→Cとし、南北を1→2→3で区分し、その中に4×4mの小区画を25区作り小区画の名称を北西隅の交点番号でA1-1～A1-25とした。調査は、この小グリッドに従って土層観察用の畦を残しながら掘り進めた。Ⅰ郭からⅡ郭の範囲は、F6-1区からI10-25区の中に入る。

城跡の樹木伐採終了後、調査前の写真撮影及び地形測量を1/100で作成し、発掘区については土層断面図及び遺構・遺物の検出状況の平断面図(1/20)、調査後では、斜面部も含めて全体の航空測量と航空写真的撮影を実施した。

### 2 第2～4次調査の概要

芳原城跡は昭和58年に山城周辺の壠状地形部分を調査している。この調査を芳原城跡全体の第1次調査とした。山城部分の調査は、国庫補助金を受け平成2年度から4年度にかけて実施した。平成2年度を第2次調査とし、平成3年1月24日から3月20日までの期間で詰のⅠ郭を中心とした全面発掘を実施し、Ⅱ郭は遺構確認のため部分的にトレント調査を実施した。Ⅰ郭の平坦部では、南部で遺構を検出することができず表土層を除去すると直下で岩盤を検出した。北部では、岩盤をL字状に掘削し平坦部を形成してから2間×3間の建物を構築している。さらに建物の東側には、柵列を巡らしている。建物跡の上面には炭化物の集中が広く認められ火災に遭遇していることが分かる。出土遺物では、硯や銅碗が出土しておりⅠ郭の建物の性格をうかがい知ることができるものである。Ⅰ郭の第2次調査面積は、斜面の一部も含めて1,000m<sup>2</sup>である。平成3年度に3次調査を実施した。第2次調査から約1ヶ月後に再開し、4月22日から6月20日まで実施した。Ⅱ郭の南部と隣接する南西部、さらに北部の地点を調査した。南部では2間×



第5図 発掘調査区位置図



I 郭 調 査 状 況

2間の総柱建物跡とさらに西側に隣接して建物跡を検出した。南西部では、建物跡2棟とそれに付属する雨落溝と考えられる溝を検出した。北部では2間×7間という城跡の中では最大規模の掘立柱建物跡や、この建物跡に付属した土坑等を検出した。第3次調査は、II郭の約西半分の調査であったが掘立柱建物跡を合計5棟検出したことになる。北部で検出した大規模な建物跡は、第3次調査で最も注目された遺構であったが、遺構面から輸入陶磁器の青磁や染付に混じって赤絵の碗が出土した。赤絵の出土は、県内の中世遺跡から出土することは稀で、その他の輸入陶磁器出土も合わせてこの建物の性格を推測するに必要な資料となった。第3次調査の面積は1,000m<sup>2</sup>である。

平成4年度は、10月1日から12月19日まで第4次調査として実施した。12月19日には、現地説明会を開催し150人の見学者が訪れ盛況であった。調査は、II郭の残りの部分を行いI郭の東側斜面部分も実施した。検出遺構の中で注目されたのは、東側中央部分に於いて虎口を検出したことである。城跡東側部分のIV郭から現在でも登山道が残っているが、その登りつめたII郭の部分で検出した。今回の調査では、虎口の一部分しか調査できなかったためその全容は不明であるが、城門を持ちその両端は一段高くなり横矢を打てる配置になっている。この虎口から東側の斜面部分の調査が今後必要となった。その他西側部分の斜面を含め残りの未調査部分を発掘したが、掘立柱建物跡1棟、土坑3基、溝、柵列、ピット等を検出した。斜面部分や土坑では、大量の土師質土器が出土した。土坑出土の遺物は一括のもので、中世土器編年の一資料を提供することができた。

第4次調査の面積は1,500m<sup>2</sup>である。

第2次調査から4次調査まで調査概要を述べてきたが総面積は3,500m<sup>2</sup>である。今回の芳原城跡の調査を概観すると、中世の平山城としては県内の他城跡では類例を見ない遺構・遺物を検出したことがある。遺構は現代のみかん畑で破壊されている部分があるにしても、全体的に見ると良好な残りと言えるであろう。さらに遺構を見ると、すべて土造りで山城を構築しており、石造りの中村城跡や岡豊城跡と比較検討すると高知県の中世城郭の変遷を考えて行くうえで貴重な資料を提供できた。さらに出土遺物では、前回の堀状地形部分の調査で大量の木製品が出土しており、今回の山城部分の遺物と合わせて土器・陶磁器だけでは語ることができない中世城郭の姿を浮き彫りにすることができたものと考えられる。最後の第4次調査で、虎口遺構を検出することができたが、城郭遺構の中でも重要な部分を残すことになり来年度の調査が必要となった。尚、検出された遺構・遺物の詳細は次章で述べることにする。

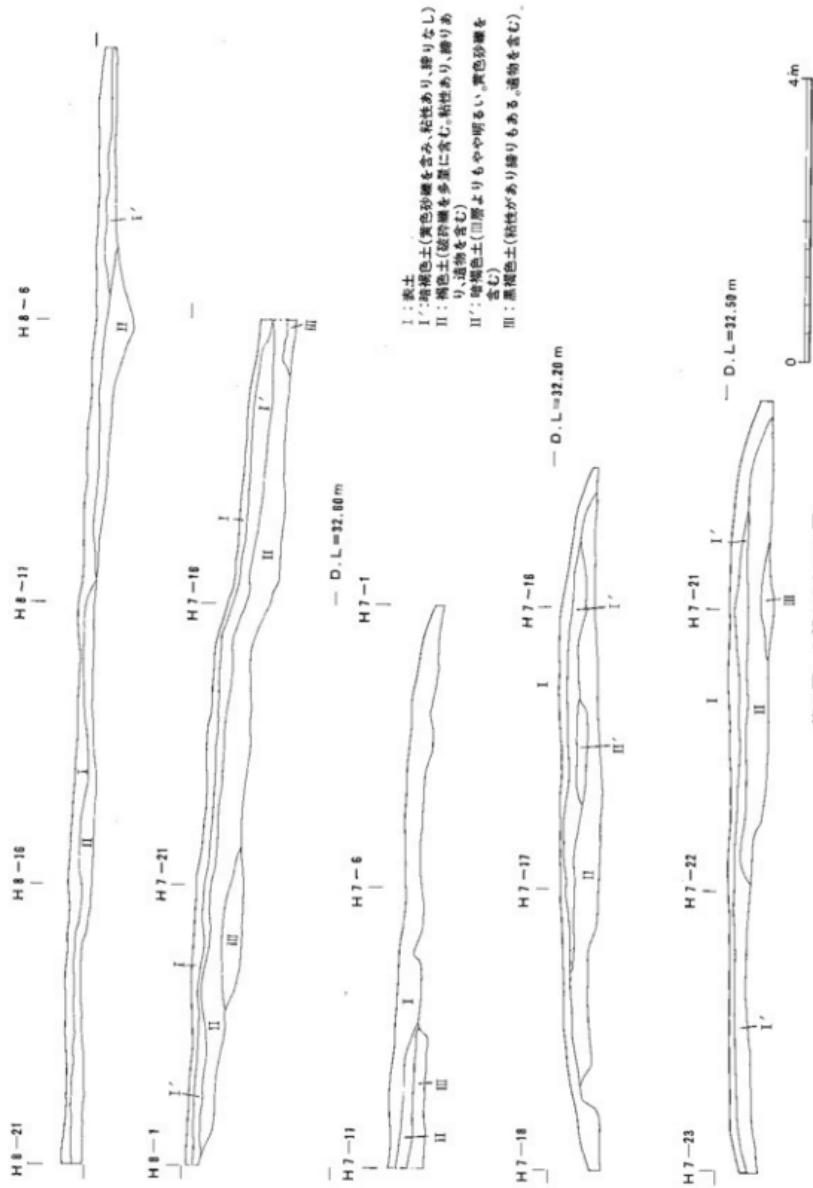
### 3 基本層序（第7・8図）

詰の基本層序は、I～III層に堆積している。南部は堆積が浅く、北部になると厚くなる。I層は表土である。I'層は暗褐色土層で、黄色砂礫を含有し粘性はあるが縮まりはない。I郭の中央部に堆積している。II層は全体的に堆積しており、褐色土層で破砕礫を多量に含有し粘性と縮まりがある。この層は遺物を包含している。II'層は中央部に一部レンズ状に堆積しているのみである暗褐色土層であるが、III層と比較するとやや明るい。III層は黒褐色土層で縮まりと粘性があり遺物を包含している。硯や銅鏡・瓦質土器等はこの層から出土している。北部のH 7-11区周辺で掘立柱建物跡SB 1の付近に堆積している。SB 1は、このIII層除去後検出している。III層下は岩盤となっている。

II郭の基本層序は、I層とII層からなる堆積状況である。しかしII郭の北部、南西部、南部と若干の相違が認められるので、北部のII郭D区、C区、B区に分けて説明をして行くことにする。II郭D区では、I層は表土で、II層は黄褐色土で包含層である。北端部のG 6-8区周辺でII-1層が堆積している。II-1層は、にぶい黄褐色土層である。さらにG 7-8区では、II-2層の褐色土、II-3層の暗褐色土が部分的に堆積している。D区で検出した大規模な建物跡SB 7はII層除去後検出した。II層の下は岩盤となっている。C区はI層表土で、II層は包含層で黄褐色土層である。G 8-7区周辺でII-1層の明黄褐色土層が一部堆積している。II層の下は岩盤となっている。B区は、I層とII層の黄褐色土がC・D区と同じ様に堆積しているがH 9-21区周辺で深い落ち込みが認められ、その中にII-1～5層が堆積している。II-1層は明黄褐色礫土、II-2層は礫を多量に含む暗褐色礫土、II-3層は礫を少量含む暗褐色土、II-4層は黄色ブロックを含有する黒褐色土、II-5層は暗黄褐色土である。平坦面のII層下は岩盤となっている。



第6図 発掘調査区全体図



第7図 I 部セクション図

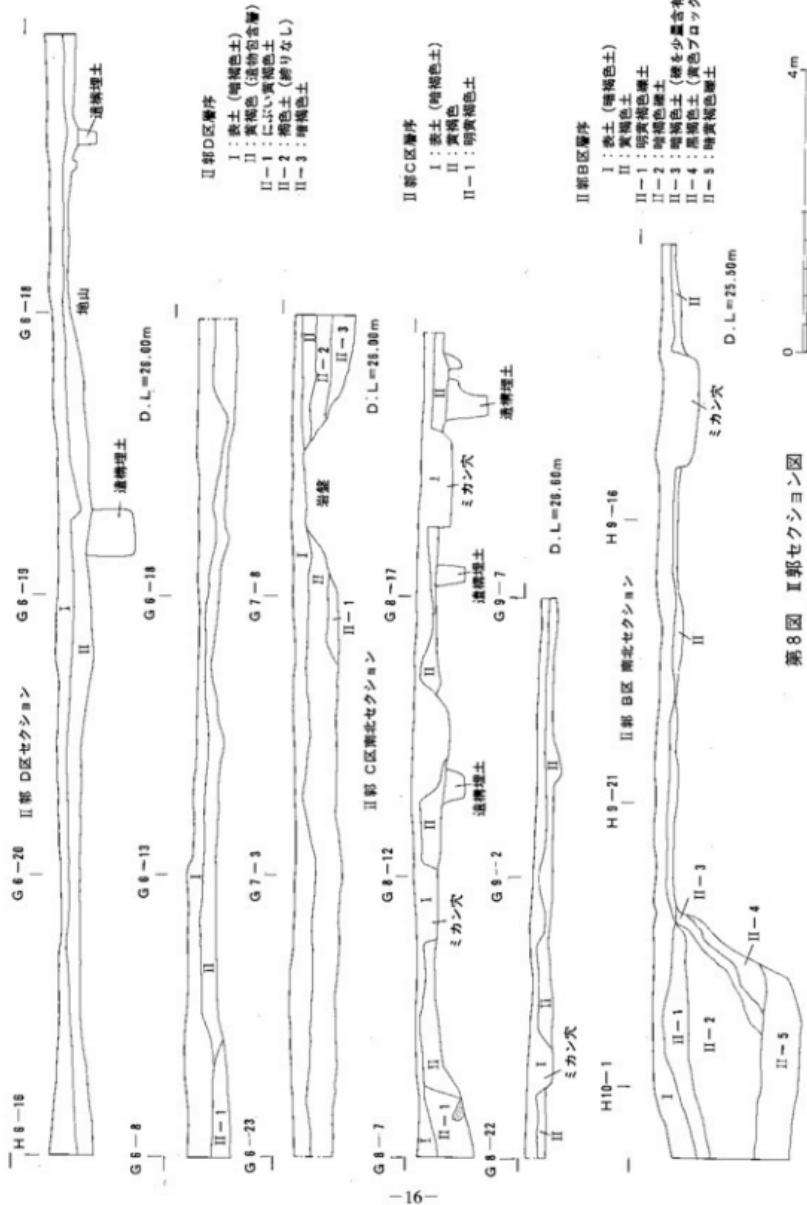


図8 郡セクション

## V 検出遺構

検出遺構は、I郭の北部から掘立柱建物跡1棟と柵列、ピットを検出した。当初I郭の南部は面積的にも北部と比較すると広く、土壘か建物跡が残存していると考えられたが現代の削平のため土壘の痕跡さえも検出できず、表土下は岩盤となっている。II郭では掘立柱建物跡6棟(SB)・柵列跡3列(SA)・土坑4基(SK)・溝跡8条(SD)・基壇状遺構1基・土壘状遺構1基・虎口遺構・ピット群等を検出した。II郭で検出した建物跡は、主に南部・西部・北部からで虎口遺構は東側中央部で検出している。II郭の北部に位置するIII郭では、ピット群を検出したが削平されている部分が多くL字状のトレンチ調査のため、建物跡の存在までは確認できなかった。

### 1 I 郭

#### SB 1

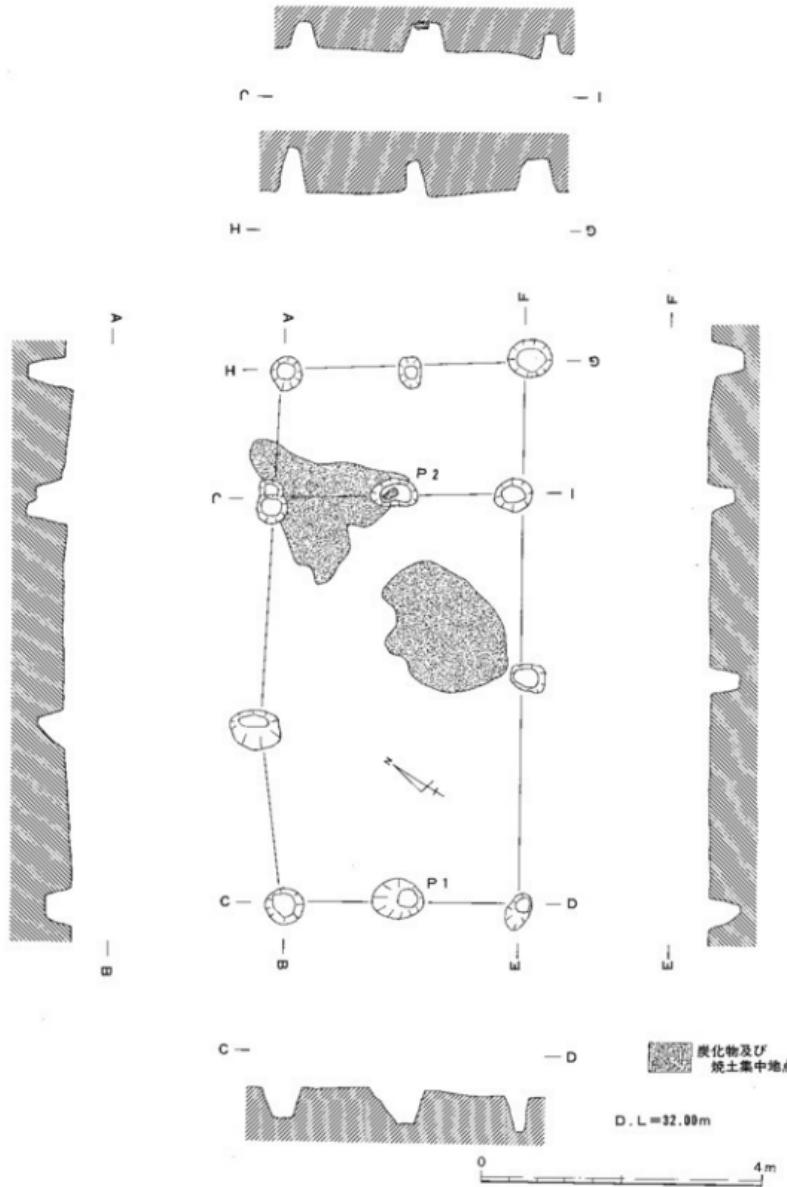
調査区の北部H 7-6・7、H 7-11・12、H 7-16・17区のⅢ層下に於いて検出した。岩盤をL字状に削平し、平坦部を形成し掘立柱建物を構築している。建物の規模は2間×3間で棟方向をN-45°-Eにとる東西棟である。梁間西側列は、3.42mで中間寸法は1.62~1.8mで、梁間東側列は3.5mで中間寸法1.7~1.8mを測る。桁行北側列は7.6mで、南側列7.75mを測る。桁行の中間寸法は、1.9~3.1mとまばらである。建物の東部でP 2の中間柱が残存し、この柱穴のみ掘り方下部に20cm大の根石を持っている。柱穴の掘り方は、ほぼ円形を呈し直径40~75cmを測り、検出面からの深さは平均で50cmである。底面の標高は、30.94~31.2mを測る。床面2ヶ所に炭化物及び焼土集中地点が認められる。柱穴の埋土は1層で、茶褐色粘質土である。出土遺物は、P 1から(526)の渡来鏡で元祐通寶が出土している。その他P 2から土師質土器の細片が出土しているが実測は不可能である。

#### SA 1

I郭の中央部で、SB 1の南側に位置する。北東部から南西部にかけて柵列が延びている。I郭の中央部から北東部にかけて、一段落ち込みを見せている部分に沿って構築されている。7間の規模を持つ柵列で全長11.8mを測り、中間寸法はまばらで折れ曲がっている。柱穴の掘り方は、円形状を呈し、直径20~40cmを測る。埋土は1層で茶褐色土である。出土遺物は皆無である。



第9図 I 郭遺構全体図



第10図 SB 1 実測図

## 2 II 郭

II郭はI郭(詰)を取り囲む帶曲輪で、今回の調査範囲の中で面積的にも広く便宜的にII郭をA～D区(第5図)とし各遺構を説明していくことにする。A区では、虎口、SA 2・3、SD 7・8、B区ではSB 2・3、C区ではSB 4～6、SD 1～6、SK 4、D区ではSB 7、SK 1～3を検出した。

### II郭A区

#### 虎口

II郭のA区で、詰の東側に位置する。平坦部のみ確認し、斜面を含めた全体は未調査のため不明である。平坦部では、詰から派生する岩盤を平坦に削平し、城門と考えられる建物を構築している。その下段には一辺2mの枠形空間を造りその両端には一段高い平坦部を形成している。北側の壇状地形は、2段に形成され円形の柱穴が掘り込まれている。虎口の部分は、来年度斜面部の調査が実施されるため、城門と考えられる建物も含め詳細は来年度の報告にまとめることにする。

#### SA 2

II郭のA区中央部で、虎口の南側に位置する。北東部から南西部にかけて柵列が延びている。9間の規模を持つ柵列で全長15.4mを測り、中間寸法は1.6～1.9mとまばらである。直進すればSD 8の溝にあたるためAP 2とAP 4の柱穴で折れ曲がっている。柱穴の掘り方は、円形状を呈し、直径20～50cmを測る。埋土は単層の茶褐色土で、出土遺物は皆無である。

#### SA 3

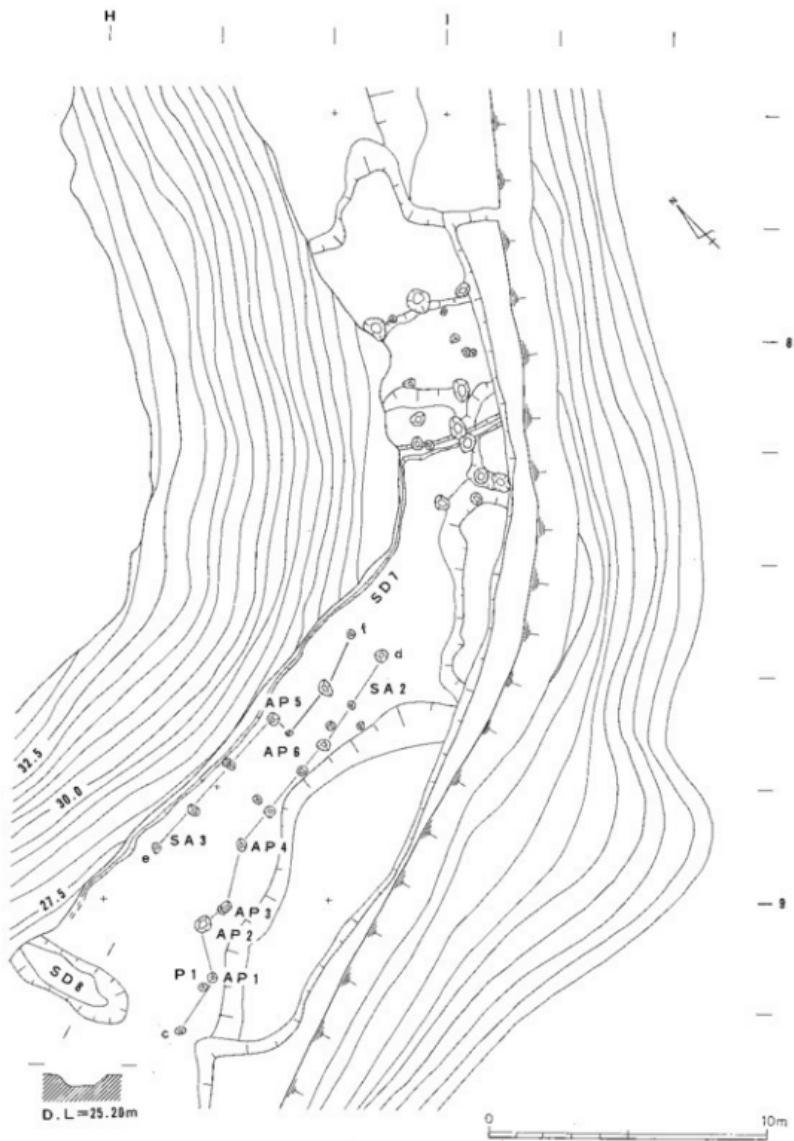
II郭のA区中央部で、SA 2に平行して北側に位置する。SD 8の方向に沿って北東部から南西部にかけて柵列が延びている。柵跡は、AP 5で90°北側に屈曲しAP 6から直線的に延びる。中間寸法は1.6～2.3mを測りばらつきがある。SD 8の4.7m前で止まっており、柱穴の掘り方は円形状を呈し、直径20～60cmを測る。埋土は単層の茶褐色土で、出土遺物は皆無である。

#### SD 7

II郭のA区で、SA 3に平行して位置する。I郭の斜面下に浅く掘削されたもので虎口の部分に延びている。詰の斜面下の周囲を回る溝と考えられII郭C区のSD 4に接続する。長さは24m、幅30～40cmを測り、検出面からの深さは20～25cmである。埋土は、茶褐色土1層で、遺物は皆無である。

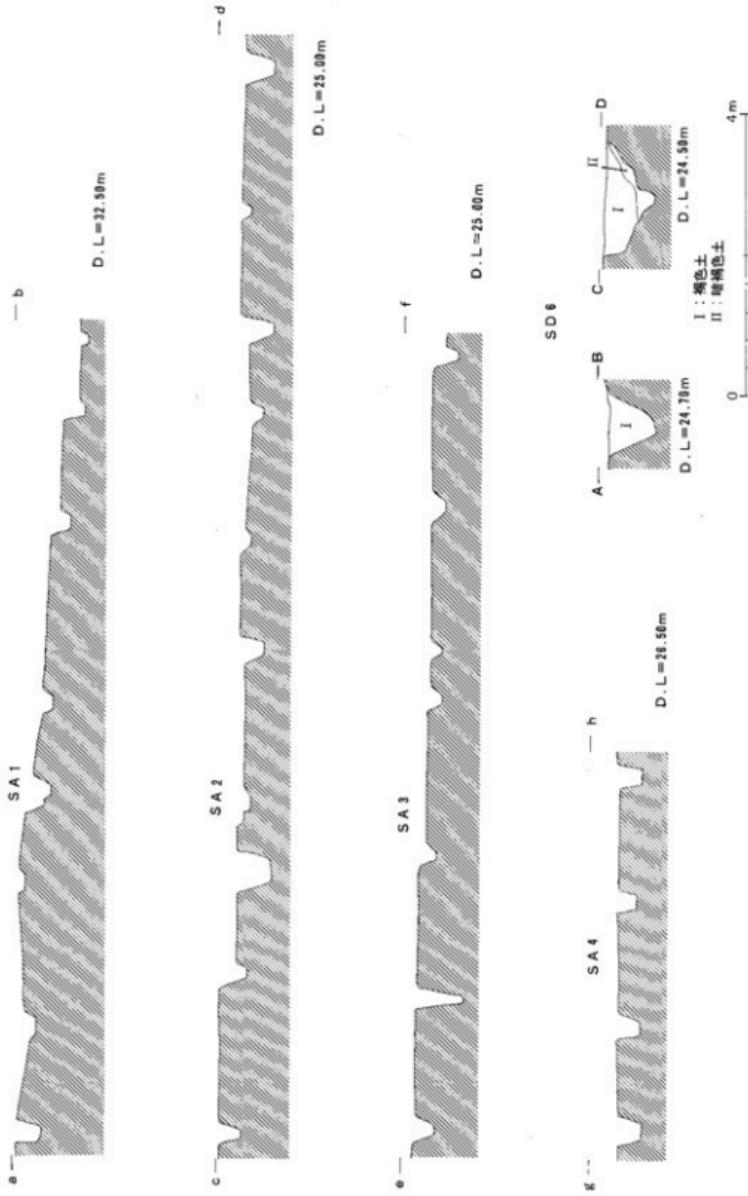
#### SD 8

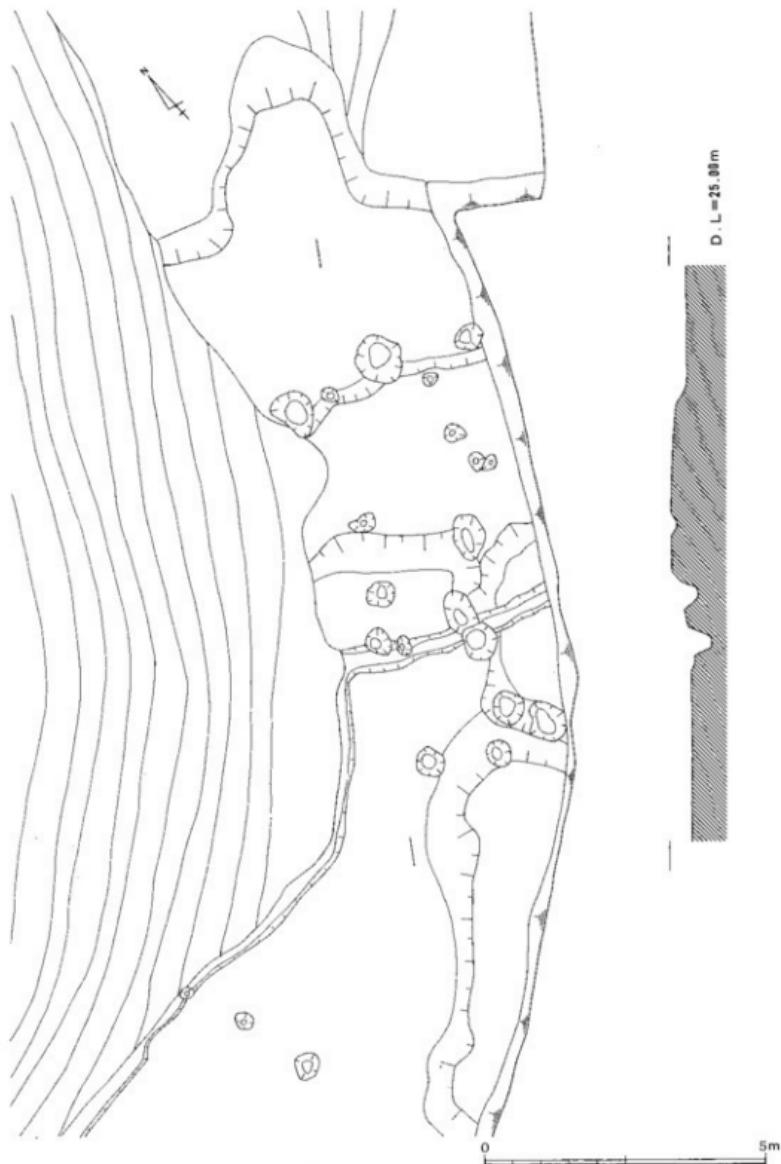
II郭A区の南西部に位置し、SA 3の南側に位置する。虎口からの進入部を区切る様に溝の北端部はI郭斜面下に接しており、南西部はSA 2との間に約2mの間隔がある。



第11図 Ⅱ-Ko A区遺構全体図

第12圖 SA 1~4、SD 6 斷面圖





第13図 虎口実測図

II郭B区と区分けしている性格を持つ溝と考えられる。長軸方向は、N-10°-Wで、長さ4.2m、幅1.7mを測る。検出面からの深さは40cmである。埋土は茶褐色土で、出土遺物は皆無である。

## II郭B区

### SB 2

II郭B区の南部に位置する。H 9-16・17区においてII層を除去した段階で検出した。建物の規模は、2間×2間の総柱の建物跡で梁間3.35m、桁行3.45mを測る。棟方向はN-79°-Wで大きく西に振っている。中間寸法は、1.35~2.1mで幅があるが、平均的には1.5~1.8mを測る。柱穴の掘り方は、円形状を呈し北側列の柱穴がやや大きくなっている。柱穴は50~60cmで、その他は30~40cmを測る。検出面からの深さは平均で40~70cmを測るが中央の柱穴は90cmと深い。埋土は单層で、茶褐色土である。出土遺物はP 1から瀬戸・美濃系陶器の底部破片と土師質土器の細片、P 2から備前焼の壺片が1点出土しているが細片で実測不可能である。

### SB 3

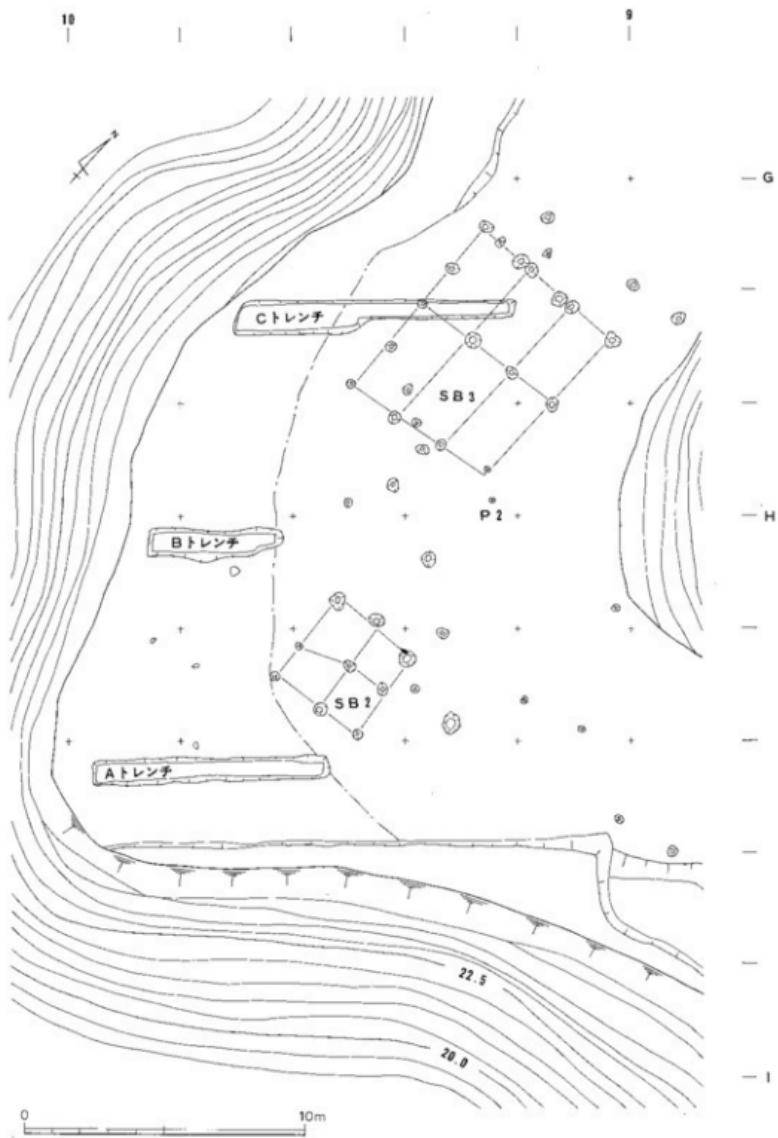
II郭B区の北西部に位置する。G 9-9・13~15・19区においてII層を除去した段階で検出した。建物の規模は、2間×3間の南北棟で梁間5.7m、桁行7.36mを測る。棟方向はN-1°-Wでほぼ北方向である。桁行西側列は柱穴が2カ所多く補助柱の可能性がある。中間寸法は、1.7~2.1mで幅がある。柱穴の掘り方は、円形状を呈し北側列の柱穴がやや大きくなっている。柱穴は40~50cmで、その他は30~40cmを測る。検出面からの深さは平均で40~70cmを測るが中央の柱穴は80cmと深い。埋土は1層で、茶褐色土である。出土遺物はP 1から備前焼の壺片が出土しているが細片で実測不可能である。

## II郭C区

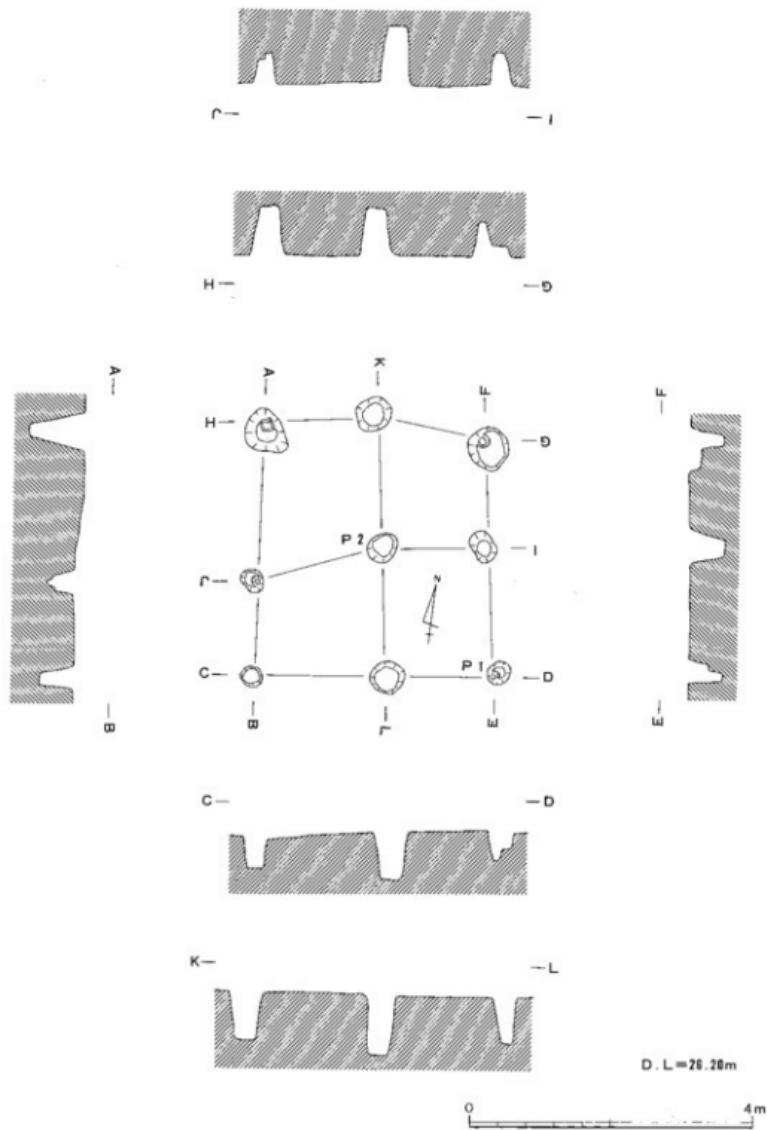
### SB 4

II郭C区の南部に位置する。G 8-21~23、G 9-2区においてII層を除去した段階で検出した。建物の規模は3間×3間の南北棟である。桁行東側列の柱穴が不明であるが、SD 2の中に残存している柱穴だとするとやや方向と中間距離が不統一である。梁間は5.4m、桁行6.15mを測る。棟方向はN-4°-Wでほぼ北方向である。中間寸法は、1.85~2.0mである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径40~60cmを測る。検出面からの深さは平均で40~50cmを測る。埋土は1層で、茶褐色土である。出土遺物は、P 1から備前焼壺片が1点出土しているが細片で実測不可能である。

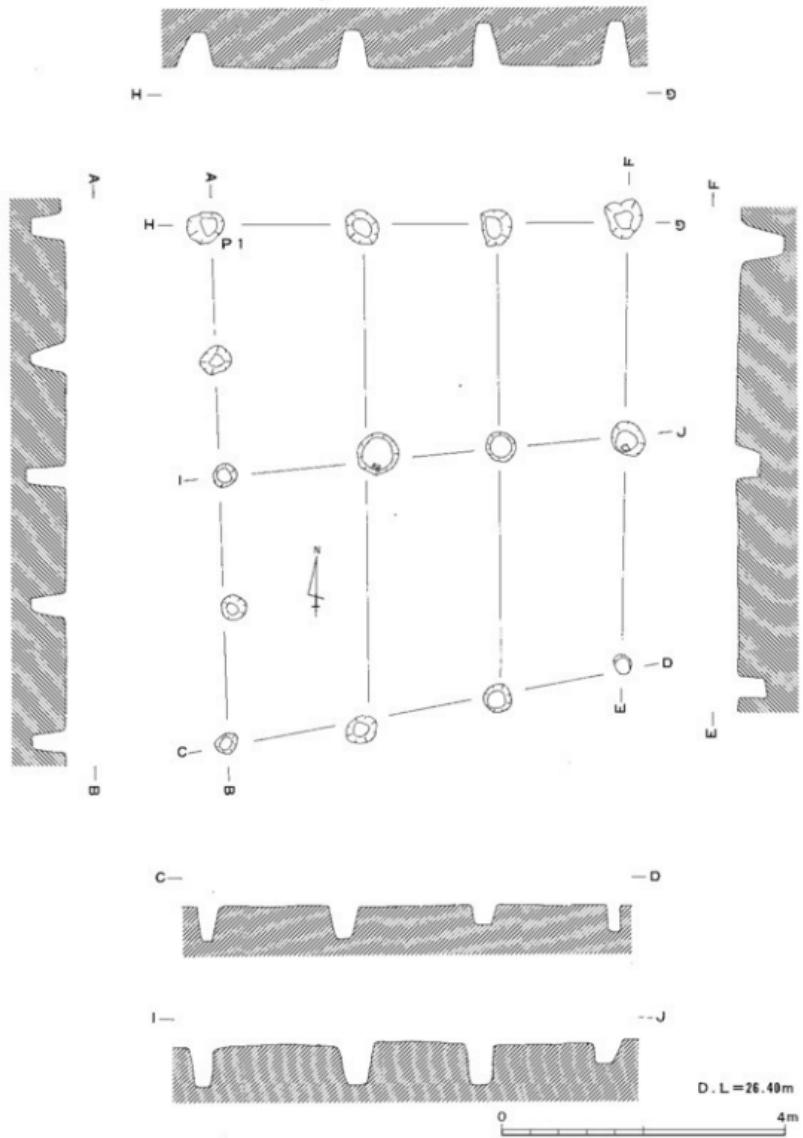
### SB 5



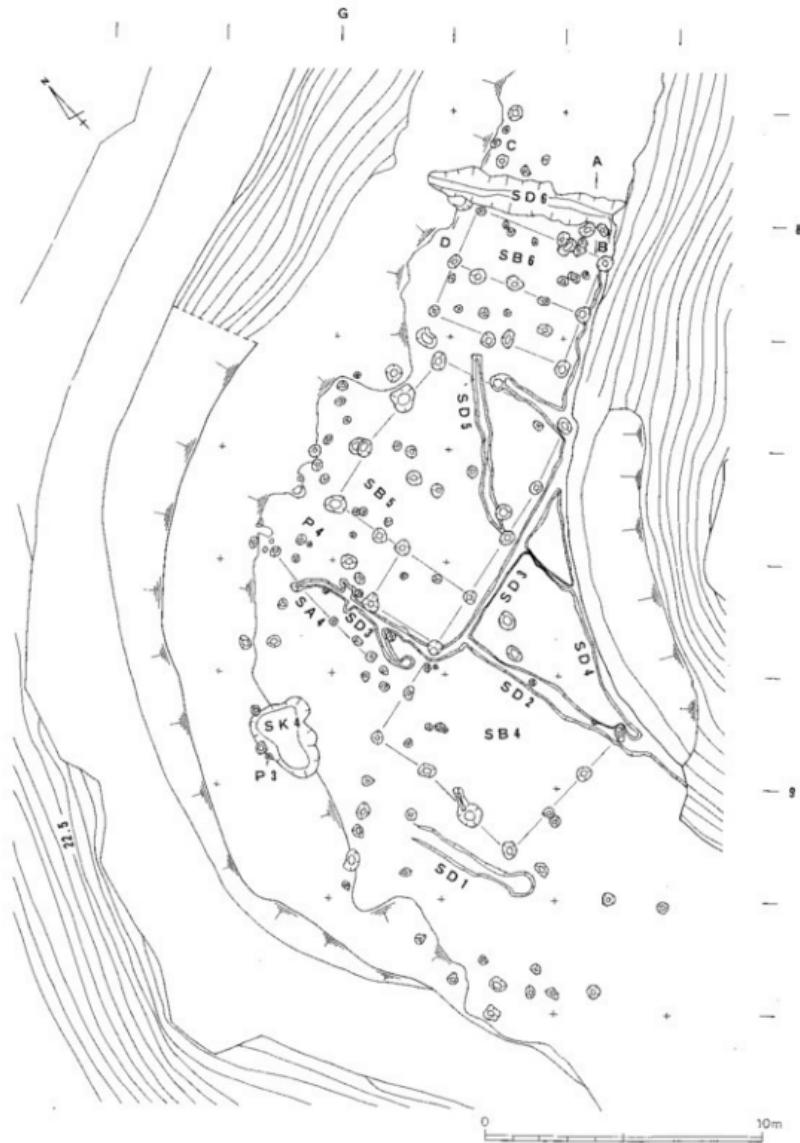
第14図 Ⅱ郭B区遺構全体図



第15図 SB 2 実測図



第16図 SB 3実測図



第17図 II-C区遺構全体図

II郭C区の中央部に位置する。G 8 - 6・7・11・12・16・17区においてII層を除去した段階で検出した。建物の規模は2間×3間の東西棟であるが西側に1間×1間の付属施設がつく。梁間は5.5m、桁行6.7mを測る。棟方向はN-75°-Wである。中間寸法は、2.0~2.9mと幅があるが桁行は2.0~2.35mを測る。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径40~70cmを測る。検出面からの深さは平均で40~70cmを測る。埋土は単層で茶褐色土である。出土遺物は、P 1から土師質土器の小皿(1)とP 3から土師質土器の杯(2・3)、P 4から備前焼の甕(20)が出土している。その他P 2から土師質土器1点、P 3から土師質土器の細片26点、備前焼片1点、輸入陶磁器の染付1点、P 5から土師質土器片1点と染付1点、P 6から備前焼片1点が出土しているがいずれも細片で実測不可能である。

#### SB 6

II郭C区の北部に位置する。G 8 - 2・3・7区においてII層を除去した段階で検出した。建物の規模は2間×2間の南北棟である。梁間は4.0m、桁行5.0mを測る。棟方向はN-22°-Wである。中間寸法は、梁間1.9~2.0mで桁行は東側列の柱穴が狭くなつており幅がある。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径30~60cmを測る。検出面からの深さは平均で20~60cmを測る。埋土は1層で、茶褐色土である。出土遺物は、土師質土器がP 1から3点、P 2から17点、P 3から11点、P 4から12点、P 5から1点、P 6から12点、P 7から11点、P 8から25点出土しているがいずれも細片で実測不可能である。

#### SA 4

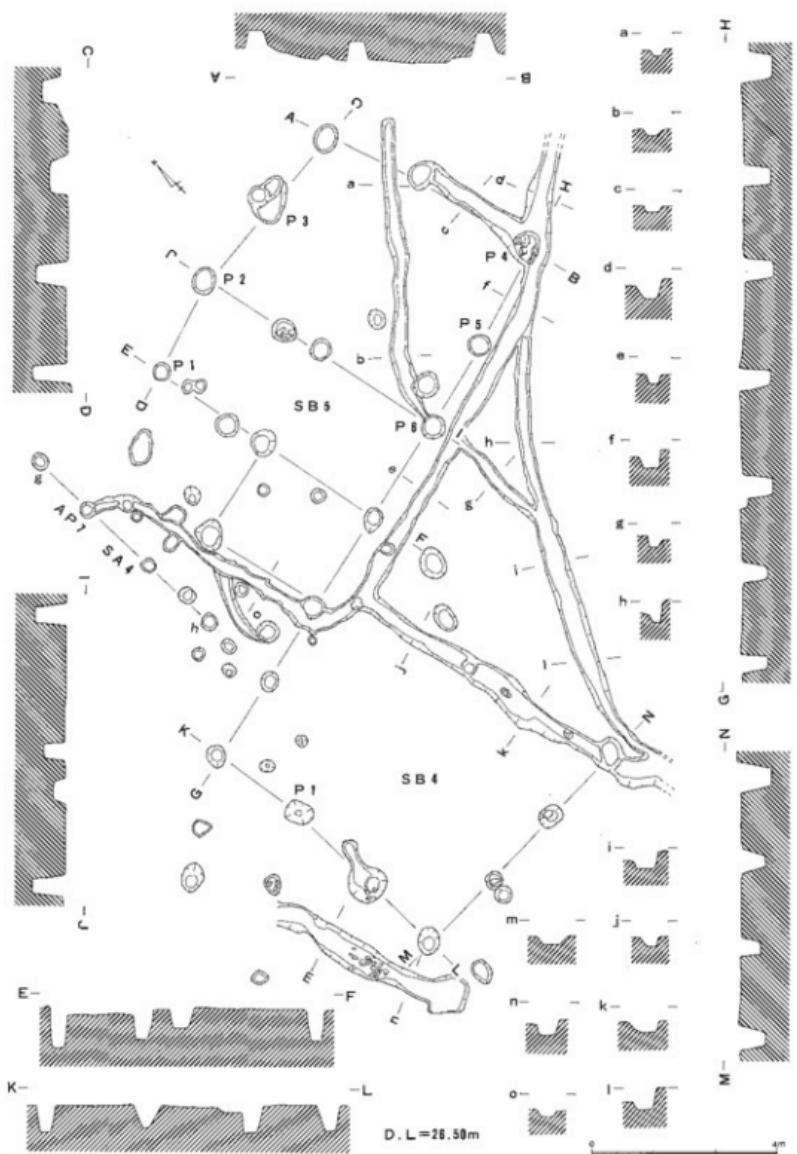
II郭のC区中央部で、SB 5の西側に位置する。SD 3の方向に沿って北部から南部にかけて柵列が延びている。4間の規模を持つ柵列で、中間寸法は1.6~2.0mを測りばらつきがある。柱穴の掘り方は円形状を呈し、直径20~35cmを測る。埋土は単層の茶褐色土で、遺物は、AP 7から(5)の白磁皿が出土している。

#### SK 4

II郭のC区西部、SA 4の西側に位置する。II層除去後、F 8-25区において検出した。平面プランは、長径3m、短径1.65mを測り不正楕円形を呈する。西側に傾斜しているが、検出面からの深さは東側の部分で40cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、茶褐色土である。埋土中からの遺物は、備前焼・土師質土器が出土しているが細片で実測不可能である。

#### SD 1

II郭のC区で、SB 4の南側に位置する。G 9-1・2区においてII層除去後検出した。SB 4に伴う溝と考えられる。長さは4.5m、幅40~70cmを測り、検出面からの深さは20~25cmである。埋土は、茶褐色土1層で、遺物は染付の碗(44)、産地不明の壺(45)が出

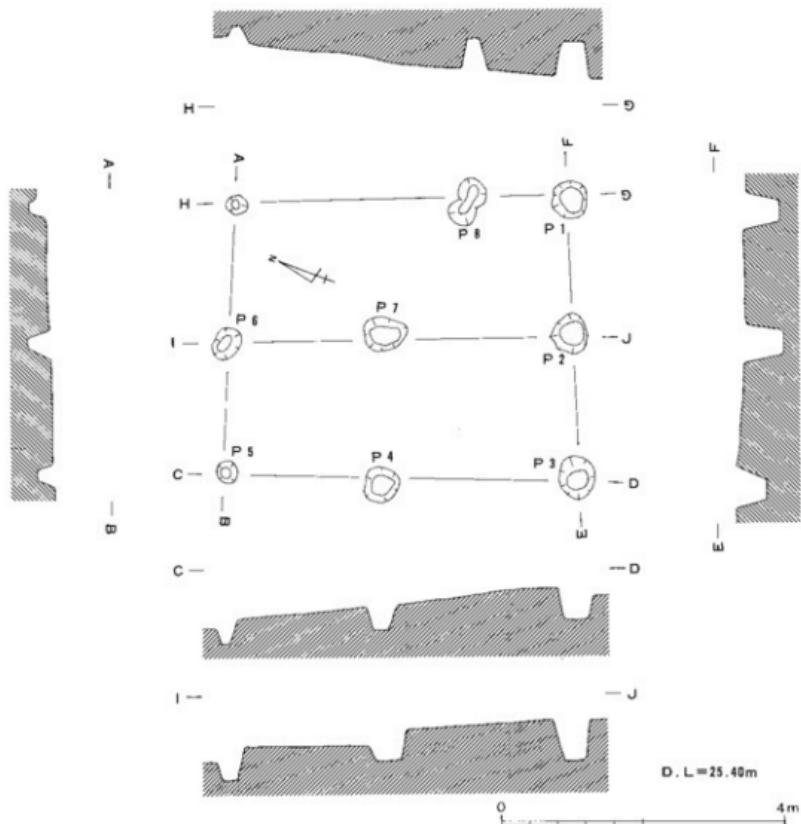


第18図 SB 4・5、SA 4、SD 1～5 実測図

土している。その他、備前焼の細片が2点出土しているが実測不可能である。

## SD 2

II郭のC区で、SB 4の東側に位置する。G 8 - 17・22・23区においてⅡ層除去後検出した。SB 4の平行に伴う溝で、北部はSD 3に、南部ではSD 4に接続する。長さは8m、幅35~65cmを測り、検出面からの深さは20~25cmである。底面のレベルは、北部で25.93m、南部で25.97mを測りほぼ同レベルである。埋土は、茶褐色土1層である。遺物は、土師質土器の皿(46・47)、鍋(48)、白磁の皿(49・50)、備前焼底部(61)が出土している。その他、備前焼壺の破片9点と土師質土器2点が出土しているが細片で実測不可能である。



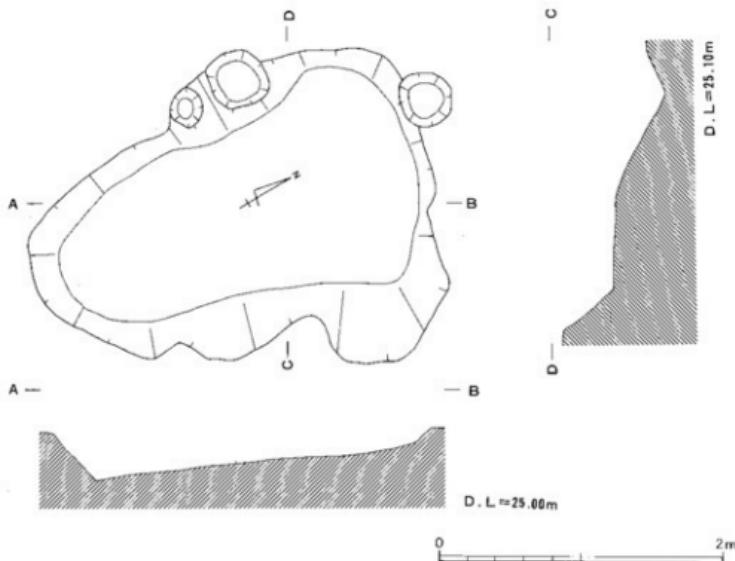
第19図 SB 6 実測図

### SD 3

II郭のC区で、SB 5を取り囲むように掘り込まれている。F 8 - 20、G 8 - 7・12・16・17区においてII層除去後検出した。SB 5に伴う溝で、東部はSD 4に、南部ではSD 2に中央部ではSD 5に接続する。長さは18m、幅30~40cmを測り、検出面からの深さは15~20cmである。底面のレベルは、北部で25.9m、南部で26mを測り北部がやや深い。埋土は茶褐色土1層である。遺物は、備前焼擂鉢(51)、白磁の皿(52)が出土している。その他、染付の小片が1点、土師質土器5点、備前焼壊破片6点が出土しているが細片で実測不可能である。

### SD 4

II郭のC区で、SD 2の東側に位置する。I郭の斜面下を取り囲んで残存する。G 8 - 3・8・13・18・23区において、II層除去後検出した。北側はSB 6に接し、SD 3の東側コーナー部で同じ溝になり、南側部分でSD 2に接続する溝である。中央部ではSD 5に接続する。長さは19m、幅30~55cmを測り、検出面からの深さは20~40cmである。底面のレベルは、北部で25.85m、南部で26.05mを測り北部がやや深い。埋土は茶褐色土1層である。遺物は、白磁の皿(53~55)が出土している。その他、土師質土器の細片が13点と備前焼片が出土しているが実測不可能である。



第20図 SK 4 実測図

## SD 5

II郭のC区で、SB 5の中に位置する。G 8 - 7・12区において、II層除去後検出した。南端はSD 4の中央部からSD 3を通り、SB 5の建物の中央部を北東に延びる溝である。長さは8m、幅30~40cmを測り、検出面からの深さは15~25cmである。底面のレベルは、北部で25.89m、南部で26.01mを測り北部がやや深い。埋土は茶褐色土1層である。遺物は土師質土器の細片が5点出土しているが実測不可能である。

## SD 6

II郭のC区で、SB 6の北東部に位置する。G 7 - 21~23区において、II層除去後検出した。II郭C区の建物群を、仕切るような南北に走る溝である。長さは7m、幅は80~120cmを測る。検出面の深さは、68~71cmである。底面のレベルは北部で23.72m、南部で23.89mを測り北部が深くなっている。埋土は2層で、I層は褐色土、II層は暗褐色土である。遺物は、青磁皿(56)、青磁碗(57・58)、備前焼の小壺(59)、鉄釘(60)が出土している。その他白磁片6点、土師質土器840点、備前焼壺片7点、鉄釘1点、スラグ片が出土しているが、いずれも細片で実測不可能である。

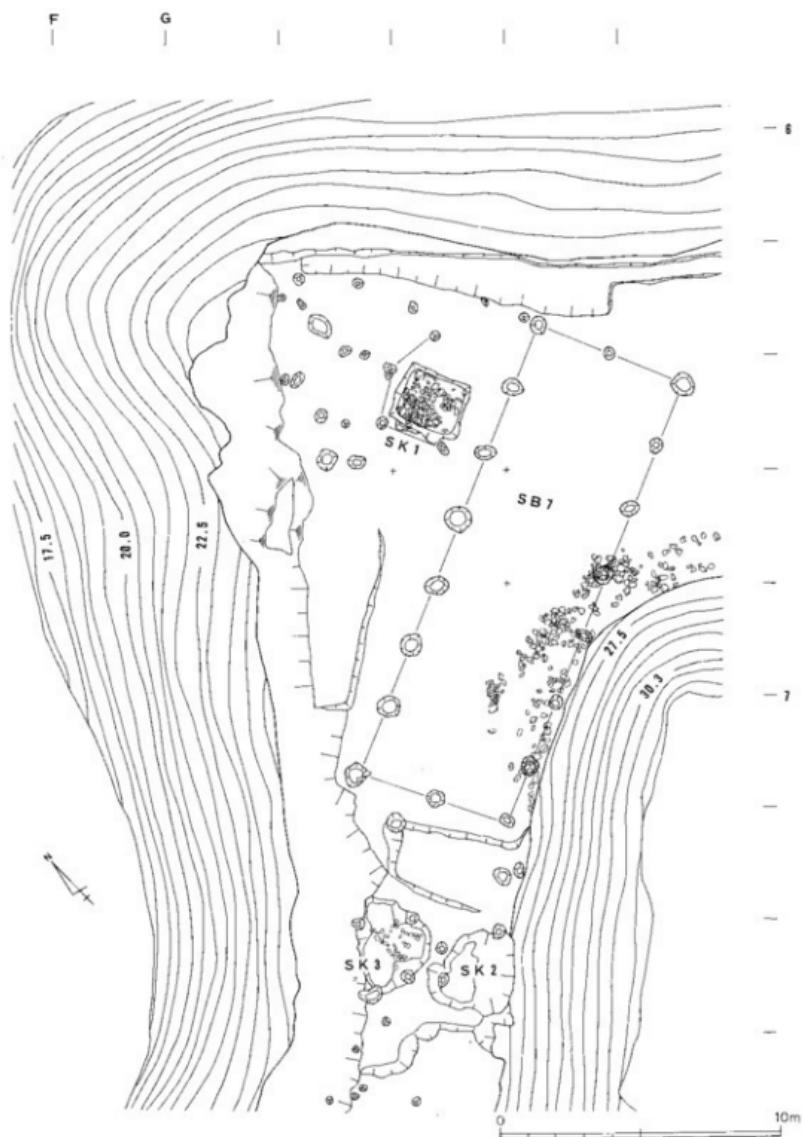
## II郭D区

### SB 7

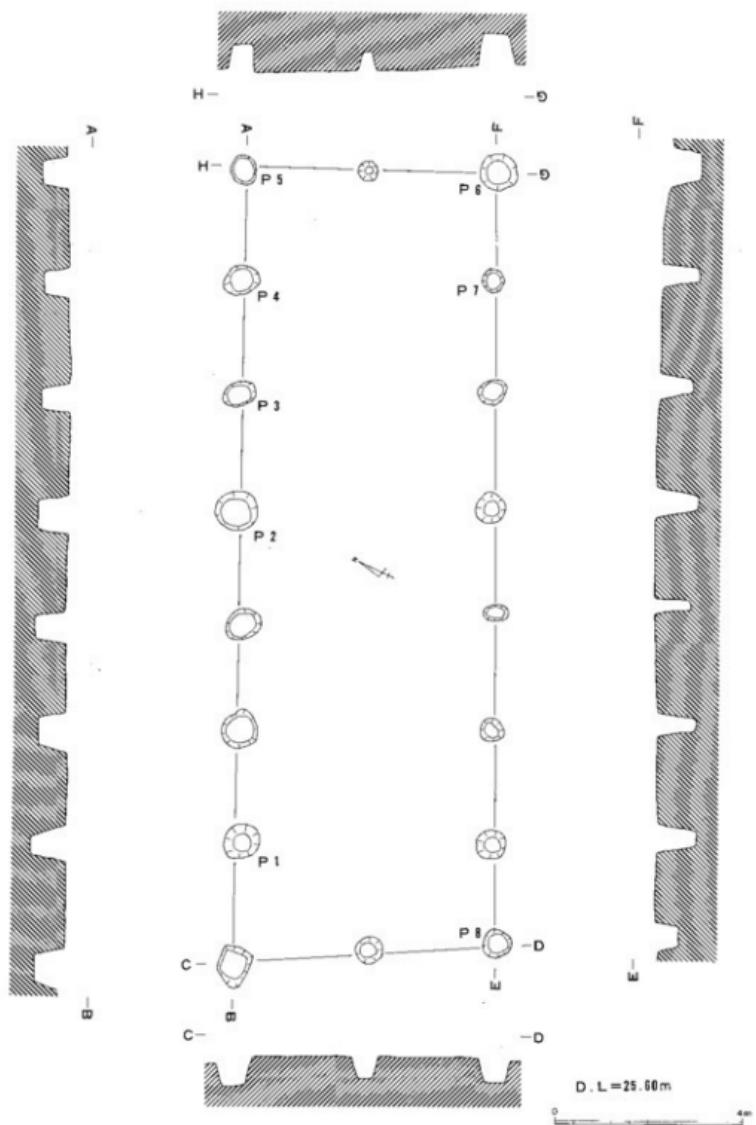
II郭D区の北東部に位置する。II層を除去した段階で検出した。建物の規模は2間×7間の東西棟の大規模な建物である。梁間は5.7m、桁行17.16mを測る。棟方向はN-67°-Eである。中間寸法は、梁間2.6~2.9mで桁行は2.2~2.5mである。柱穴の掘り方は、円形状を呈し柱穴の大きさは直径45~90cmを測る。検出面からの深さは平均で50~90cmを測る。埋土は1層で、茶褐色土である。遺物は、P 4から(4)の土師質土器の杯、P 5から(6)の白磁皿、P 7から(21)の備前焼壺が出土している。その他P 1から染付片1点、P 2とP 3から備前焼壺片、P 6から土師質土器2点と備前焼壺片1点、P 8から備前焼片が出土しているが細片で実測不可能である。

### SK 1

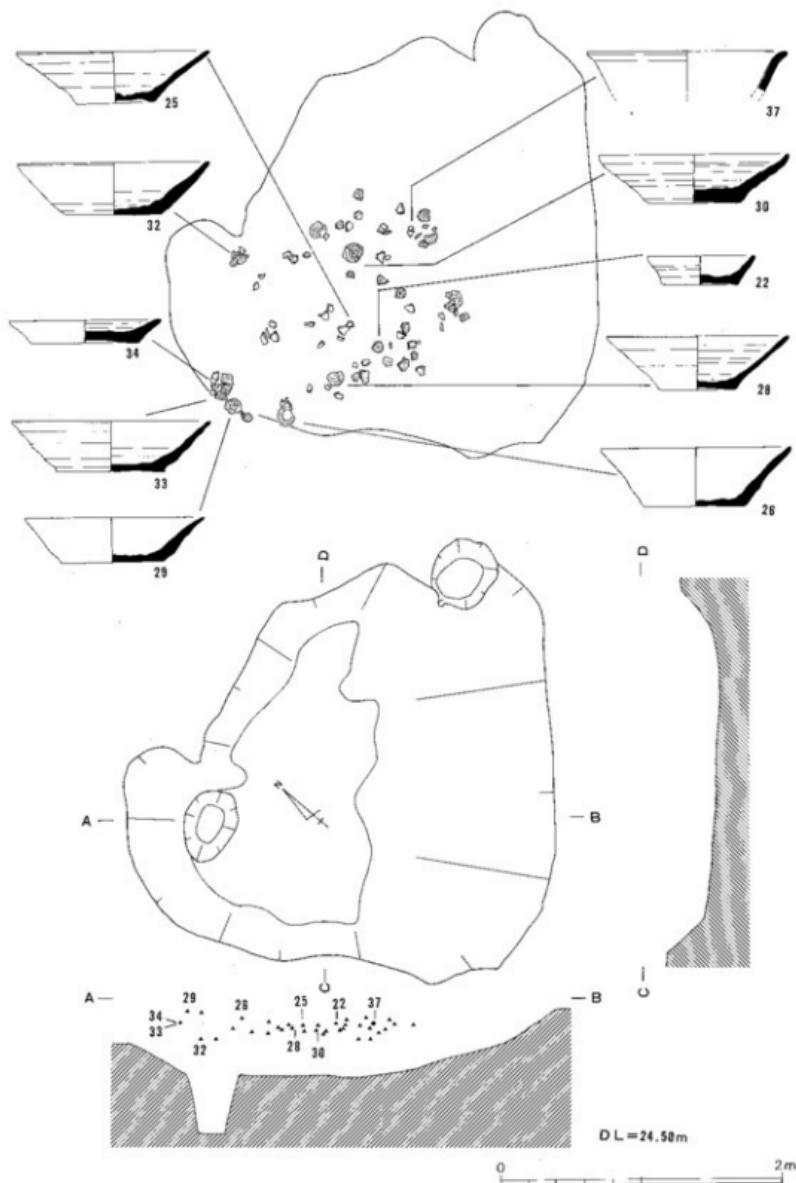
II郭のD区の北東部で、SB 7の北側に位置する。II層除去後、G 6 - 13区において検出した。平面プランは、長径2.4m、短径2.2mを測り方形を呈する。検出面からの深さは、北部で50cm、南部で30cmを測り断面形は逆台形状を呈する。底面はやや北側に傾斜しているが、ほぼ平坦で標高24.7mを測る。埋土は単層で茶褐色土である。周囲にピットを確認しており、本土坑に伴うものと考えられる。ピットの検出面からの深さは、KP 1が12cm、KP 2が40cm、KP 3が20cmを測る。遺物は、土師質土器の底部破片(7~10)、天目茶碗(11)、青磁菊皿(12・13)、染付皿(14~17)、染付碗(18)、備前焼壺(19)、備前焼壺底部(43)が出土している。その他土師質土器片



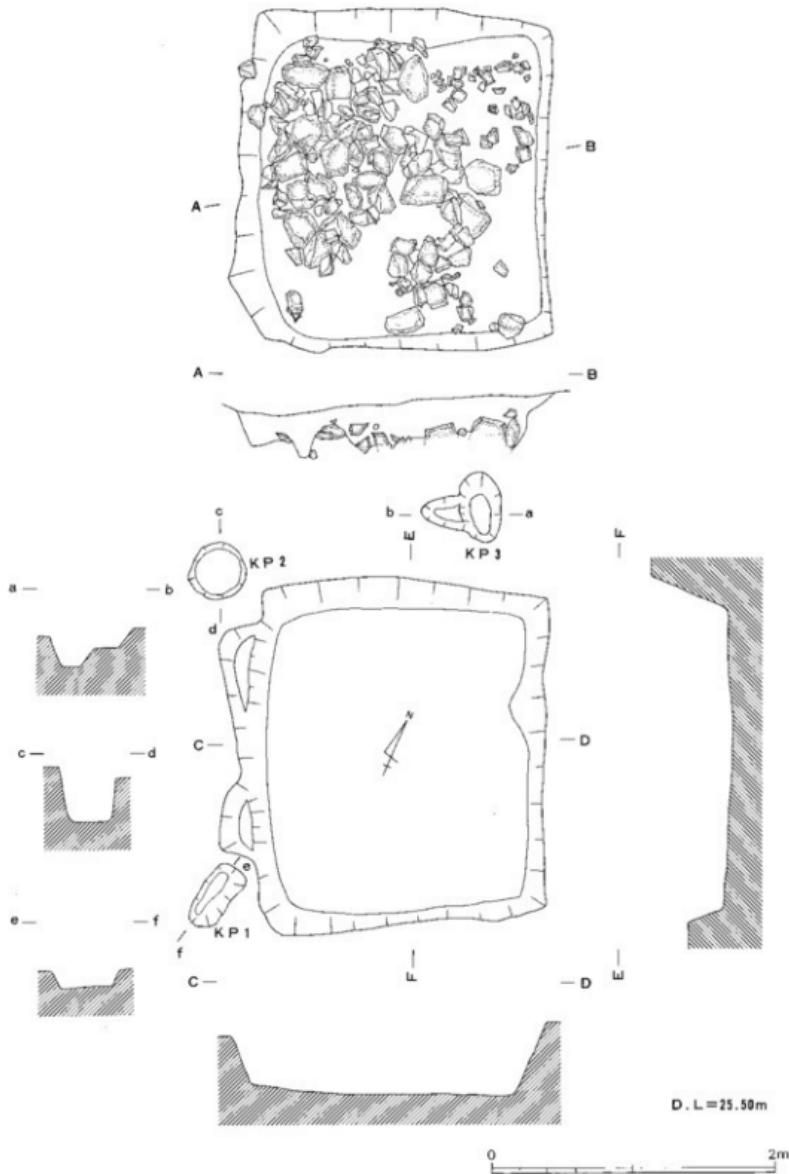
第21図 II郭D区遺構全体図



第22図 SB 7 実測図



第23図 SK 1 実測図



第24図 SK 2 実測図

309点、備前焼片24点、染付片6点、青磁片3点、白磁片2点、天目茶碗1点が出土しているが細片で実測不可能である。その他埋土中から人頭大の碟が出土しているが、床面からは遊離しており土坑に廃棄されたものと考えられる。

#### SK 2

II郭のD区で、基壇状遺構の西側に位置する。II層除去後、G 7-13区において検出した。平面プランは、長径3m、短径2.5mを測り不正橢円形を呈する。検出面からの深さは、30cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、南壁から東壁は緩やかに立ち上がる。底面の標高は、23.97mを測る。埋土は単層で茶褐色土である。遺構内にピットを2個床面で検出しており、本土坑に伴うものと考えられる。埋土中からの遺物は、土師質土器(22~36)の完形品が多く出土し、その中で22・23は小杯で24から36までは杯である。(37)は青磁碗、(38)は備前焼擂鉢である。破片を含めると土師質土器1542点、青磁1点、備前焼2点、鉄釘1点が出土しているが細片で実測不可能である。その他床面直上から埋土中程までに、拳大から人頭大の碟が出土しており一部火を受けて赤化しているものも認められる。

#### SK 3

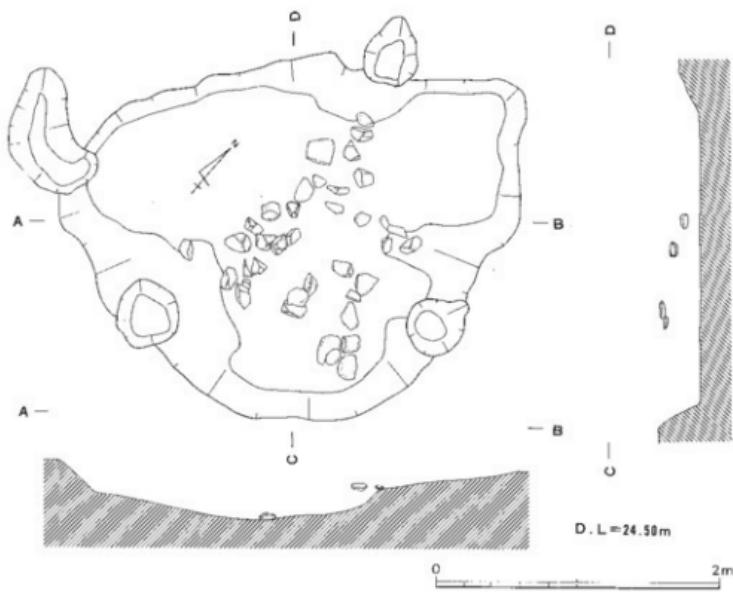
II郭のD区で、SK 2の北側に位置する。II層除去後、G 7-7・8・12・13区において検出した。平面プランは、長径3.3m、短径2.5mを測り不正橢円形を呈する。検出面からの深さは40cmを測り、断面形は船底形を呈し、底面から北壁は緩やかで、南壁は比較的急傾斜で立ち上がる。底面の標高は、23.87mを測る。本遺構に伴ってピット4個を肩から壁にかけて検出している。検出面からの深さは40~60cmを測り、埋土も同じで茶褐色土である。埋土中からの実測可能な遺物は、土師質土器小杯(39)、土師質土器杯(40~42)が出土している。その他破片で土師質土器530点、備前焼6点、白磁2点、染付1点が出土しているが細片で実測不可能である。

#### 基壇状遺構

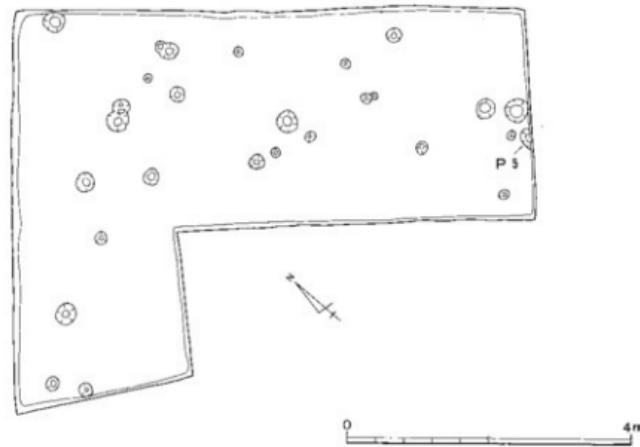
II郭D区の中央部SB 7の西側に位置する。SB 7とSK 2・3に挟まれるように、地山を削り出して構築されており、I郭から南北方向に削り出され平坦部を形成している。長さは5m、幅2.5mを測り、高さは40~60cmである。平坦部には円形状のピットが二カ所掘り込まれている。ピットの埋土は褐色土の単層で、直径30~40cmで深さは40~50cmを測る。出土遺物は皆無である。

#### 土壘状遺構

II郭D区の北部、SB 7の北側に位置する。G 6-17・22区において、II層を除去した後検出した。地山を削平し土壘の基礎の部分を構築し、盛土部分は確認することが



第25図 SK 3 実測図



第26図 Ⅲ郭遺構全体図

できなかった。北東部分は削平はされずG 6-17区付近で消滅している。SB 7の建物に沿って北東から南西にかけて構築され、長さ7m、幅は2~3mを測り南西部が狭くなっている。

### III 郭

II郭の北部に残存する曲輪である。III郭は、畠地造成工事によって大部分が削平されているため、残りの部分にL字状のトレンチを設定し調査を行った。I層を除去後ピット群を検出した。約24個のピットを検出したが、狭いトレンチ調査で建物の確認は不可能であった。P 5から土師質土器の小皿(63)が出土している。

## VII 出土遺物

芳原城跡は、昭和58年に実施された堀状地形部分の発掘調査で、木製品を始めとする遺物が多量に出土している。今回は、山城部分の調査であったが前回同様に出土遺物の量は多く、県内で発掘調査された中世城郭と比較しても量的に内容のあるものである。出土遺物の総点数は、35,640点である。その中でも土師質土器の量が最も多く細片も含め33,377点出土しており土器総点数の93.6%を占め、現在まで調査されている山城を含め、一般的な出土状況を呈している。器種構成としては、小皿・小杯・皿・杯・鍋・釜が認められ、鍋・釜は少なく29点である。瓦質土器は、若干出土しているのみで、鍋と擂鉢の計14点である。輸入陶磁器は、577点出土しており、白磁が最も多く303点で次に青磁182点、染付が92点の割合で出土している。全体の中では1.6%を占めている。今回輸入陶磁器の中で注目されるものとして赤絵の碗が1個体出土している。国産陶器は、1,494点で備前焼1,448点、瀬戸・美濃系陶器38点、常滑焼8点である。全体の中で4.2%を占めているが、中でも備前焼が多く擂鉢・壺・甕がその多くを占めている。土器・陶磁器類以外では、178点の遺物が出土している。土製品で羽口・土錘・石製品は硯・砥石・茶臼・投弾・金属製品は篩り金具や銅碗・波来錢などが出土している。今回実測して掲載できた遺物は、遺構内出土が69点、遺構外出土が469点で計538点である。尚、法量等の詳細は、別表出土土器法量表を参照願いたい。

### 1 遺構内出土遺物（第27～30図）

SB 5・7、SA 4、SK 1～3、SD 1～4・6、ピットの各遺構から遺物が出土している。量的には数が少ないが、SK 2から土師質土器がまとまって出土している。土師質土器については、遺構外出土遺物での分類を使用し説明をして行くこととする。

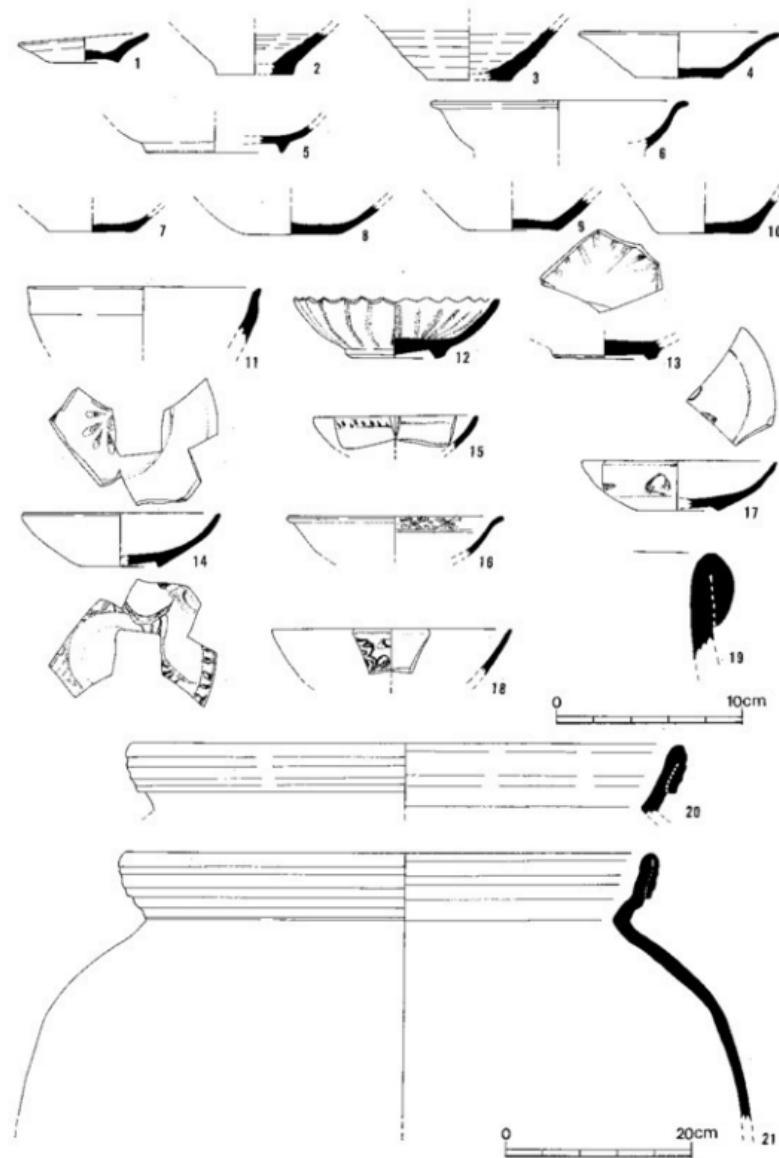
#### 1) 掘立柱建物跡出土遺物

SB 5（第27図1～3・20）

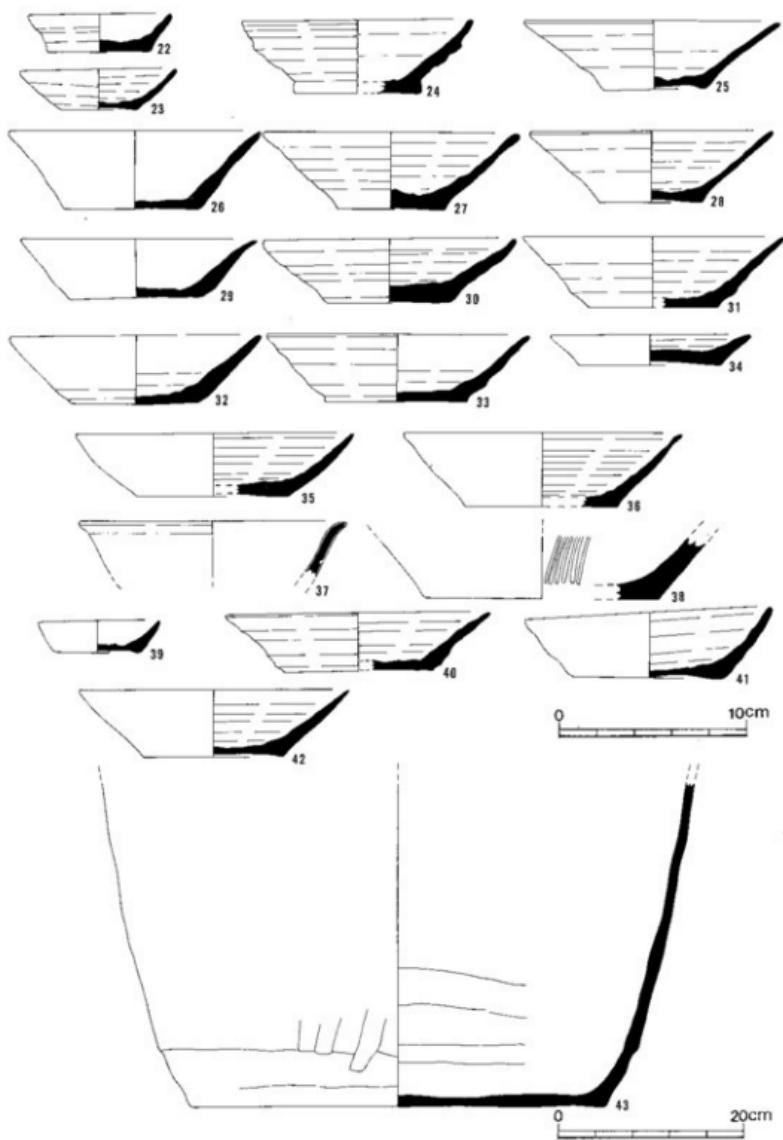
1は土師質土器の小皿である。ロクロ成形で、体部は大きく開き底部は回転糸切り調整である。2・3は土師質土器の杯であるが口縁部が欠損している。いずれもロクロ成形で、2は内面、3は外外面にロクロ痕が残る。底部は回転糸切りで底径は4.2cm、4.5cmと狭い。20は備前焼の甕である。

SB 7（第27図4・6・21）

4は土師質土器の杯である。口径が10.5cmでやや小振りの杯である。口縁部が外反し底部は回転糸切りが施されるが摩耗している。6は口縁部破片であるが白磁端反り



第27図 SB 5・7、SA 4、SK 1出土遺物 (1~3・20) (4・6・21) (5) (7~19)



第28図 SK 1・2・3出土遺物 (43) (22~38) (39~42)

の皿である。21は備前焼の甕である。口縁部は幅の広い玉縁を呈し、外面には凹線3条を巡らす。口縁部下にも強いヨコナデで凹線状になる。口縁部内面も強いヨコナデで、胴部内面は横方向のナデが施される。口縁部内面から外面及び肩部に自然釉がかかる。21の破片の一部はSK 1 から出土したものと接合できた。

## 2) 横列跡出土遺物

### SA 4 (第27図5)

5は白磁の皿の底部破片である。端反りの皿で全面白濁色の釉が施され、貫入は認められない。高台は、疊付の内外面を削り狭くし、砂が溶着している。

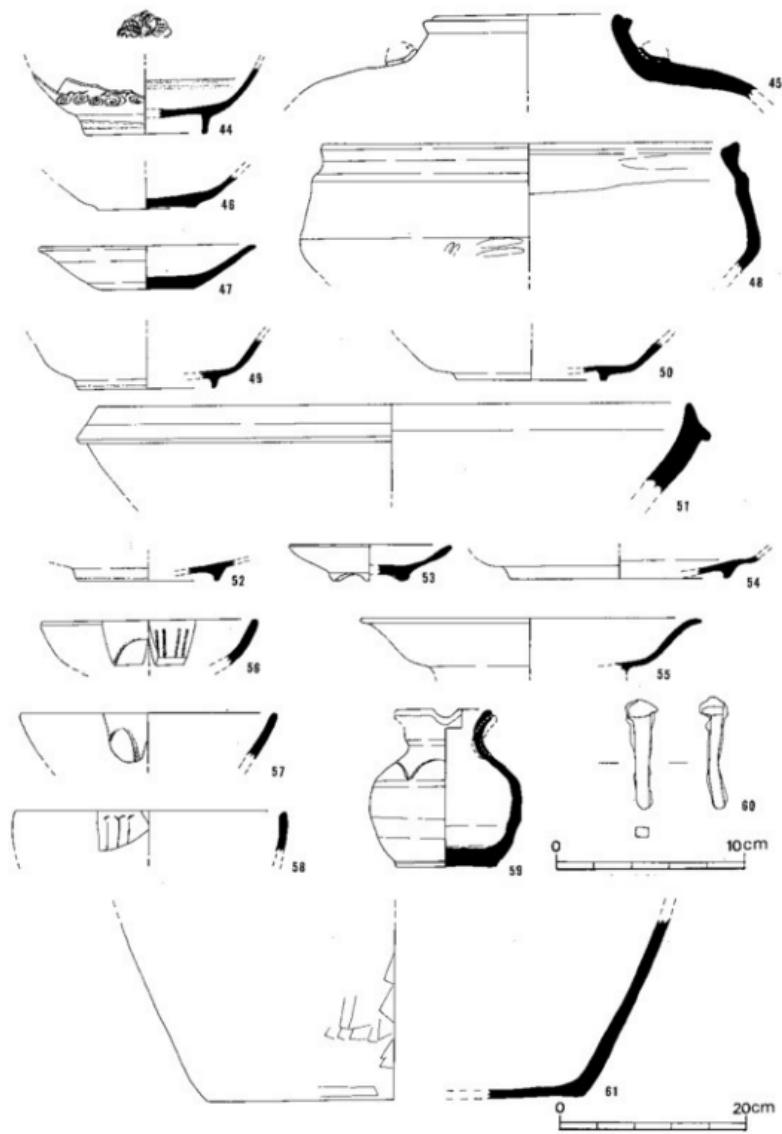
## 3) 土坑出土遺物

### SK 1 (第27図7~19・43)

7~10は土師質土器である。すべて口縁部が欠損しているが、ロクロ成形で底部外面には回転糸切り痕が残る。底径は7のみ4.7cmで8~10は5.0~5.1cmを測りやや底径が広くなるタイプである。11は天目茶碗の口縁部破片であるが、やや胎土が厚く口縁部にくびれを持つ。12・13は青磁の菊皿である。内外面に丸ノミ状工具によってソギを入れている。内外面淡い青緑色の釉が施され貫入があり、疊付けから外底にかけて露胎である。14~18は染付の皿である。14は基筒底の皿で、口縁部外面は波瀾文帶で内面は界線、体部外面は芭蕉葉文で見込みは界線中に捻花が描かれる。高台部から外底にかけて露胎である。15は口縁部破片の染付で、残存部は全面施釉である。内外面に密な貫入があり口縁部の外面には波瀾文の崩れが染付けされる。16は口縁部内面に四方櫛文が施された染付の皿である。17は基筒底の皿で底部外面は露胎である。見込みは界線中に捻花が描かれ、外面は淡いコバルトで文様を染付けている。18は口縁部の細片で文様が明確でない。19は備前焼の甕で、口縁部は玉縁状を呈する。43は備前焼の甕底部破片である。外面下端部は縦位と横位の鋸削りが施される。

### SK 2 (第28図22~38)

22~36までは、土師質土器すべてロクロ成形で底部は回転糸切りが施される。22・23は小杯で、口径7.6・8.5cmで小杯の中ではやや大振りの製品である。小杯の分類では、22はC類、23はD類にはいる。24~33・36は杯である。24は底部が円盤状の高台を呈しこの時期としてはやや珍しい形態である。さらに外面はロクロ痕が明瞭に残り杯の分類ではC-1類にはいる。25・27・28は口径が13cm以上で、底径が5.5cm前後を測り口径に対して底径が狭いタイプである。胎土もやや灰白色に近い色を呈し杯の分類ではA-1類にはいる。26・29~33・36は、体部が直線的に立ち上がり、器高指数が25.0以上で口径は13~14cmで底径が7cm前後となり、やや口径に比



第29図 SD 1・2・3・4・6出土遺物 (44・45) (46~50・61) (51・52) (53~55)  
(56~60)

して底径が広くなるタイプである。杯の分類でC-2類にはいる。この土坑は、実測不可能な遺物もこのC-2類にはいるものが多く一括して出土している。34・35は皿である。34はやや小振りの皿で、口径10.9cmを測り体部は短く外上方に立ち上がる。皿の分類でA-1類にはいる。35は坏と分類が明確にできないものであるが、器高指数が22.36を示し皿の範疇で考えておく。皿の分類でA-2類である。37は青磁の碗である。口縁部が外反し内外面貫入がはいる無文の碗である。38は備前焼擂鉢の底部破片で、7本単位の条線が下から上へ施される。

#### SK 3 (第28図39~42)

39~42までは、土師質土器である。39は小杯で口径6.6cmである。40~42は杯で、口径13~14cmでやや大振りである。体部から口縁部にかけての形態は、直線的なものからやや外反するもの内弯するものと差異が認められるが、底径が7.6cmから8.0cmを測り杯の分類でC-2類にはいる。

#### 4) 溝跡出土遺物

##### SD 1 (第28図44・45)

44は染付の碗である。体部外面には密な唐草文と内面には2重の界線、見込みには蓮花が染付けられる。高台部は外面2重の界線が施され疊付けは露胎である。45は產地不明陶器の壺である。口縁部は肥厚して端部は凹線状になり、肩部に貼り付けの耳がつく。内外面、胎土とも備前焼のように赤褐色を呈している。

##### SD 2 (第28図46~50・61)

46・47は土師質土器の皿である。ロクロ成形で底部に回転糸切りが残り、底径が5cm代で造構外の分類に当たはまらない。48は鉢で、口縁部は肥厚し内傾する。肩部は突帶が消滅し、胴部下半には平行のタタキが施される。49・50は白磁の皿で、底部破片であるが貫入のはいらない白濁色の釉が全面にかかり疊付けのみ露胎である。50は疊付けが露胎で砂が溶着している。61は備前焼の壺底部破片である。胴部外面下半は上から下に、下端部は横方向に鎧削りが施される。

##### SD 3 (第29図51・52)

51は備前焼の擂鉢で、体部はやや内弯し口縁端部は拡張される。口縁部外面に胡麻ふりで片口部が残る。52は白磁の皿である。底部破片で貫入がはいらない白濁色の釉がかかり疊付けは露胎である。

##### SD 4 (第29図53~55)

53~55までは白磁の皿である。54・55は白磁の壺反りの皿で、やや大振りの製品である。53は高台部がアーチ状を呈し、体部は内弯しておさまる。全面に施釉され、見込みに目跡が残る。

## SD 6 (第29図56~60)

56は青磁の皿で、外面丸ノミ状工具により連弁状の文様が施され、内面は同工具によりソギを入れている。青緑色の釉がかかり貫入は認められない。57は青磁碗で、外面に丸ノミ状工具による蓮弁文が施される。貫入は認められない。58は青磁碗で、外面に線描きの細蓮弁文が施される。内外面に貫入がはいる。59は備前焼の小壺で、片口がつき胴部上位に浅い一条の篦描きの沈線が施され、底部は回転糸切りである。60は鉄釘で鋭角に頭部が折れる折頭釘と称されるものである。下端部は欠損しており残存長5.6cm、重量は11.3 gである。533は、渡来銭の永楽通寶である。

## 5) ピット群出土遺物 (第30図62~67)

P 1~5のピット埋土から実測可能な遺物が出土している。

P 3から出土の62は、染付の碗である。口縁部内外面に2重の界線が施される。体部は内弯して外上方に立ち上がる形態である。

P 5の63は、土師質土器の小皿で底部外面は回転糸切り痕が残り、小皿の分類でA類にはいる。

P 4の64は、染付の皿である。口縁部は外反し高台型付けは露胎である。体部外面は牡丹唐草文で、口縁部内面には界線、見込みは2重の界線中に玉取獅子が染め付けられる。

P 1の65は、フイゴの羽口である。円筒形の羽口で、直径9.2cm、中央の孔が2.2cmを測り胎土は粗い。口の部分に硅酸質の付着が認められる。

P 2の66は、陶器の壺であるが産地不明である。肩部に双耳が貼付される。内外面赤褐色を呈し、備前焼の様相を呈するが器壁が薄い。外面にはヨコナデが残る。

P 2の67は、66と同個体と考えられ産地不明陶器の壺の底部破片である。底部外面は、やや上げ底で格子のタタキが施される。

## 2 遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は、I郭II層からIII層、II郭II・IV層の包含層出土のものが多い。ここでは遺構外としてまとめて種類・器種ごとに個々の特徴を抽出し概略を述べて行くことにするが、在地産の供膳具である土師質土器については形態分類を行うことにする。国産陶器は産地別、輸入陶磁器は青磁・染付・白磁の種類別に分けて説明して行く。尚、土器・陶磁器類に関して、法量・出土地点・層位の詳細は出土土器法量表を参照願いたい。

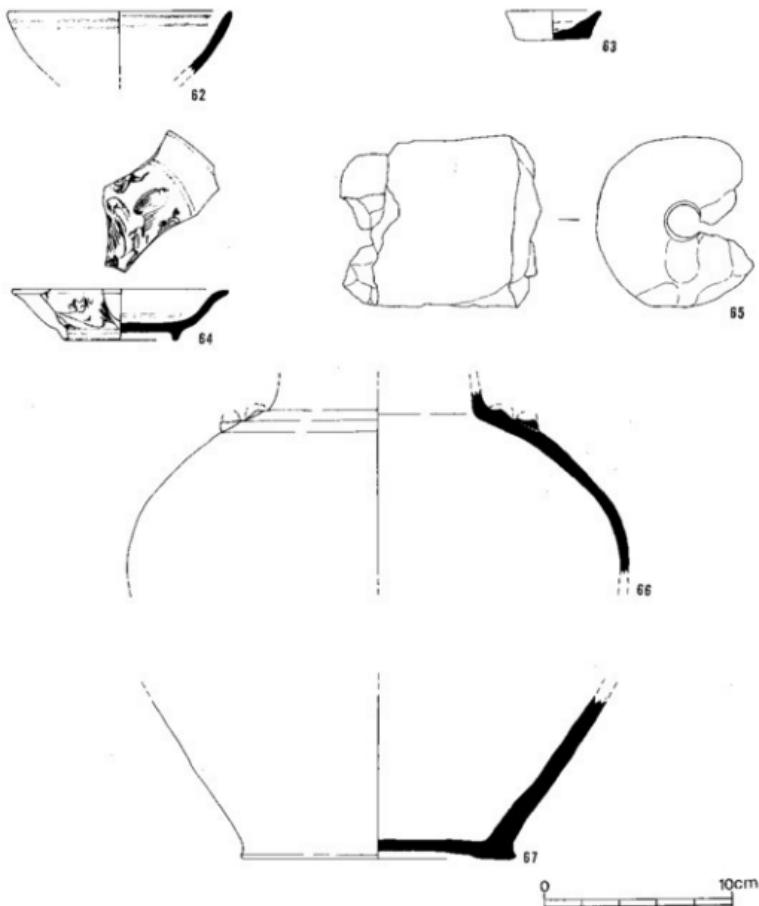
## 1) 土師質土器

土師質土器は、小杯・小皿・杯・皿の供膳具、鍋・釜の煮沸具を中心に出土している。ここでは供膳具の小皿・杯・皿について、法量・形態等の特徴から分類を行った。土佐

の土師質土器は、これまでの土器研究で口径と底径の比率の差（底径指数）で時期差が現れていることなどから、今回の分類は底径指数を主に用い分類の基準とした。分類外の製品については個々の特徴を説明していくことにする。供膳具の土師質土器は皿の一部を除き、すべてロクロ成形で底部に回転糸切りが施される。

小杯（第31図68～77）（第32図132）

小杯は、杯の小型品としての目的で製作された器種とした。ロクロ成形で底部外面



第30図 Pit群出土遺物

に回転糸切りが施される。小皿との差異が明確でないものも存在するが、形態が体部から口縁部にかけて外反するものである。口径に対して底径の比率（底径指数）が50%代になり、小皿は60～70%と明瞭に区別できる。口径は、5.7～7.4cmで器高は2cm以上3cm以下である。70のように底部が円盤状高台の様な形態を持つものも存在する。132は箱形の器形で特異なタイプである。

#### 小皿（第31図78～127）（第32図128～131・133～135）

小皿は器高で大きく分類し、口径・底径指数等で細分類を以下の通り行った。

##### 小皿A類………（78～84）

器高が1cm代での中でも1.5cm以上のものが多い。底径指数が60%代を示すものを抽出した。底部から口縁部にかけての形態は、79・82・84の様に直線的に外上方に立ち上がるタイプと、その他内湾気味に立ち上がるタイプが存在する。

##### 小皿B類………（85～110）

器高1.0～1.5cm代で、底径指数が70～80%代を示すものである。底径指数でA類と大きく区別した。さらに口径が5～7cm代のもので、口縁部が短く立ち上がる製品をB-1類（85～104）とした。B-2類（105～110）としたものは、やや大振りで口径8cm以上で底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる製品である。

##### 小皿C類………（111～131）

器高2.0～2.5cmの製品で、器高指数が30%前後で底径指数は幅があり60～80%を示すものである。底部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がるものが多くを占める。C類で細分類をしたがC-1類（111～126）が器高2.0～2.2cmで、C-2類（127～131）はやや大振りの製品で器高2.3～2.5cmを測るものである。

その他133～135は分類にあてはまらないが、III.A類に形態が近いものである。

#### 杯（第32～35図136～210）

136～155は口縁部が欠損しており、杯か皿か不明なものも存在するが杯として説明する。底径が狭く4.7～5.6cmの製品（136～145）と、やや広い6.0～8.0cmの製品（146～155）の2種類に分けることができる。その他の杯類は完形品が多く、法量・底径指数によって大きく分類し、形態・胎土によって細分類した。

##### 杯A類………（156～159）

口径が11cm以下のもので、底径指数が45～52%を占め口径と底径の比率が2：1の小振りの製品である。

##### 杯B類………（160～181）

口径が11.7cm以上で、底径指数が38～40%代のものである。器高指数も30%を越えるものが多い。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものが多く、中には数点内湾するものがある。このB類は、胎土・色調に差が認められ、B-1類（160～

168) が褐色系の胎土の中でもやや灰白色を呈するもので精選された胎土である。B-2類(169~181)は、褐色系で胎土がやや粗く砂粒を多く含む。

杯C類………(182~206)

底径指数が50%以上で、杯B類と比較すると明瞭に分類できる。C-1類(182~191)は、口縁部が外反するものから直線的なものが存在するが、外面に顕著なロクロ成形痕が残るものである。C-2類(192~206)は、口縁部が直線的になるものから内湾するものが存在し外面のロクロ痕は顕著ではない。

杯D類………(207~210)

口径が13cm以上で、底径指数が38~47%で口径に対して底径が狭いものである。

B-1類の大型品である。

皿 (第35・36図211~256)

皿は、杯と明瞭に差が認められないものも存在する。杯は器高指数が20%代の後半以上にその指数がきており、皿は20%代の前半を示すものである。皿は、ロクロ成形のものと手づくねの製品に大きく分けられる。

皿A類………(211~240)

ロクロ成形で、底径が6.8cm以上で広い。体部から口縁部にかけての形態で細分できる。A-1類(211)は、口径11cmで口縁部が直線的に短く立ち上がるものである。A-2類(212~228)は、口径12cm以上の製品で体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がるものである。A-3類(229~238)は、口径13cm以上で体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。A-4類(239~240)は、口縁部が外反するものである。

皿B類………(241~256)

手づくねの製品である。B-1類(241~254)は小振りのものから大振りのものまで存在する。口縁部は強いヨコナデのため外反する。B-2類(255~256)は、器高が浅く口縁部を水平に引き出した形態を呈する。

鍋 (第37・38図257~266)

土師質の鍋は、一形態に収まる製品のみである。内傾する口縁部で端部は肥厚する。肩部は鈍状の突帯を有し、胴部は斜位のタタキが施されるものである。完形品は少ないが、口径16~17cmの小振りの製品と、20cmを越える大形の製品に分けることができる。さらに鈍状の突帯が方形に突出するもの(265)から三角形状に突出するものが存在する。259は突帯が形骸化している製品である。

釜 (第38図267)

一点のみ出土している茶釜である。口縁部は上方に立ち上がり、球形を呈する胴部の中程に水平に伸びる鈍が貼付されている。胴部内面には横方向の刷毛目が施されて

いる。

## 2) 瓦質土器

瓦質土器は、土師質土器と比べると極端に少なく、鍋と擂鉢が出土している。

### 鍋（第38図268～270）

口縁部の形態に差が認められるものが出土している。268は口縁部が上方に立ち上がるものの、269はやや内傾するものの、270は外反するものである。外面の口縁部付近には指頭圧痕が残る。口径は推定であるが、23～24cmを測るものである。瓦質製品の鍋は全体的に摩耗が著しい。

### 擂鉢（第38図271・272）

271は体部破片で、摩耗が著しいが条線が施される。272は、ほぼ全体の形状をうかがい知ることができる。底部は平底で体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反気味になる。口縁端部は面取りがされる。底部から体部にかけて内面は6本の条線と、口縁部内面はヨコナデが施される。外面は指頭圧痕が残る。

## 3) 濱戸・美濃系陶器

碗・天目茶碗・卸皿・壺が出土している。調理具と茶道具という特殊品が出土している。

### 碗（第39図273・276）

273は、底部が欠損しているが体部から内弯して外上方に立ち上がり口縁部に至る形態である。内面から体部中程までオリーブ黄色の釉がかかる。内外面に貫入がはいり、見込みに目跡が残る。276は底部破片であるが、貼付高台で外底は回転糸切り痕が残る。残存部分の外面は高台部も含めて露胎で、内面は浅黄色の釉が施されているが剥離している部分が多い。高台径は5.4cmである。

### 卸皿（第39図274・275）

274は口縁端部が拡張され、口縁部内外面に施釉されその他は露胎である。見込みは竈による卸目が格子状に施されている。275は、口縁端部が拡張され肥厚し底部の器壁は厚い。内外面体部下半まで灰釉が施され、見込みと外底は露胎である。見込みには竈による格子状の卸目が施され、外底は回転糸切りが残る。

### 天目茶碗（第39図277～281）

277は、高台は削り出し輪高台であるが、外底の削りが非常に浅い。置付けの部分に糸切り痕が残る。高台脇の削りも浅く、体部は内弯して外上方に立ち上がる。口縁部のくびれはなく口縁端部を尖らしている。内面と外面体部下半まで黒褐色の釉がかかり、その他は露胎で化粧がけは施されない。278の高台は輪高台であるが、外底部分に糸切り痕が残

り削り出しとは考えられない。高台脇の削りは浅く、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。口縁部はくびれを持ち口縁端部は尖っている。内面と外面体部下半まで黒褐色の釉が施され、その他は露胎であるが化粧がけは施されない。279の高台は、削り出しの輪高台で高台脇は水平に近く削る。残存している部分は露胎で化粧がけが施されている。280は高台部が欠損しているが、高台脇は斜位に箝削りが施される。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はくびれ端部は尖っている。体部下半まで茶褐色釉が施され、体部下半からは露胎で化粧がけは施されない。281は高台脇に浅い削りがはいり、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部は大きくくびれる。内面から外面体部下半まで黒褐色釉が施され、体部下半以下は露胎で化粧がけが施されている。これら天目茶碗は、279・280を除きI郭の詰出土である。

#### 壺（第39図282）

瀬戸・美濃系陶器の中に含めているが、明確に産地を言えない製品である。胎土は軟質の黄白色で吸水性のあるものでここに含めた。底部は、やや上げ底風で肩部は内湾気味に外上方に立ち上がり肩部はやや張りを持つ。肩部の外面に黄褐色の釉が施され、底部外面は無釉であるが内面と同じ化粧がけが施されている。時期的に下るものと考えられる。

#### 4) 備前焼

国産陶器の中で、備前焼の占める割合が高く、調理具の擂鉢や貯蔵具の壺・壺が主流で出土している。

##### 擂鉢（第40～42図283～300）

283～286は、体部が直線的に外上方に立ち上がり口縁端部がやや肥厚し、斜めに切り取られているタイプである。285の端部はやや拡張され、8本単位の条線が下から上へ施される。286も同様に条線が8本単位である。287は口縁部が上方に拡張され、内傾する面を持つ。内面8本単位の条線が、下から上へ施されるが摩耗が著しい。底部外面に箝削りが施されている。288～294の口縁部は、上下に拡張され肥厚するタイプである。288・289・291の条線は7本単位、293が8本単位、290・294は9本単位である。295は、口縁部が上下に拡張され内傾する面を有するが、体部内外面にロクロ痕が薄く残る。内面の条線は7本単位である。296は口縁部が上方に大きく拡張され、外面は強くヨコナデされ凹線状になる。体部内外面には、明瞭にロクロ痕がのこり内面は8本単位の条線が施される。297・298は底部破片であるが、条線は7・8本単位で施される。299は口縁部が上方に立ち上がりやや内傾する面を持つ。300は口縁端部を斜めに切り落とし、上下にやや拡張される。体部外面に重ね焼きによって色調が変化している。

### 壺（第42・43図301～307）

301～305までは、破片であるが口縁部は上方に立ち上がり玉縁を呈する。303は肩部に自然釉がかかる。306・307は、口縁部小玉縁を呈し肩部に5本の沈線と波状の沈線が櫛描きされる。肩部に自然釉がかかり、内面横方向のナデが施されるが剥離している部分が多い。

### 甕（第43～46図308～319・321～325）

口縁部が幅の広い玉縁を呈する製品が多い。口縁部破片で復元実測しているため不正確のものもあるが、口縁部の形態的に差が認められる。308・310・311・314・316・317は口縁部が上方に立ち上がり、309・313・315は外反し、318・319は内傾する口縁部である。321は、Ⅱ郭G 7-13区においてI層除去後集中して出土した。口径62.4cmを測り、胴部の最大径は上位に持ち口径より広く丸味を持った形態である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は玉縁状になるが肥厚しやや垂れ下がる。外面は凹線状に2条押さえつけられている。胴部外面は横方向から斜め方向に、胴部下位は縦方向に範削りが施されている。内面は、横方向の粗い刷毛目が施されている。322～324は底部破片であるが、外面縦方向の範削りと、その下位には横方向の範削りが施される。325は、水屋甕と考えられる製品である。口縁部は内傾し、端部は肥厚するが端面は強く押さえつけられて凹線状になる。肩部に自然釉がかかり、胴部内外面中程には凹線が3条はいる。

### 5) 常滑焼

常滑焼は、破片も含めて8点出土しており実測できたものは甕1点である。

### 甕（第44図320）

I郭の詰から出土している。口縁部は「N」字状口縁を呈し、端部は広い縁帯を持つ。頸部外面には、絞り込まれている部分から下方にもけて縦方向の刷毛目が見られる。内面には、粘土帯の接合痕が観察できる。

### 6) 青磁

輸入陶磁器の中で、白磁に次いで青磁が多く出土している。器種としては、碗・皿・壺・盤がある。

### 碗（第47～49図326～377）

326～336までは、線描きの細蓮弁文碗である。山形の剣先を持つものから、剣先が乱れ細蓮弁文と不統一のものなどが存在する。331・332・335は丸ノミ状工具による細蓮弁文が施され、333・334などは細蓮弁の間隔が広い。青緑色の釉が施されるが、内外面に貫入がはいるものが多い。337～340までは、範状工具による雷文帯の崩れが

外面に施されるタイプである。337のみ粗い貫入がはいる。341は、口縁部が外反し、外面に浅い4本の沈線が施され、下半部に箆描きの蓮弁文が描かれる。342の外底は、輪状に釉を搔きとり内外面は貫入がはいる。外面に箆状工具による蓮弁文が描かれる。343の外底は輪状に釉を搔きとり、外面は線描きの細蓮弁文と見込みに印花文が施される。344の外底は露胎で、釉は高台部内面まで施釉される。外面線描きの細蓮弁文、見込みには捺花文で中央部は花文中に「石林」が印刻される。345は口縁部が外反し、外面蓮弁文を削り出し蓮弁の中に横描文、内面も箆状工具による削り出しの花文と横描文が施される。内外面貫入ははいらない。346は底部破片であるが、釉は疊付けを乗り越えて外底まで施釉されている。見込みは1本の沈線とその中に印花文が施されている。内面に貫入がはいる。347は腰の張る碗の形態である。高台部疊付けは外面削られ狭く疊付け部分まで釉がかかり、高台内面及び外底は露胎である。見込みに浅い1本の沈線とその中に印花文が施される。外面高台脇の部分に浅い3本の沈線がある。内面部分的に貫入がはいる。348は高台部の一部が露胎で、その他外底面も含め全面施釉され貫入ははいらない。疊付けは、外面削られ狭くなっている。350は底部の器壁が厚く、体部から口縁部にかけて内弯気味に外上方に立ち上がる製品で口縁部は外反しない。内外面無文で見込み及び外面に粗い貫入がはいる。釉は高台を乗り越えて内面までかかり外底は露胎である。351も口縁部が外反しないタイプである。349・352～377は、口縁部が外反し内外面無文のタイプである。青磁碗の中でこのタイプの出土量が最も多い。口縁部破片が多い中で、370の碗を見ると釉は疊付け及び外底は露胎である。さらに貫入のはいるものが多い。372は、外面に2本の浅い沈線が施されている。

### 皿（第50図378～392）

378～384は菊皿である。378・380・381の外面は箆状工具による細蓮弁文で、内面は丸ノミ状工具によるソギを入れている。外面体部下半まで施釉されている。379の外面は丸ノミ状工具により連弁が施されている。382は外面花弁状に削り出している。383・384の外面は、丸ノミ状工具による連弁で内面はソギを入れる。全面に施釉されるが、疊付けは釉が薄く砂が溶着している。内外面に密な貫入がはいる。385～390までは、稜花皿である。387は、高台部の疊付けまで施釉され外底部は露胎である。389・390は口縁部内面に横描きで波状の文様が描かれる。388は、高台部疊付けを乗り越えて内面まで施釉され、外底の一部にも釉が残るが露胎である。内面は箆描きによる文様と、見込みには「寿」の文字が印刻される。392は底部破片であるが疊付けから外底まで露胎である。391は、小振りの皿で底部は欠損しているが内面と外面の体部中程まで釉がかかる。

### 壺（第50図393～395）

393は壺の口縁部破片で、細い頸部から口縁部はやや肥厚し外反する。内外面施釉されるが、粗い貫入がはいる。394は底部破片で高台部から底部の器壁が厚く、高台は内外面を斜めに削り疊付けを狭くしており露胎である。外面は鎌蓮弁文が施され内面はロクロ痕が残る。395は高台内外面を斜めに削り、疊付けを狭くしており露胎である。外底面は施釉され内面は釉が薄くロクロ痕が残り内底面は露胎である。396は器種が明確ではないが、器壁が薄く底部と内面が露胎で体部のみ施釉される。外面は花弁状になり型造りの可能性もある。

#### 盤（第50・51図397～410）

口縁部破片が多く、体部は内弯気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反し端部は肥厚し上方に立ち上がる。内面に丸ノミ状工具による連弁状の文様を施す。402の底部破片は、釉が疊付けを乗り越えて高台内面まで施釉され外底は露胎である。407は内面に幅広の連弁の文様が彫り込まれており、高台部の釉は疊付けを乗り越えて外底まで施釉されている。408・409は内外面施釉され貫入がはいるが、高台部内面及び外底は露胎である。内面に丸ノミ状工具による連弁文が施される。

#### 7) 赤 絵

##### 碗（第52図411）

II郭の大規模な建物であるSB 7の検出面から出土したものである。全体的に器壁が薄く、高台も比較的高い。体部は内弯して外上方に立ち上がり口縁部に至る。外面は口縁部に2重の界線と高台部に3重の界線に挟まれ、人物文を赤色と部分的に黄色を用い上絵付けしている。口縁部から体部内面は牡丹唐草文、見込みには2重の界線中に花卉文が上絵付けされている。

#### 8) 染 付

##### 皿（第52図412～425・434）

412～418までは、基筒底タイプの皿である。疊付けに砂が溶着しているものもある。外面は波濤文と芭蕉葉文の組み合わせで染め付けられている。414・417・418の見込みは界線中に捻花などの花文が描かれる。419は口縁部が外反する皿で、外面界線下に牡丹唐草文が施される。420は口縁部内面に2重の界線、外面は界線下に牡丹唐草文が染め付けられる。421は疊付けのみ露胎で、見込み2重の界線中に十字花文が染め付けられている。422・423はやや大振りの皿で、口縁部外面に1重の界線、内面には四方櫛文が染め付けられる。424は内面四方櫛文、外面渦巻文でやや大振りの皿である。425は外面草花文、内面には四方櫛文が染付られる。434は、備前焼の321と共に出土しており、見込みに2重の界線とその中に文様が染め付けられるが、高台

部の疊付けに砂が溶着しており肥前磁器の可能性もある  
碗（第52図426～432）

428は、体部から直線的に外上方に立ち上がり口縁部に至る。口縁部内面に2重の界線、外面は界線の下に草花文が染め付けられる。426も同じ形態で口縁部内外面に2重の界線と外面は牡丹唐草文が施される。427・429は口縁部内面に1重の界線、外面には口縁部に波瀾文、体部に芭蕉葉文が施される。430は底部饅頭心の碗で、高台も比較的高い。外面は如意雲文と考えられ、見込みは折菊が染め付けられる。431は見込みを平坦に広く取り大きな高台を持つ。高台部外面に2重の界線と体部外面にはアラベスク文、見込みには十字花文が染め付けられる。432は小振りの碗か小杯である。高台部疊付けの釉を搔きとる。見込みは2重界線中に人物文、外底は界線中に長命富貴の「富貴」が残る。

盤（第52図433）

底部の破片が詰の東斜面から出土している。全面に施釉されているが、高台部疊付けの外面を削り狭くしており釉を搔きとる。外面3重の界線が施され、内底面は2重の界線中に唐草文が染め付けられる。

## 9) 白 磁

皿（第53・54図435～478）

435～452までは全面白濁色の釉がかかる端反りの皿で、438～443・451は底部破片まで残っているが、疊付けのみ釉を削り若干砂が溶着する。453～461は体部が内弯して外上方に立ち上がり口縁で収まるタイプである。外面体部下半まで釉がかかる。462・465は、高台部外面を削り疊付けを狭くしている。体部下半から高台部にかけて露胎である。体部外面に範削り痕が認められる。464は、高台部疊付けは外面を削り狭くし高台脇及び底部外面範削りがはいる。やや青味を帯びた灰白色の釉がかかるが外面体部下半は露胎である。露胎部分は部分的に赤く発色する。見込みは蛇の目釉ハギが施されている。466～476は底部破片であるが、466は疊付けのみ露胎で全面に施釉されている。467は体部下半までと内面に施釉されるが、疊付け及び高台外面まで一部釉がかかる。底部外面には、「十」か「大」か判別が困難な墨書がされている。468は体部外面まで釉がかかる。469・473はアーチ状高台で、底部外面は露胎である。470は体部下半が露胎であるが二次的な煤を受けている。477は、口禿げの皿である。口縁部はやや外反し残存している部分は釉が施されている。478は八角皿で、体部外面下半まで施釉されている。

小杯（第54図479・480）

479は、疊付け及び高台内面は露胎であるが、外底の一部に釉がかかる。見込みは

蛇の目釉ハギが行われている。480は全面に施釉され、疊付けのみ露胎である。見込みは蛇の目釉ハギが施されている。

#### 碗（第54図481～486）

481は、底部器壁が厚く体部は内弯気味に外上方に立ち上がる。疊付けから外底にかけて露胎である。高台脇は箝削りが施されている。施釉されている部分には貫入が認められない。482は口縁部外面2本の沈線に挟まれ、波状文が施される。483は器壁が薄く、口縁部が外反するものである。484は同じく口縁部外反するタイプであるが、強いナデのため外反している。体部外面は箝削りされており、釉調は灰色を呈している。485は484の底部破片と考えられ、釉調が灰色を呈し粗い貫入がはいる。見込みに1本の沈線が施されている。外面は露胎で高台脇を若干削る。486は体部が内弯して外上方に立ち上がり、口縁部は強いナデで外反する。内面から外面の下半まで施釉されており、外面は箝削り痕が観察できる。高台脇は浅い削りと、見込みには1本の沈線がある。

#### 10) 土製品（第54図487～491）

487はトリベである。胎土が粗く器壁が厚い。碗の様に内弯する体部から口縁部は端面が水平になる。内面は、海線状をなす。488～490は土錘である。形状は管状を呈しており、孔径が4～5mm、長径3～4cmの小型品である。重量は3～4gを測る。491はフイゴの羽口で、Ⅱ郭から出土している。円筒形の羽口で、直径11.2cm、中央の孔が1.8cmを測る。胎土は粗く、口の部分に硅酸質の付着が認められる。

#### 11) 石製品（第54・55図492～500）

石製品は、硯・砥石・臼・投弾が出土している。492・493は硯で、492は大部分欠損しておりかろうじて陸部と海部の輪郭がわかる。全長16.9cm、幅8.8cmを測る。側面は底部より上面にかけて垂直に立ち上がり磨き込まれている。493は、縁辺部は欠損しており、底面も全体的に欠けているが一部磨きをかけ擦痕がつく。磨面は残りが良く海部が狭くなっている。全長13.7cm、幅7.8cm、厚さ1.6cm、重量315gを測る。494は投弾と考えられるもので、円形状の石玉である。直径3.6cmを測り、重量は57.3gである。表面は全体的に磨きをかけている。495～499は砥石である。495は上下端が欠損しており、薄い断面方形を呈する。4面とも使用しており、残存長が5.1cm、幅3.2cm、厚さ0.7cm、重量20gを測る。496は上端部と横が欠損している。薄い断面方形を呈する。残存している長さ6.2cm、幅3.3cm、厚さ0.5cm、重量16gを測る。497は、上下端が欠損しているが、上部が薄く下部が厚くなる。4面とも使用しており残存長5.4cm、幅2.7cm、厚さ下部で1cm、重量27gを測る。499は大部分欠損しており、断面方形を呈する。厚

さは1.4cm、重量60 gを測る。上面と側面を磨いている。498も上下端を欠損しており、4面とも使用している。幅は4.4cm、厚さ1.6cm、重量75 gを測る。500は茶臼で下臼の縁部破片である。破片の重量は290 gである。

### 12) 金属・青銅製品（第55図501～520）

501は銅碗の蓋と考えられ、天井部が欠損しており薄い造りである。502は銅碗である。高台が比較的高く、体部は内弯し口縁部は外反する。全体的に薄い造りで口径3.6cm、器高1.7cm、底径1.9cmを測る。503・504は青銅製の飾り金具である。中央に孔が穿たれ、外面菊花状になる。503は直径1.8cm、重量1.1 g、504は直径1.6cm、重量0.7 gを測る。505は青銅製金具で環状を呈する。506は鉄製品の環である。断面は方形で、重量は8.8 gである。507～515は鉄釘である。507は断面方形を呈し、全長5.2cm、幅0.5cm、重量3.9 gである。508は上下端が欠損しており、長さ3.4cm、幅0.5cm、重量2 gである。509は頭部が折り曲げられる釘で、断面方形を呈し全長4.5cm、幅0.5cm、重量2 gである。510は、断面扁平な方形を呈し、頭部が欠損している。長さ6.2cm、幅1.4cm、重量27 gである。511は、折頭釘であるが、頭部と下端部が欠損している。長さ6.4cm、幅1.3cm、重量12 gである。512は先端部が欠損しており、断面扁平な方形を呈する。長さ7.0cm、幅1.6cm、重量17 gである。513は、折頭釘で断面扁平である。全長7.2cm、幅1.3cm、重量14 gである。514は断面方形で、全長7.3cm、幅0.6cm、重量10 gである。515は頭部が欠損しており、断面方形である。長さ10cm、幅0.5cm、重量29 gである。516・517は板状鉄製品である。516は薄い造りで形態が方形を呈し、全長8.8cm、幅3.4cm、重量29 gである。517は一方の端が山形になっており、6カ所に穿孔がある。全長7.5cm、幅2.9cm、重量19 gである。518は小刀の片刃で鋸化が著しい。基部の部分に木片が付着している。残っている部分で長さ18.8cm、幅2.4cm、重量100 gである。519は小刀の先端部である。鋸化が著しいが片刃と考えられている。残存長は7.5cm、幅2.2cm、重量21 gである。520は、鉄鍋の口縁部破片と考えられる。口縁端部に水平で長い鍔がつく。口径19.6cmを量る。重量は29.2 gである。

### 13) 古銭

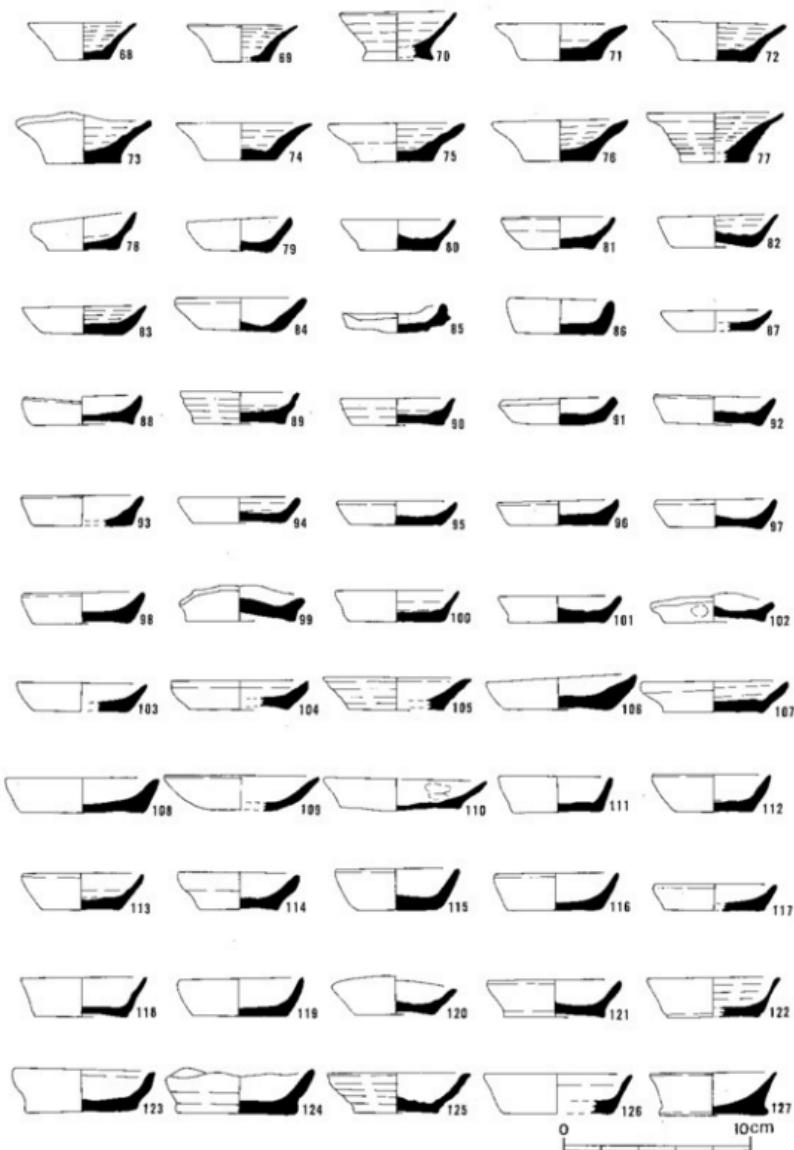
I・II郭から渡来銭及び古銭が出土しているが、詳細は計測表を参照願いたい。  
渡来銭は、I郭からは唐国通寶(521)・皇宋通寶(524)・政和通寶(528)がII層からIII層の包含層で出土している。その他はSB1のP1から元祐通寶(526)が1枚出土している。南唐から北宋までの初鑄で古いものが出土している。II郭では、熙寧元寶(522・523)・元豐通寶(525)・元符通寶(527)・洪武通寶(529)・永樂通寶(530～533)が出土地でA区が1点、C区が6点、D区が1点で、いずれ

もⅡ層からⅢ層出土である。遺構ではSD 6から永楽通寶(533)が出土している。これらの出土状況から見ると、SB 4からSB 6の建物跡が集中している地点に多い。

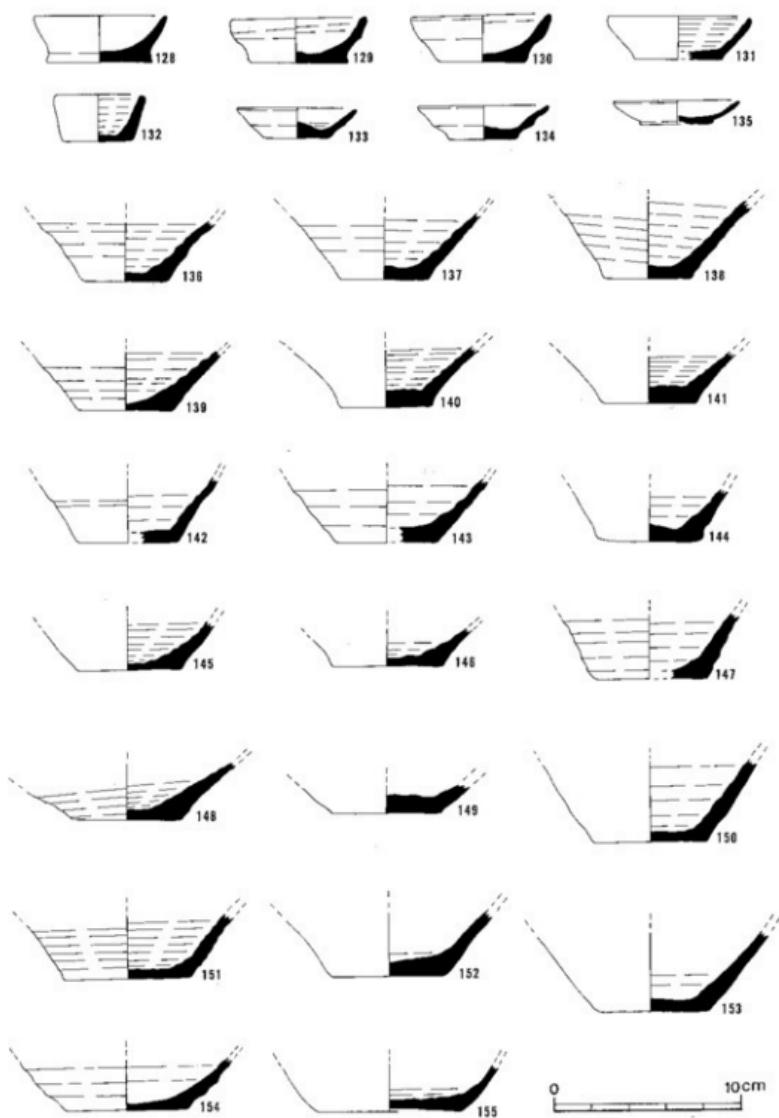
日本の古銭は、寛永通寶(534~538)がI郭のⅠ層から5枚出土している。この出土状況は、江戸期には城八幡が存在し、奉納されたものと考えることができる。

第1表 出土古銭計測表

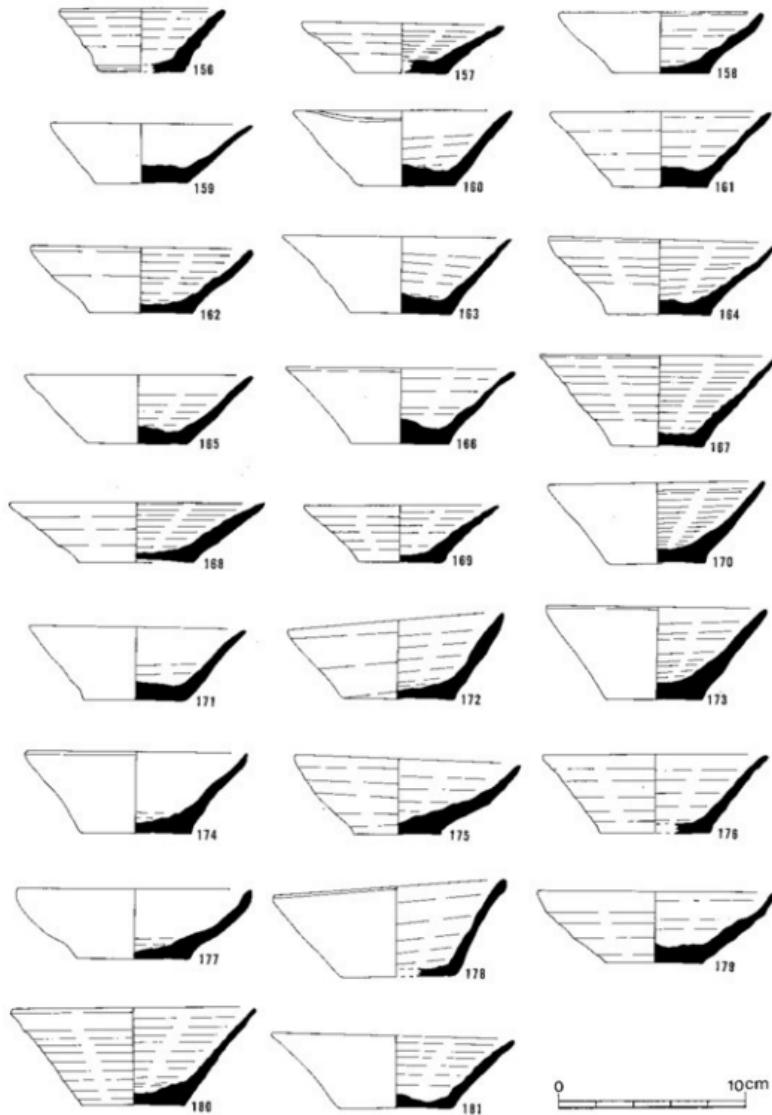
挿図 番号	銭種	初鑄年次		銭径 (mm)		量目 (g)	出土地点	
		王朝名	西暦	外径	内径			
521	唐国通寶	南唐	959	24.0	19.0	2.1	I郭	Ⅲ層
522	熙寧元寶	北宋	1068	23.0	20.0	3.1	II郭 C区	II層
523	熙寧元寶	タ	タ	23.0	19.0	3.5	II郭 C区	III層
524	皇宋通寶	タ	1039	24.0	19.5	2.9	I郭	II層
525	元豐通寶	タ	1078	23.0	18.0	2.2	II郭 A区	II層
526	元祐通寶	タ	1086	24.0	20.0	2.4	I郭 SB 1 P 1	
527	元符通寶	タ	1098	23.5	19.5	3.6	II郭 C区	II層
528	政和通寶	タ	1111	23.5	20.0	2.8	I郭	II層
529	洪武通寶	明	1368	23.0	17.5	3.4	II郭 C区	III層
530	永樂通寶	タ	1408	24.5	21.0	4.0	II郭 C区	II層
531	永樂通寶	タ	タ	24.0	21.0	3.5	II郭 C区	II層
532	永樂通寶	タ	タ	24.0	21.0	2.2	II郭 D区	
533	永樂通寶	タ	タ	24.5	21.0	2.5	II郭 SD 6	
534	寛永通寶	日本	1636	22.5	18.5	2.5	I郭	I層
535	寛永通寶	タ	タ	24.5	20.0	2.5	I郭	I層
536	寛永通寶	タ	タ	23.0	19.5	3.1	I郭	I層
537	寛永通寶	タ	タ	23.0	20.0	1.8	I郭	I層
538	寛永通寶	タ	タ	23.5	19.5	3.8	I郭	I層



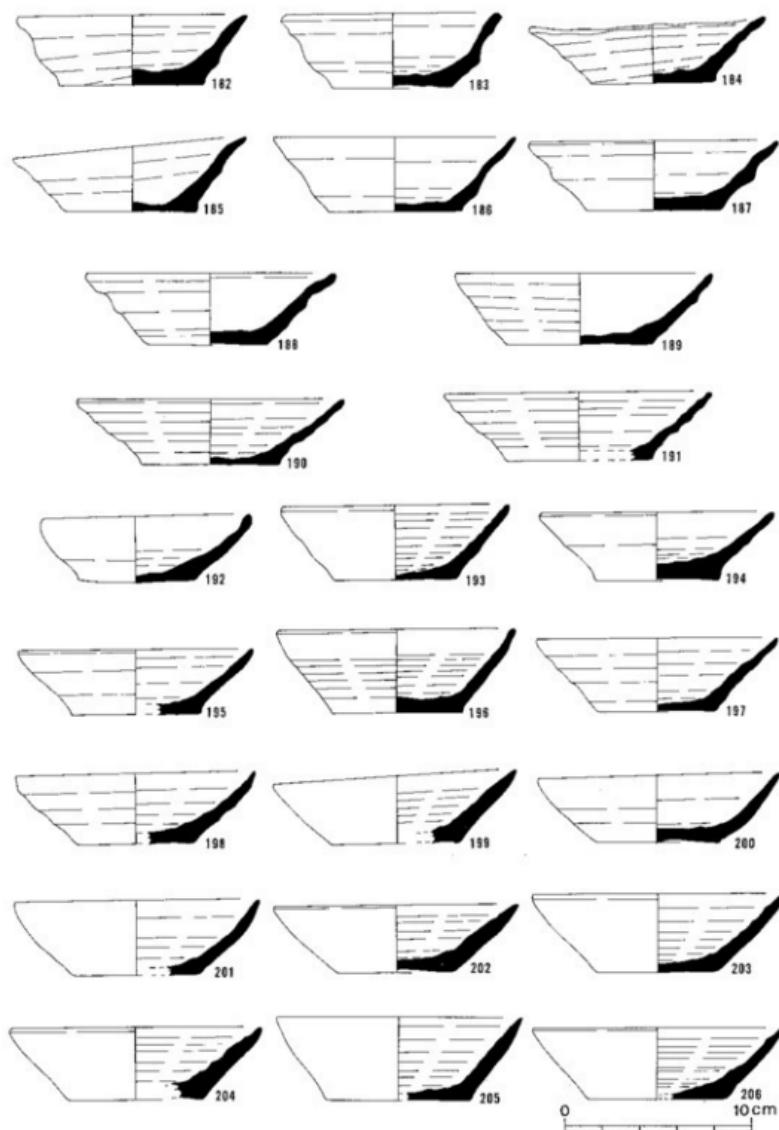
第31図 土師質土器1（小杯・小皿）



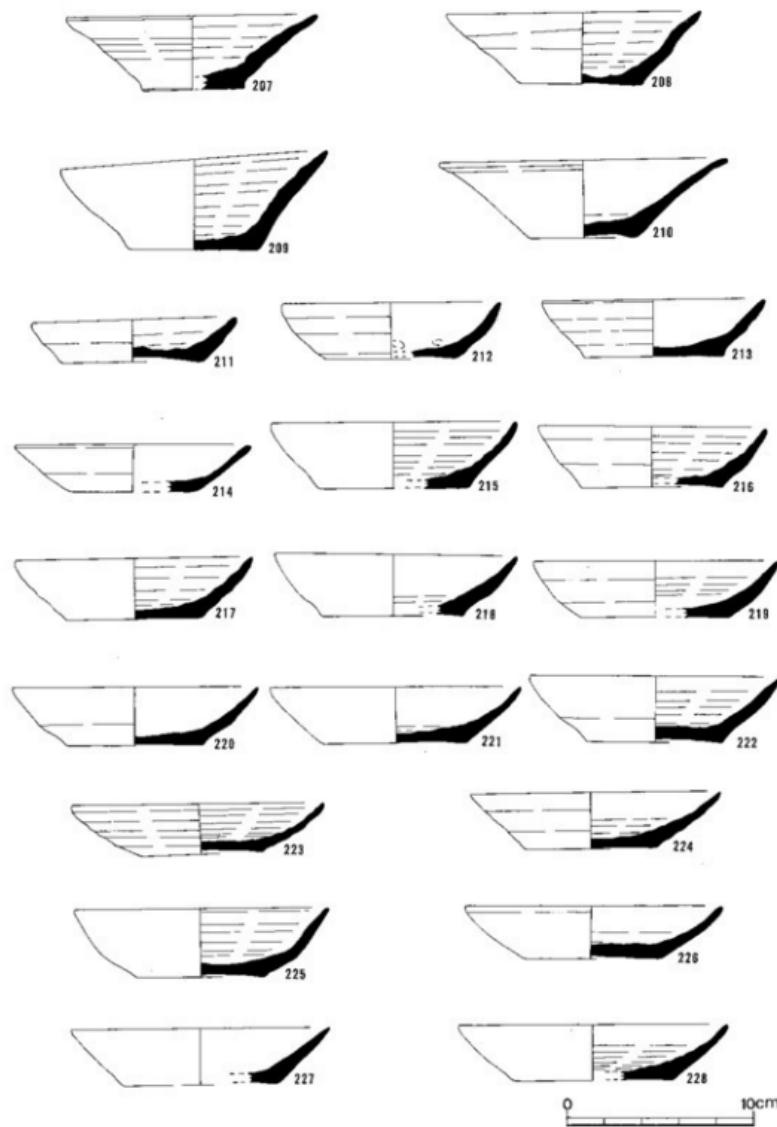
第32図 土師質土器2（小皿・杯）



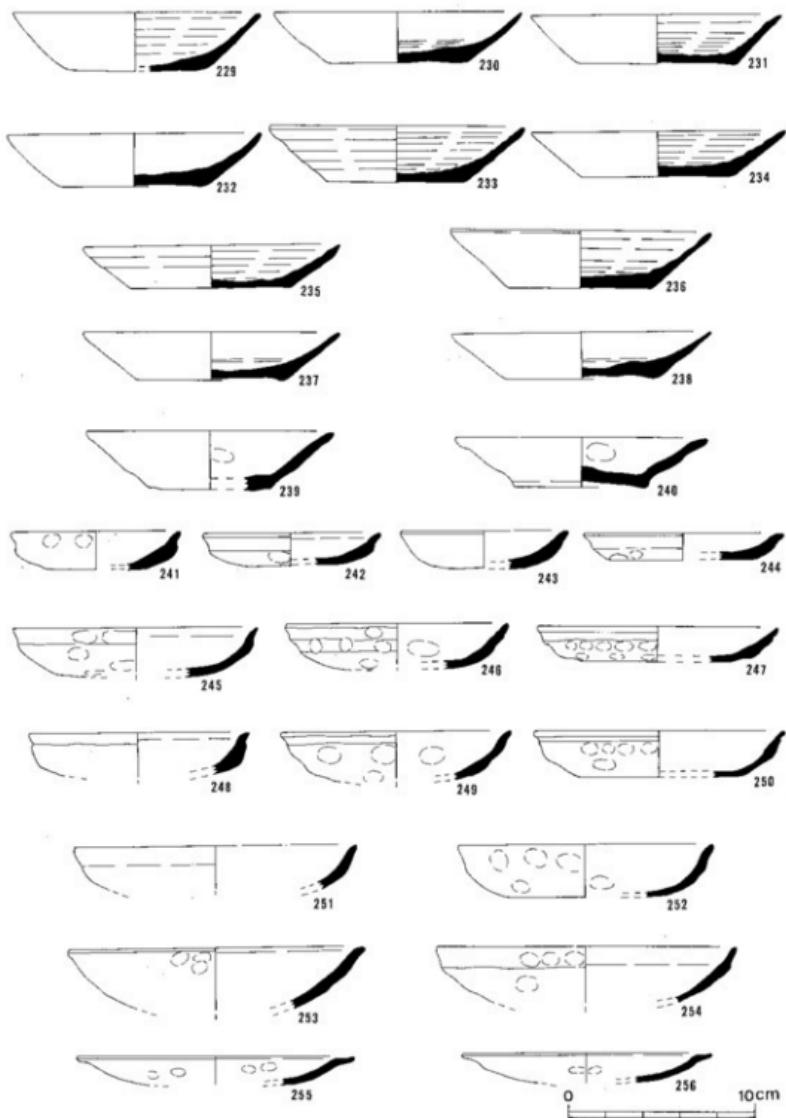
第33図 土師質土器3（杯）



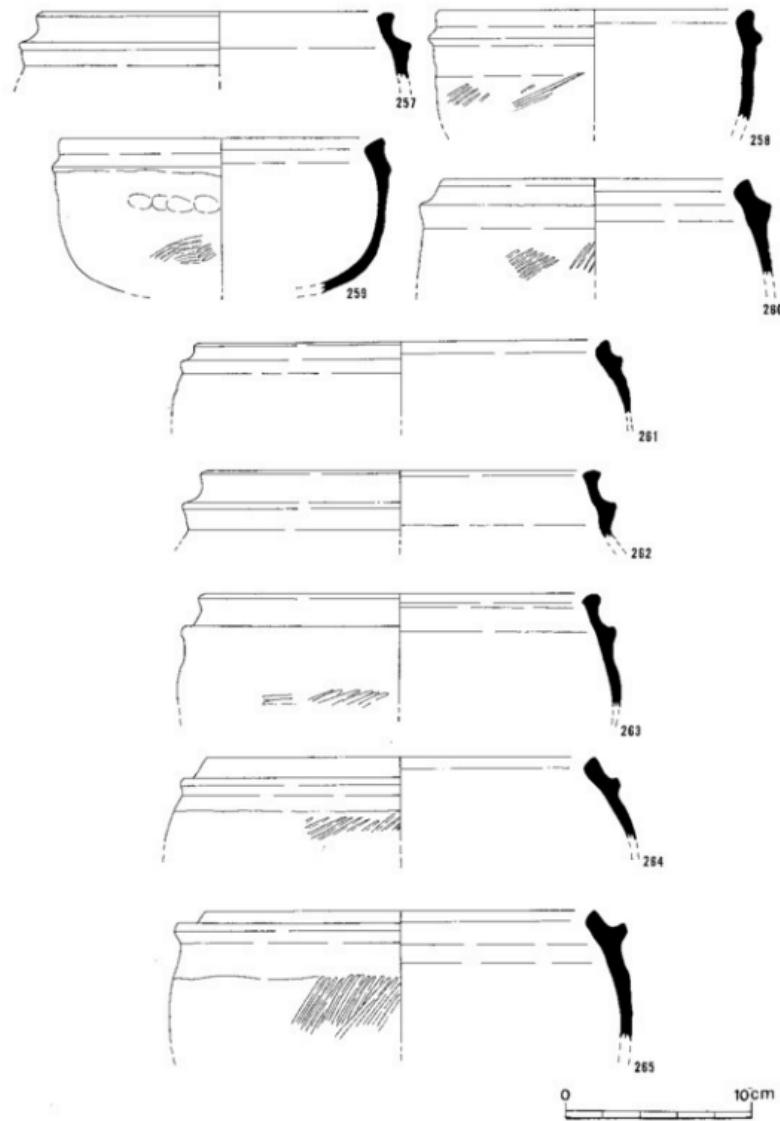
第34図 土師質土器4（杯）



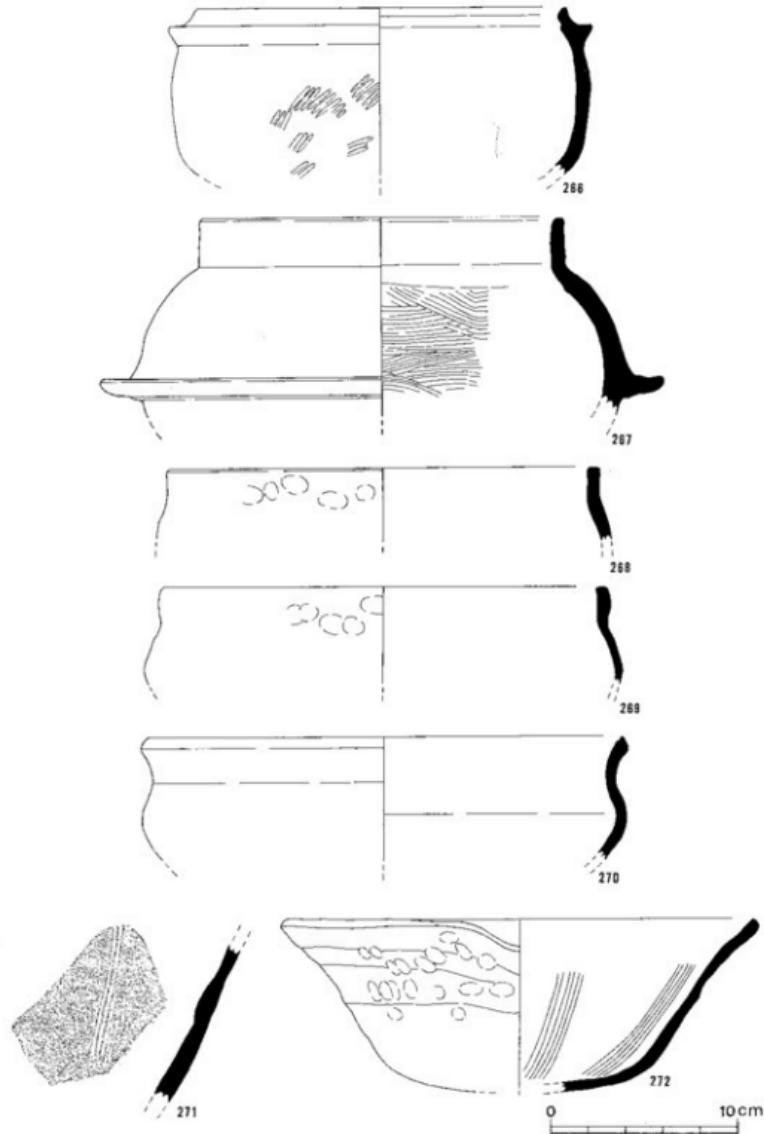
第35図 土師質土器5（杯・皿）



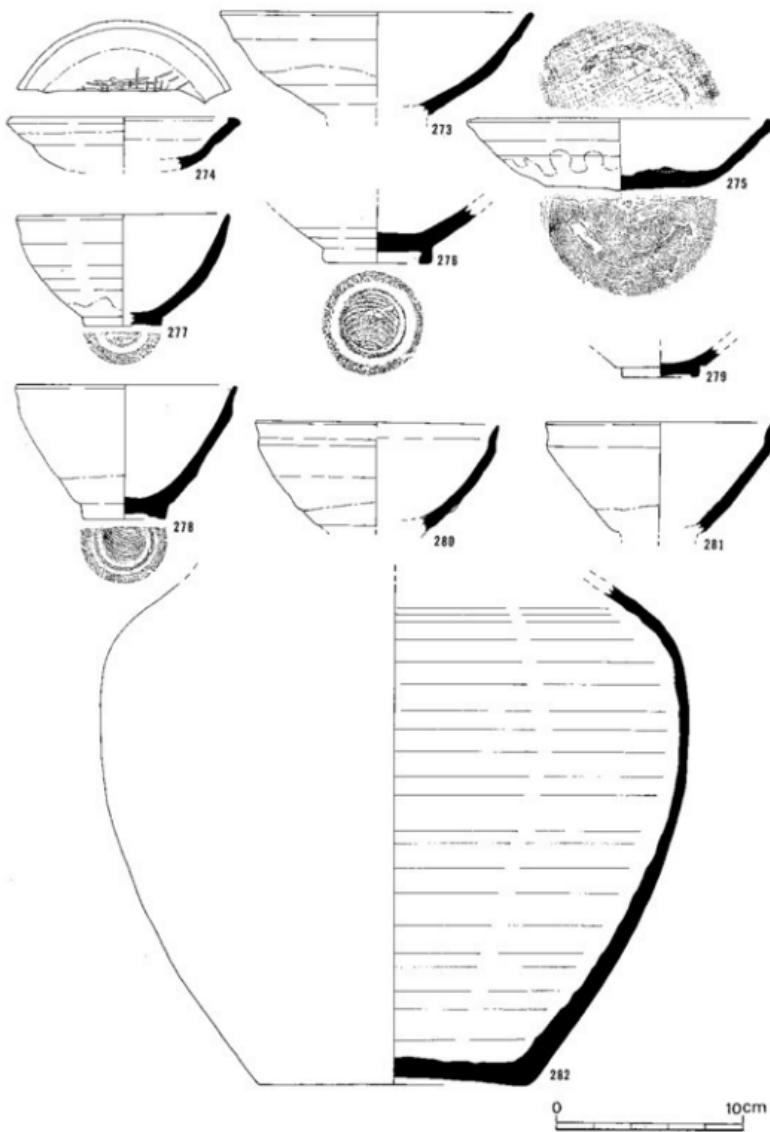
第36図 土師質土器6（皿）



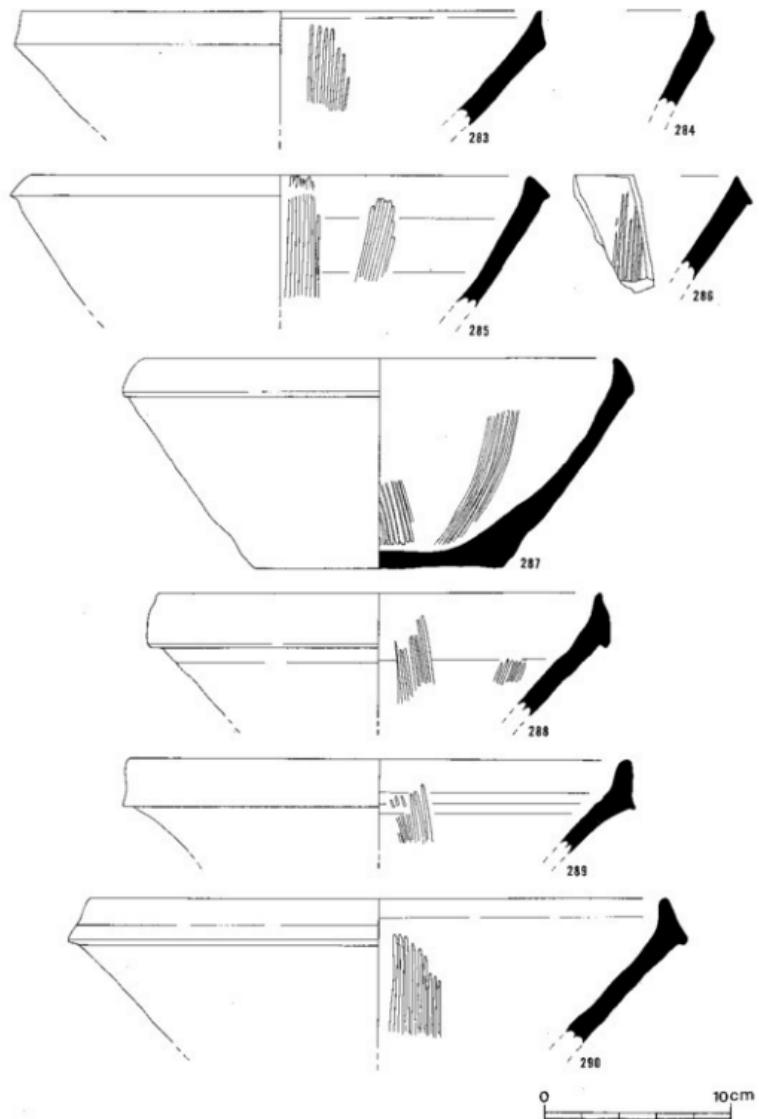
第37圖 土師質土器 7 (鍋)



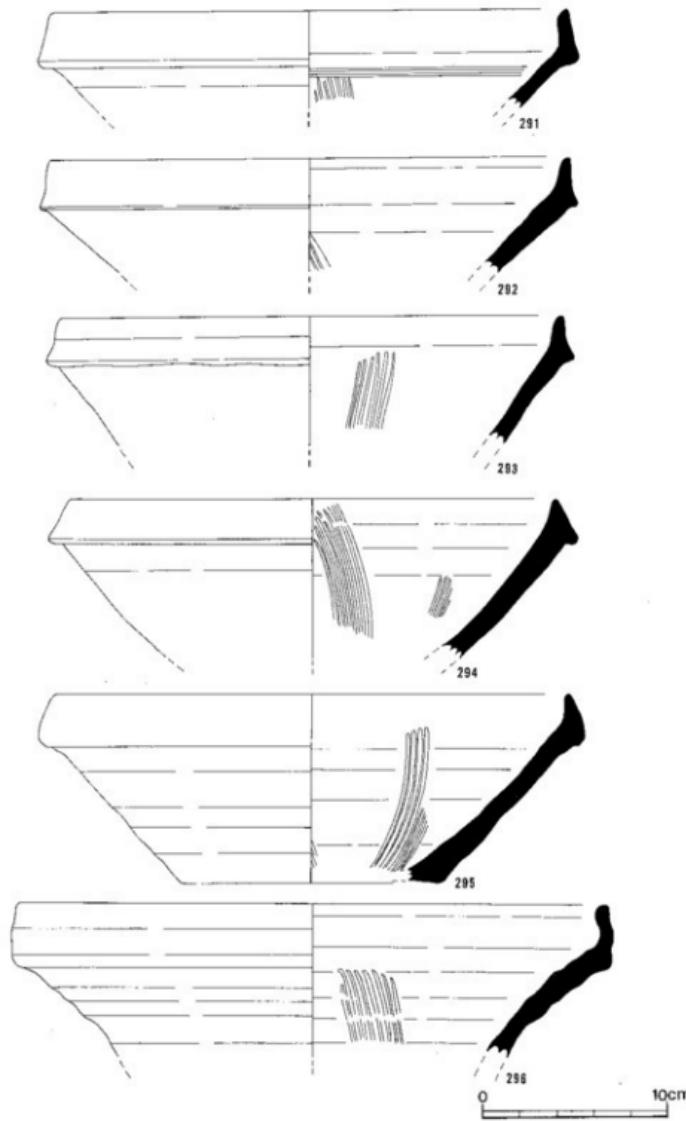
第38図 土師質土器 8 (鍋・釜)、瓦質土器 (鍋・擂鉢)



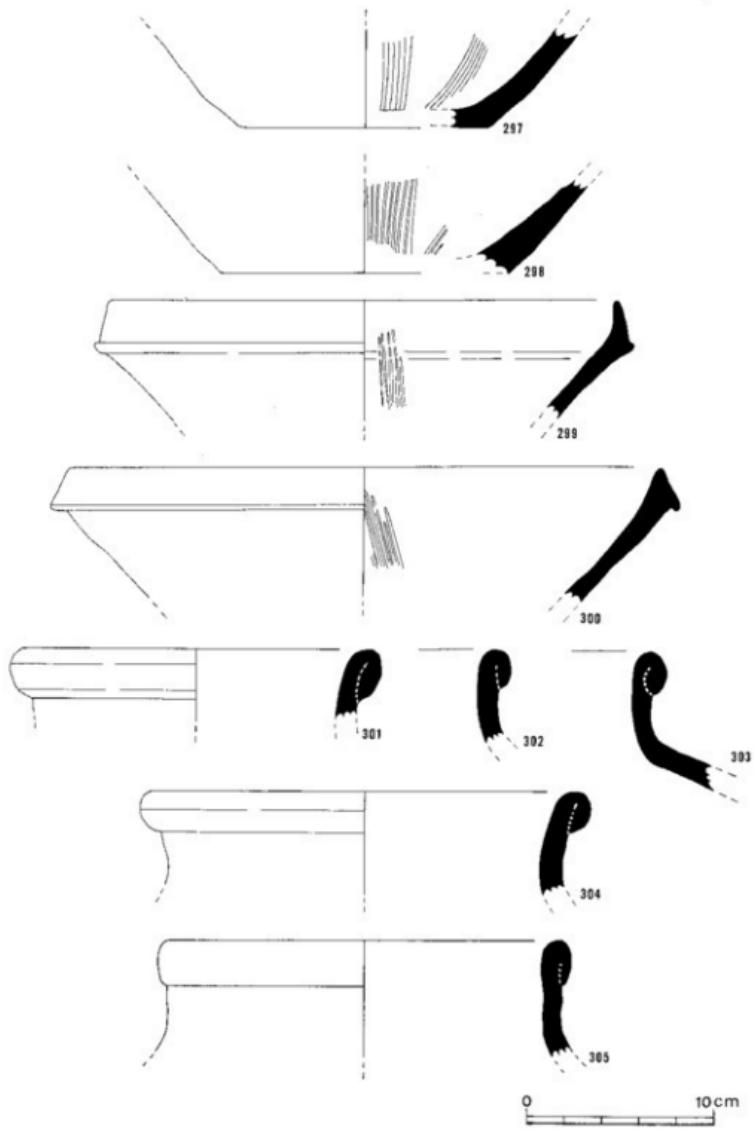
第39図 濑戸・美濃系陶器（碗・皿・壺）



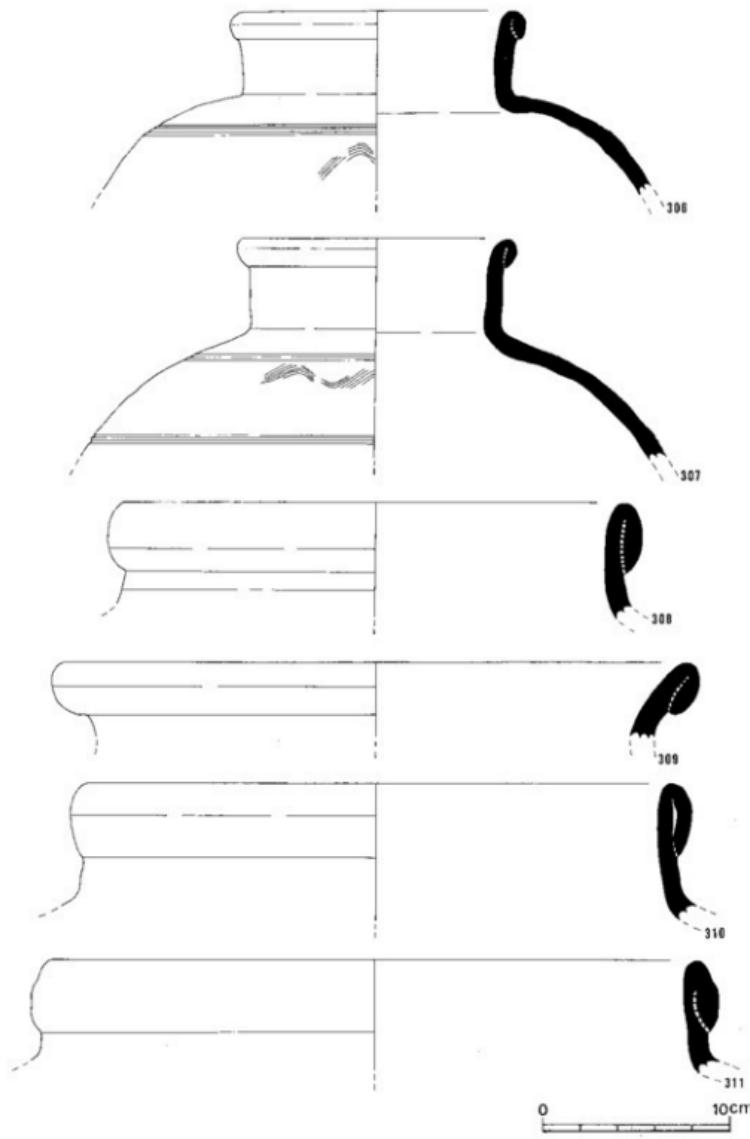
第40図 備前焼1 (擂鉢)



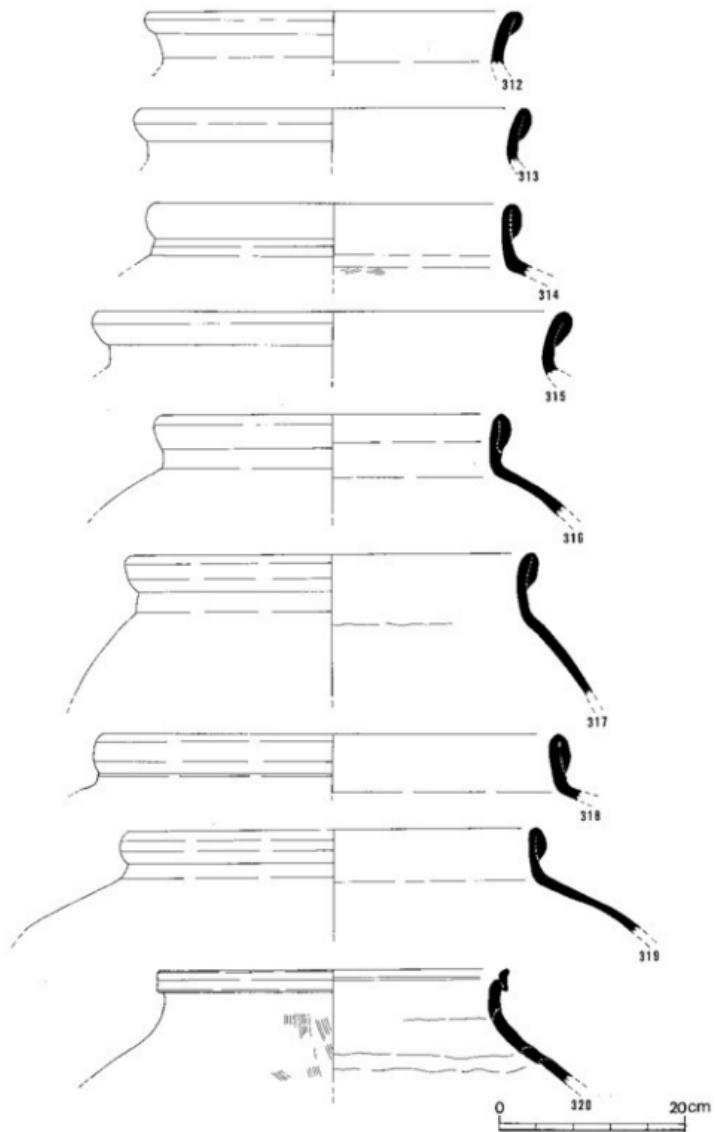
第41図 備前焼2 (擂鉢)



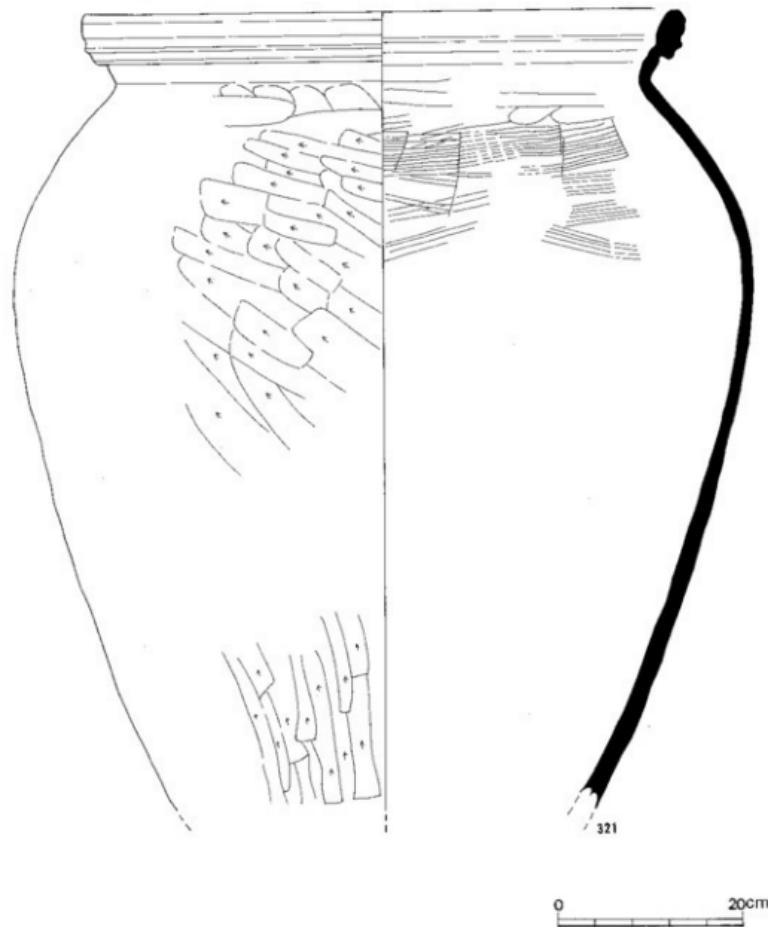
第42図 備前焼3 (擂鉢・壺)



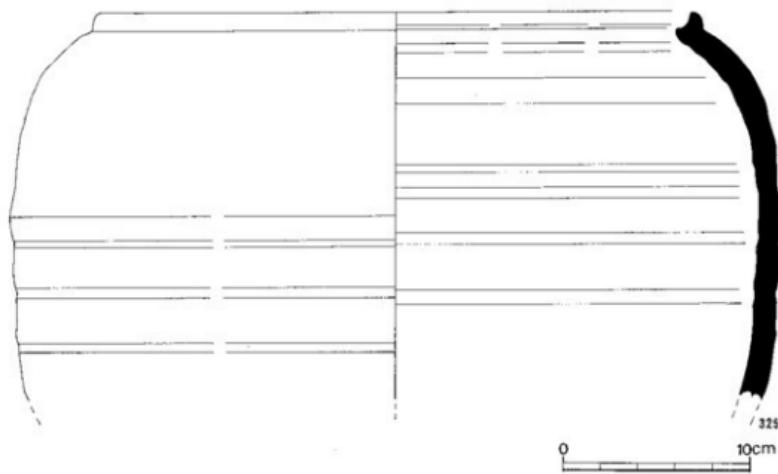
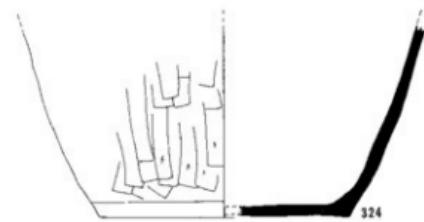
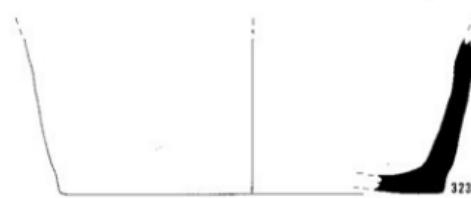
第43図 備前焼4 (壺・甕)



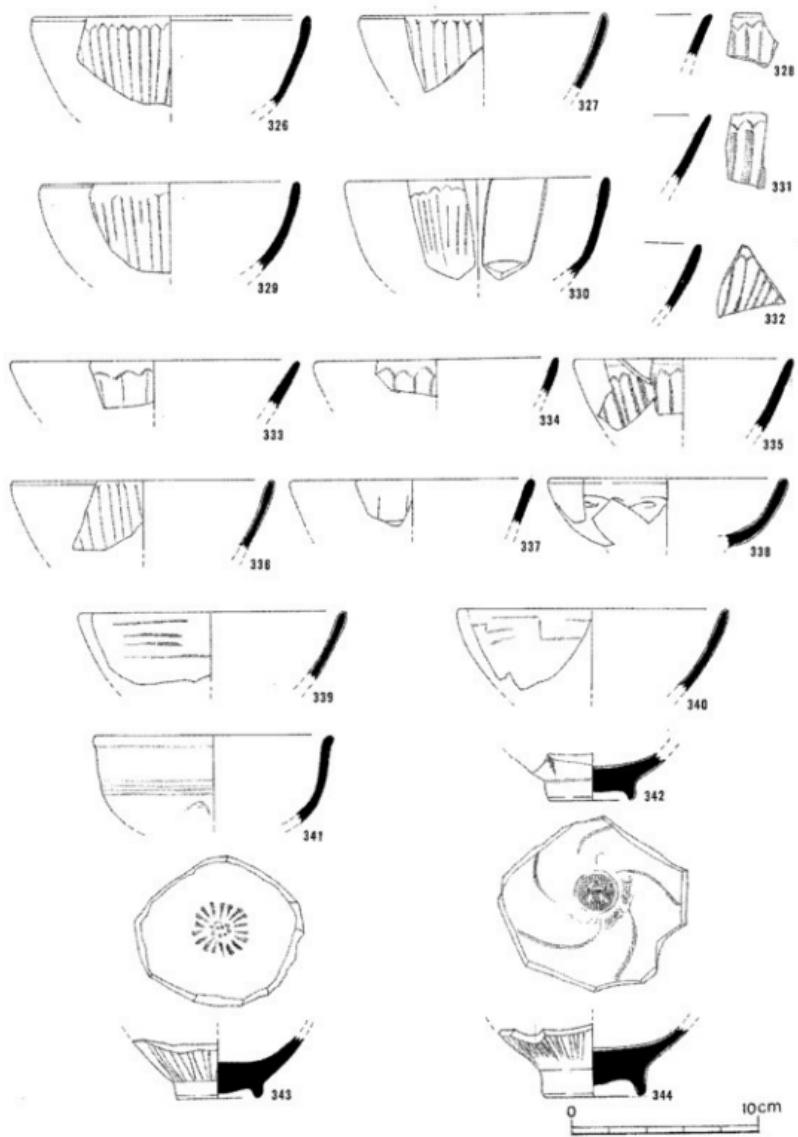
第44図 備前焼5(甕)、常滑焼(甕)



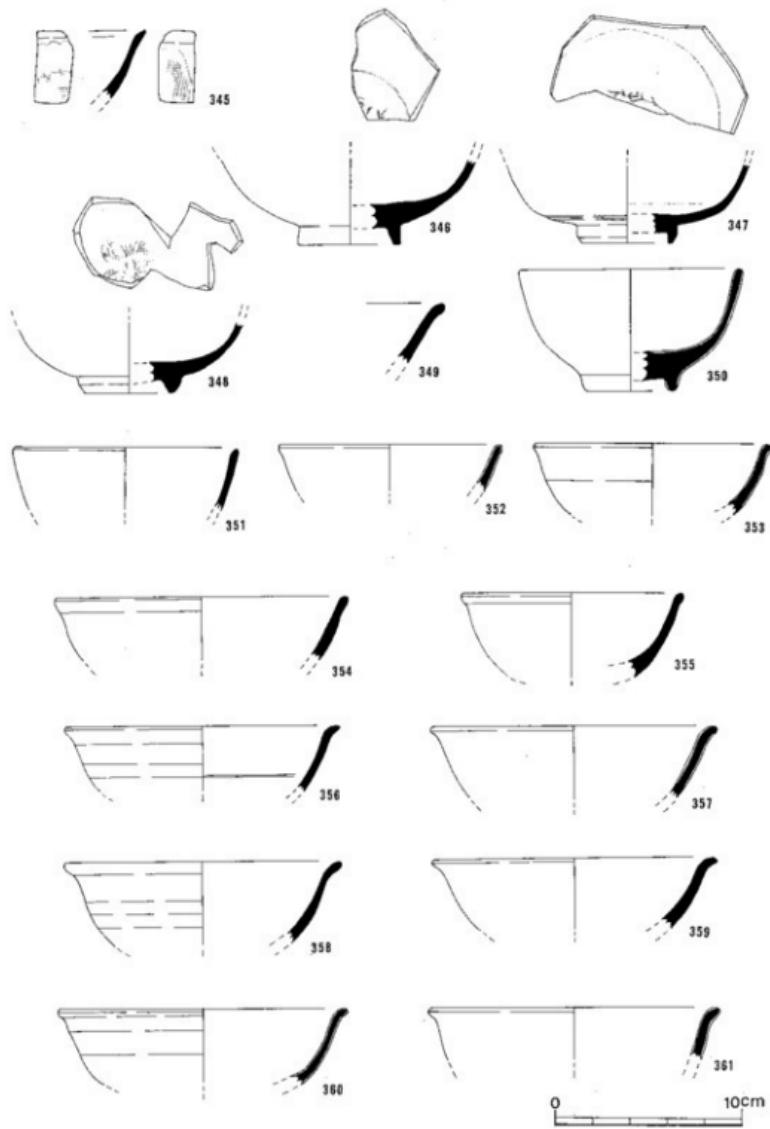
第45図 備前焼6(壺)



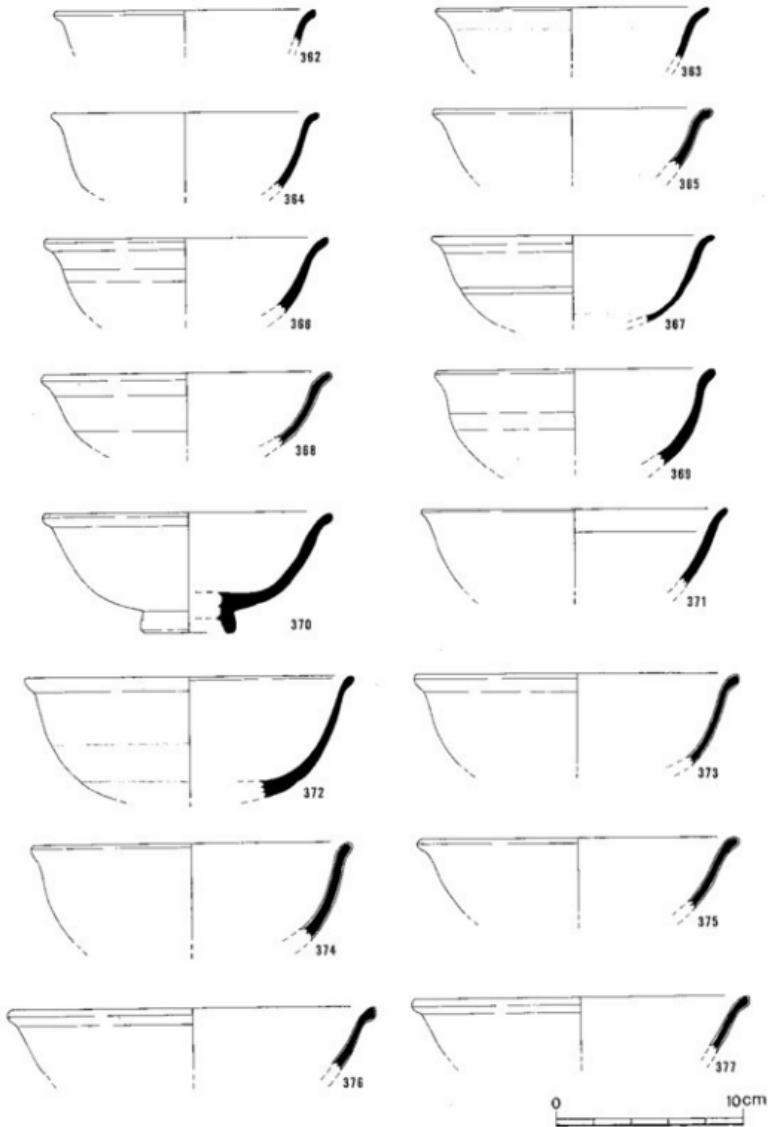
第46図 備前焼7(窯)



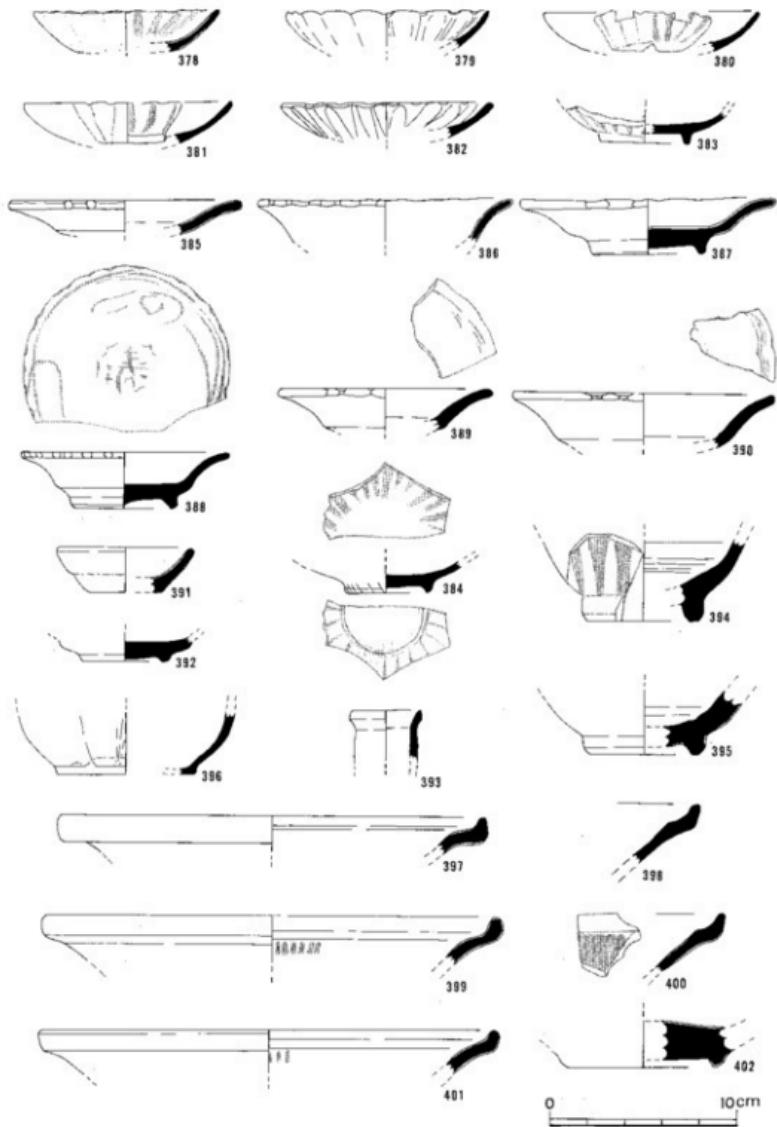
第47図 青磁1(碗)



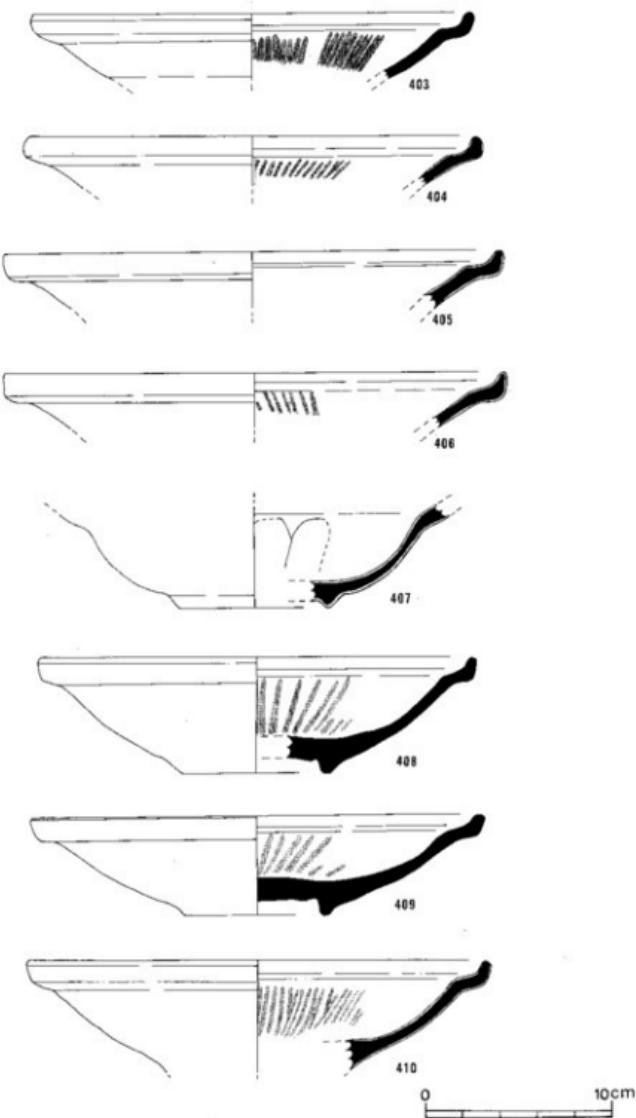
第48図 青磁2（碗）



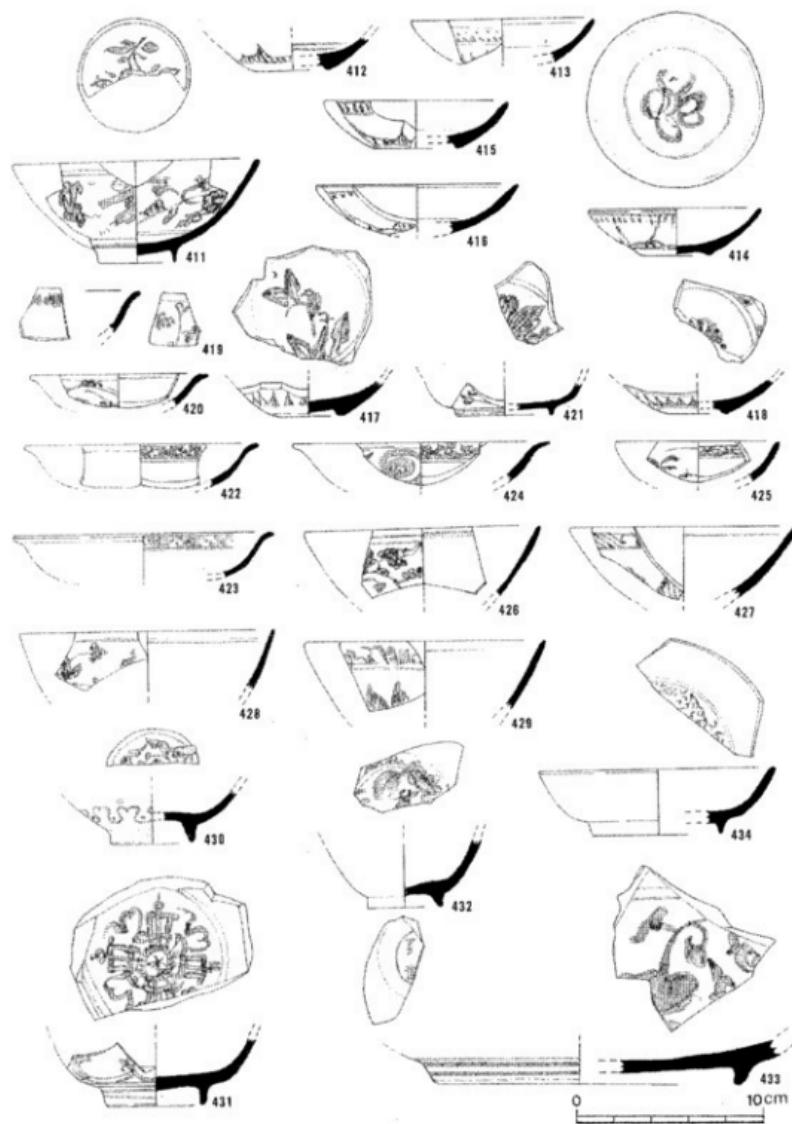
第49図 青磁3（碗）



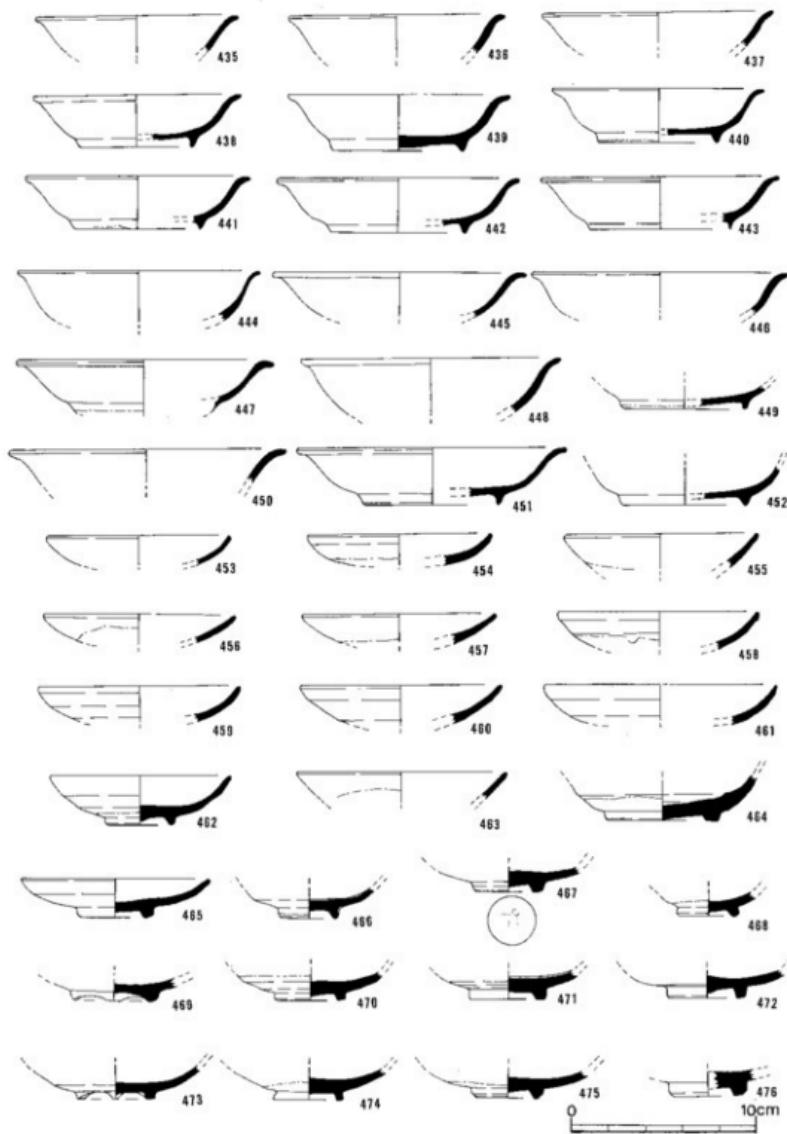
第50図 青磁4(皿・壺・盤)



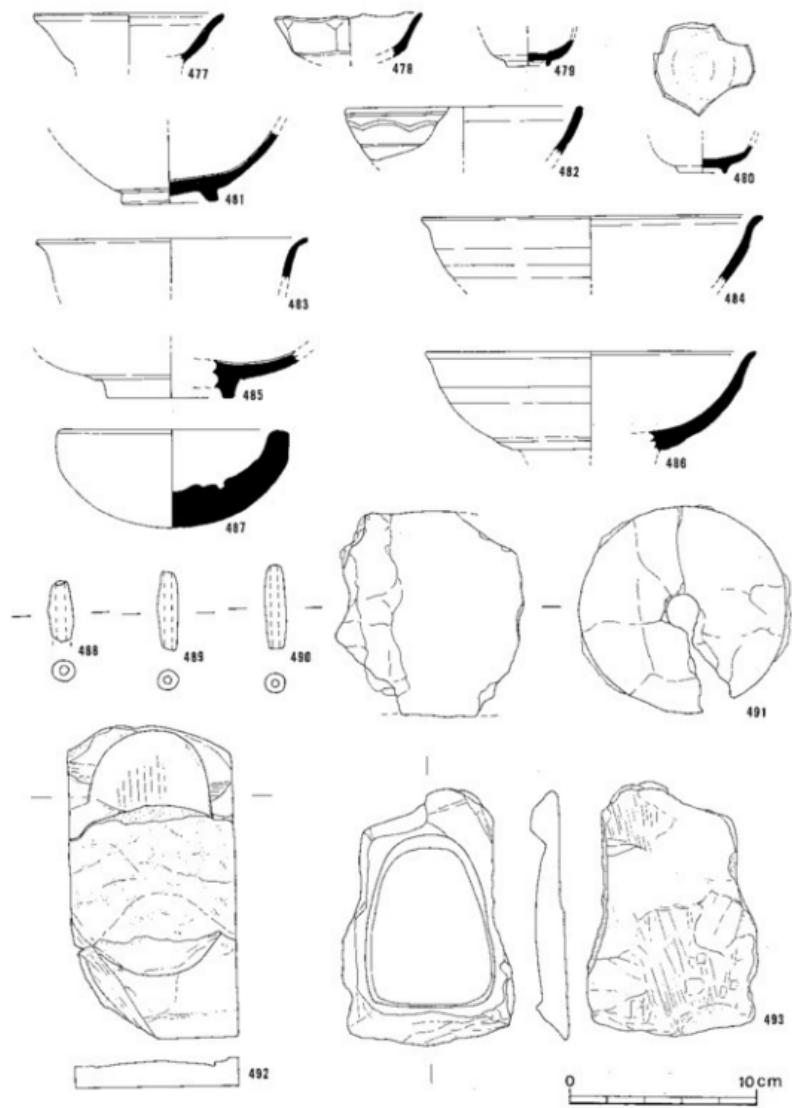
第51図 青磁5（盤）



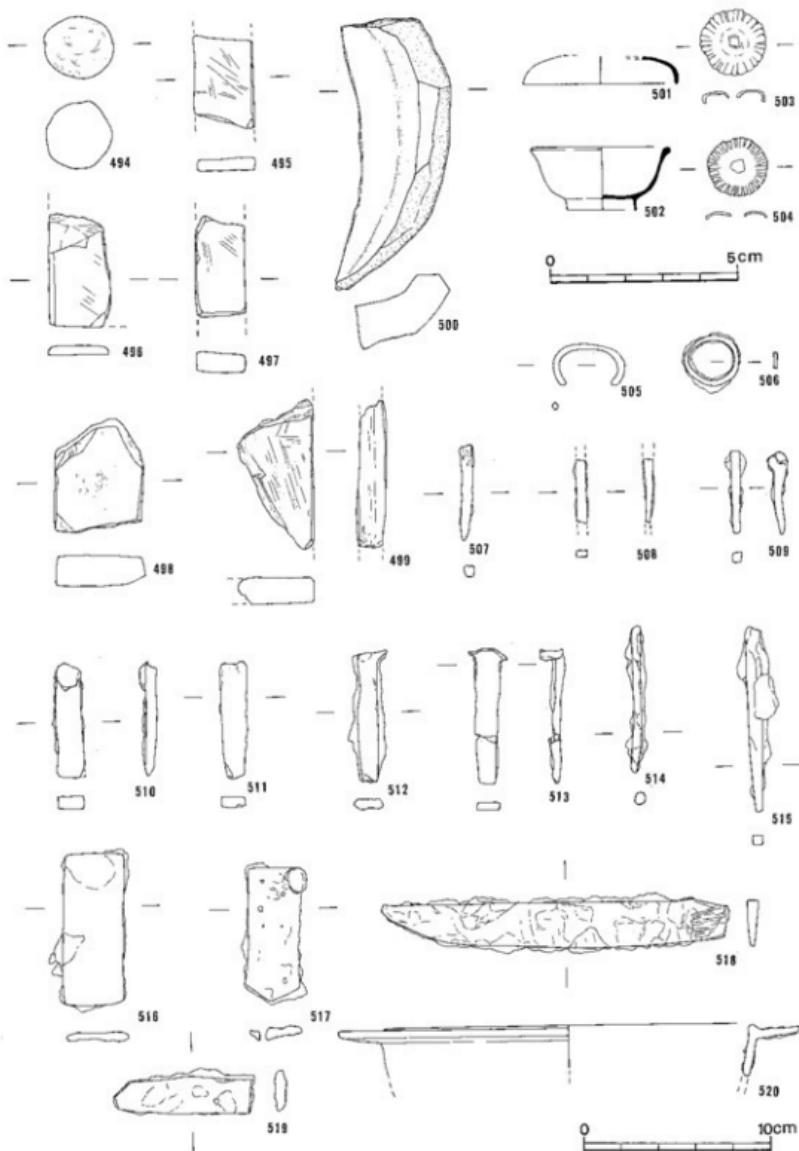
第52図 赤絵（碗）、染付（皿・碗・盤）



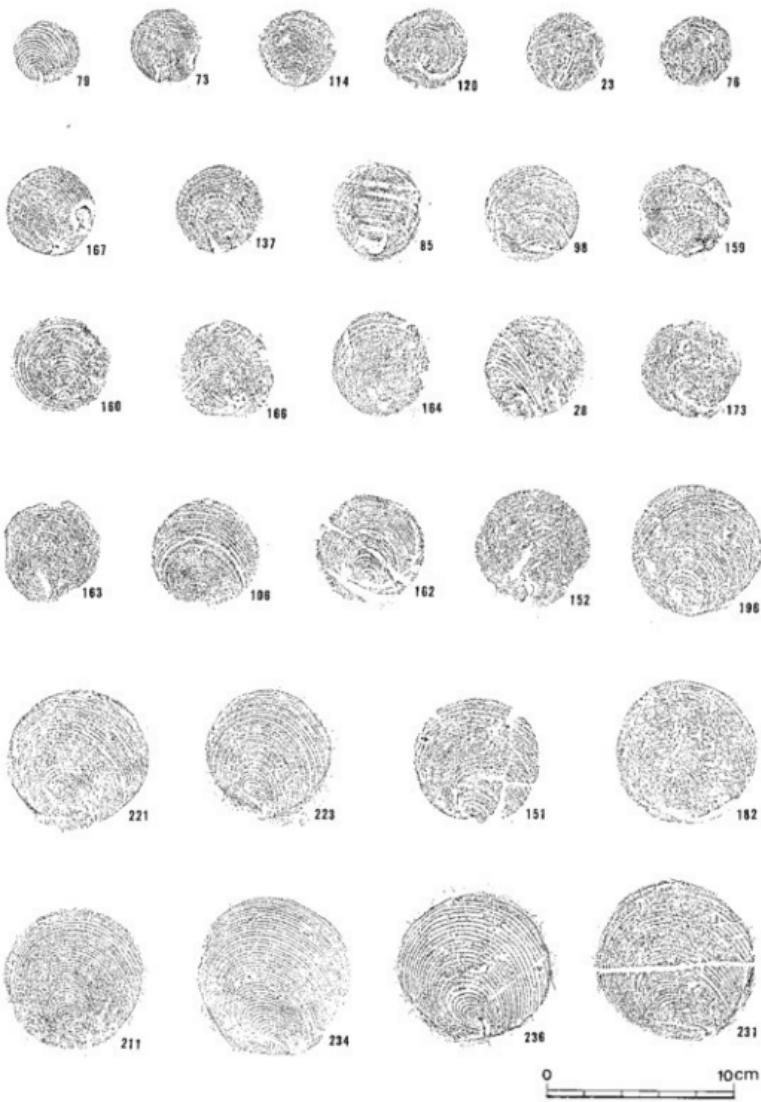
第53図 白磁1(Ⅲ)



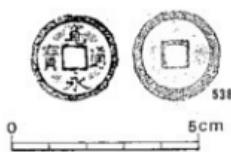
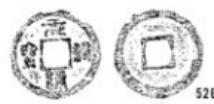
第54図 白磁2(皿・小杯・碗)、土製品、石製品



第55図 石製品、金属・青銅製品



第56図 土師質土器底部拓本



第57図 古銭拓本

第2表 出土土器法量表1

種別 番号	器種	法量(cm)	外 内(断)	郭	遺構名	備考				
1	土師質土器	小皿	7.0	1.3	3.8	—	橙色7.5YR7/6 △	II郭 SB5		
2	△	杯	—	(2.3)	4.2	—	浅黃褐色7.5YR8/6 △	△	△	
3	△	△	—	(2.9)	4.5	—	橙色5YR7/6 △	△	△	
4	△	△	10.5	2.5	4.7	—	黃橙色7.5YR7/8 △	△	SB7	
5	白	磁	皿	(1.5)	7.2	—	灰白色10Y8/1 △	△	SA4	
6	△	△	13.6	(2.6)	—	—	灰白色10Y8/1 △	△	SB7	
7	土師質土器	杯	—	(1.0)	4.7	—	黃橙色7.5YR7/8 △	△	SK1	
8	△	△	—	(1.6)	5.1	—	橙色5YR6/8 △	△	△	
9	△	△	—	(1.7)	5.0	—	橙色7.5YR7/6 △	△	△	
10	△	△	—	(2.0)	5.0	—	淺黃色2.5Y7/3 △	△	△	
11	瀬戸・美濃系陶器	天目繩	12.5	(3.0)	—	—	暗褐色7.5YR3/4 (にぶい黄褐色10YR7/2)	△	△	
12	青	磁	菊皿	10.9	3.3	4.8	—	明綠灰色7.5GY7/1 △	△	△
13	△	△	—	(1.0)	4.5	—	灰白色10Y7/2 △	△	△	
14	染	付	皿	10.6	2.8	4.2	—	灰黃色2.5Y7/2 △	△	△
15	△	△	—	8.8	(1.7)	—	灰白色10Y7/1 △	△	△	
16	△	△	—	11.4	(2.1)	—	灰白色5GY8/1 △	△	△	
17	△	△	—	10.4	2.6	4.4	—	灰白色10Y7/1 △	△	△
18	△	△	—	12.9	(2.5)	—	—	明綠灰色10GY8/1 △	△	△
19	備	蒲燒	壺	—	—	—	—	にぶい赤褐色5YR4/3 △	△	△
20	△	△	—	60.0	(7.5)	—	—	灰赤色2.5YR4/2 赤褐色10R4/3	△	SB5
21	△	△	—	61.0	(28.9)	—	—	極暗赤褐色2.5YR2/3 沃赤色2.5YR4/2	△	SB7
22	土師質土器	小杯	—	7.6	2.0	5.6	—	橙色5YR7/6 △	△	SK2
23	△	△	—	8.5	2.1	4.2	—	橙色7.5YR7/6 △	△	△
24	△	杯	—	12.4	3.9	7.0	—	橙色7.5YR7/6 △	△	△
25	△	△	—	13.6	3.7	5.6	—	にぶい黃褐色10YR7/3 △	△	△
26	△	△	—	13.6	4.2	7.4	—	橙色7.5YR7/6 △	△	△
27	△	△	—	13.8	4.1	5.8	—	浅黃褐色10YR8/4 △	△	△
28	△	△	—	13.0	3.8	5.6	—	浅黃褐色10YR8/4 △	△	△
29	△	△	—	12.8	3.2	7.2	—	橙色7.5YR7/6 △	△	△
30	△	△	—	13.6	3.4	6.6	—	橙色7.5YR7/6 △	△	△

第3表 出土土器法量表2

擇団 番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(面)	邦	遺構名	備考
			口徑	器高	底径	高台高					
31	土師質土器	杯	14.1	3.8	7.0	—	浅黄橙色10YR8/4 タ	II郭	SK2		
32		タ	13.4	3.7	7.0	—	にふい黄橙色10YR7/4 タ	タ	タ		
33		タ	14.2	3.6	7.8	—	浅黄橙色7.5YR4/8 タ	タ	タ		
34		皿	10.9	1.6	7.8	—	浅黄橙色10YR8/3 タ	タ	タ		
35		タ	15.2	3.4	8.2	—	浅黄橙色10YR8/3 タ	タ	タ		
36		杯	15.0	4.0	8.2	—	浅黄橙色10YR8/3 タ	タ	タ		
37	青磁	碗	14.2	(2.9)	—	—	綠灰色7.5GY6/1 タ ~(灰色N6/)	タ	タ		
38	備前焼	擂鉢	—	(3.4)	(12.6)	—	暗赤褐色3.5YR3/2 タ	タ	タ		
39	土師質土器	小杯	6.6	1.7	4.8	—	橙色7.5YR7/6 タ	SK3			
40		タ	14.4	3.1	8.0	—	浅黄橙色7.5YR8/3 タ	タ	タ		
41		タ	13.3	3.5	8.0	—	浅黄橙色7.5YR8/3 タ	タ	タ		
42		タ	14.6	3.6	7.6	—	浅黄橙色7.5YR8/4 タ ~10YR ~	タ	タ		
43	備前焼	甕	—	(17.4)	22.2	—	にふい赤褐色5.5YR4/3 灰褐色7.5YR4/2	タ	SK1		
44	染付	碗	—	(3.6)	6.5	—	明綠灰色10G7/1 タ	SD1			
45	產地不明陶器	壺	9.6	(6.0)	—	—	灰赤色2.5YR4/2 灰褐色5.YR5/2	タ	タ		
46	土師質土器	皿	—	(1.7)	5.2	—	にふい橙色5.YR6/4 タ	SD2			
47		タ	11.5	2.3	5.0	—	褐色5.YR6/6 タ	タ	タ		
48		鑷	21.8	(6.9)	—	—	橙色7.5YR7/6 タ	タ	タ		
49	白磁	皿	—	(2.8)	7.2	—	灰白色10Y8/1 タ	タ	タ		
50		タ	—	(2.3)	8.0	—	灰白色10Y8/1 タ	タ	タ		
51	備前焼	擂鉢	32.0	4.8	—	—	黃褐色2.5Y5/3 灰色10Y5/1	タ	SD3		
52	白磁	皿	—	(1.1)	7.5	—	灰白色10Y8/1 タ	タ	タ		
53		タ	8.8	2.0	4.0	—	灰白色10Y8/1 タ	SD4			
54		タ	—	(1.3)	11.6	—	灰白色10Y8/1 タ	タ	タ		
55		タ	18.3	(2.9)	—	—	灰白色10Y8/1 タ	タ	タ		
56	青磁	皿	11.4	(2.4)	—	—	オリーブ灰褐色5GY6/1 タ ~(灰白色7.5Y8/1)	タ	SD6		
57		碗	13.5	(2.6)	—	—	明綠灰色7.5GY7/1 タ ~(灰白色N7/ )	タ	タ		
58		タ	14.4	(2.3)	—	—	明オリーブ灰褐色2.5GY7/1 タ ~(灰白色10YR8/2)	タ	タ		
59	備前焼	小壺	—	(8.1)	5.4	—	にふい赤褐色5YR5/4 タ	タ	タ		
60	鉄製品	釘	全長 6.0	全幅 0.7	全厚 0.6	重量(g) 11.3			タ	タ	

第4表 出土土器法量表3

插図 番号	種別	器種	法 量(cm)				色 調	外 内(断)	郭	遺構名	備考
			口径	器高	底径	高台高					
61	醜前焼	甕	—	(19.0)	40.8	—	灰黄褐色10YR5/2 灰オリーブ色5Y5/2	II郭	SD2		
62	染付	碗	12.0	3.4	—	—	灰白色10Y8/1	タ	P3		
63	土師質土器	小皿	5.0	1.6	4.0	—	にぶい黄褐色10YR7/4 “	II郭	P5		
64	染付	皿	11.4	2.8	6.0	—	明緑灰色10GY8/1 “	II郭	P4		
65	土製品	羽口	全長 (10.6)	直径 9.2	孔径 1.8	—			タ	P1	
66	產地不明陶器	壺	—	(9.8)	—	—	暗赤褐色2.5YR3/2 “	タ	P2		
67	タ	タ	—	(8.8)	14.5	—	暗赤褐色2.5YR3/2 “	タ	タ		

插図 番号	種別	器種	法 量(cm)				色 調	外 内(断)	郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高					
68	土師質土器	小杯	5.8	2.0	2.9	—	浅黄褐色7.5YR8/6 “	II郭	F8-15	IV層	
69	タ	タ	6.0	2.0	3.0	—	橙色7.5YR7/6 “	タ	G9-25		
70	タ	タ	6.2	2.6	3.8	—	橙色7.5YR7/6 “	タ	G7-7	II層	
71	タ	タ	7.1	2.0	4.2	—	橙色7.5YR7/6 “	タ	G7-21	IV層	
72	タ	タ	7.2	2.1	4.0	—	浅黄褐色7.5YR8/3 “	タ	タ	タ	
73	タ	タ	7.3	2.6	4.0	—	浅黄褐色10YR8/3 “	タ	タ	タ	
74	タ	タ	7.4	2.0	4.0	—	にぶい黄褐色10YR7/4 “	タ	タ	タ	
75	タ	タ	7.4	2.0	4.0	—	にぶい黄褐色10YR7/4 “	タ	タ	タ	
76	タ	タ	7.4	2.2	3.8	—	浅黄褐色7.5YR8/4 “	タ	タ	タ	
77	タ	タ	7.4	2.6	3.6	—	にぶい橙色7.5YR7/4 “	タ	C区	III層	
78	タ	小皿	5.6	1.8	3.8	—	にぶい黄褐色10YR7/4 “	タ	F8-20	IV層	
79	タ	タ	5.6	1.7	3.4	—	橙色7.5YR7/6 “	タ	G7-13	I~III	
80	タ	タ	6.2	1.65	4.2	—	橙色5YR7/8 “	タ	F8-15	IV層	
81	タ	タ	6.2	1.8	3.9	—	橙色5YR7/6 “	タ	タ	タ	
82	タ	タ	6.5	1.7	4.5	—	浅黄褐色10YR8/4 “	I郭	G8-25	タ	
83	タ	タ	6.6	1.45	4.3	—	黄灰色2.5Y4/1 “	II郭	F8-15	タ	
84	タ	タ	7.0	1.75	4.4	—	にぶい橙色7.5YR7/4 “	タ	タ	タ	
85	タ	タ	5.4	1.2	5.0	—	にぶい橙色7.5YR7/4 “	タ	タ	タ	
86	タ	タ	5.5	1.9	4.6	—	浅黄褐色10YR8/4 “	タ	タ	タ	
87	タ	タ	6.0	1.1	4.2	—	灰黄褐色10YR6/2 褐灰色10YR6/1	タ	G7-8	II層	
88	タ	タ	6.2	1.5	5.4	—	橙色5YR7/6 “	タ	F8-15	IV層	

第5表 出土土器法量表4

排図番号	種別	器種	法量(cm)				色調 外 内(断)	郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高				
89	土師質土器	小皿	6.2	1.7	5.0	—	浅黄橙色7.5YR8/6 *	II郭	F8-15	IV層
90	タ	タ	6.2	1.4	5.0	—	浅黄橙色10YR8/4 黄灰色2.5Y4/1 橙色7.5YR6/6 *	タ	F8-20	タ
91	タ	タ	6.0	1.4	5.1	—	浅黄橙色10YR8/3 *	タ	F8-15	タ
92	タ	タ	6.7	1.5	5.3	—	浅黄橙色10YR8/3 *	タ	タ	タ
93	タ	タ	6.4	1.6	5.2	—	に赤い黄橙色10YR7/4 *	タ	C区	III層
94	タ	タ	6.4	1.4	5.0	—	橙色5 YR7/6 *	タ	G8-21	IV層
95	タ	タ	6.5	1.3	5.0	—	に赤い橙色5.5YR7/4 *	タ	F8-15	タ
96	タ	タ	6.5	1.3	5.4	—	に赤い橙色5 YR7/4 *	タ	タ	タ
97	タ	タ	6.5	1.5	5.1	—	に赤い橙色7.5YR7/4 *	タ	タ	タ
98	タ	タ	6.5	1.7	5.3	—	浅黄橙色10YR8/3 *	タ	タ	タ
99	タ	タ	6.5	1.9	5.9	—	に赤い橙色7.5YR7/4 *	タ	タ	タ
100	タ	タ	6.6	1.7	5.2	—	橙色7.5YR7/6 *	タ	タ	タ
101	タ	タ	6.7	1.4	5.2	—	に赤い橙色7.5YR7/4 *	タ	タ	タ
102	タ	タ	6.8	1.5	5.6	—	に赤い橙色7.5YR7/4 *	タ	タ	タ
103	タ	タ	7.0	1.5	5.0	—	に赤い黄橙色10YR6/3 黒褐色2.5Y3/1 浅黄橙色7.5YR8/4 *	タ	C区	III層
104	タ	タ	7.4	1.5	5.3	—	浅黄橙色10YR8/4 *	タ	F8-15	IV層
105	タ	タ	8.0	1.7	5.1	—	に赤い黄橙色10YR7/4 *	タ	G7-21	タ
106	タ	タ	8.0	1.7	5.8	—	に赤い黄橙色10YR7/3 *	タ	F8-15	タ
107	タ	タ	8.0	1.6	5.4	—	橙色7.5YR7/6 *	タ	F8-20	タ
108	タ	タ	8.2	1.9	6.6	—	浅黄橙色10YR8/4 *	タ	F8-15	タ
109	タ	タ	8.2	1.8	3.6	—	黄橙色7.5YR7/8 *	タ	I 6-7	II層
110	タ	タ	8.8	1.7	6.5	—	橙色7.5YR7/6 *	タ	F8-15	IV層
111	タ	タ	6.2	2.0	5.0	—	灰白色10Y6/1 *	タ	F8-20	タ
112	タ	タ	6.3	2.0	4.2	—	に赤い黄橙色10YR7/3 *	タ	C区	III層
113	タ	タ	6.4	2.0	4.2	—	橙色7.5YR7/6 *	タ	F8-15	IV層
114	タ	タ	6.4	2.0	4.3	—	浅黄橙色7.5YR8/3 *	タ	タ	タ
115	タ	タ	6.6	2.2	4.4	—	橙色7.5YR7/6 *	タ	タ	タ
116	タ	タ	6.6	2.0	5.2	—	橙色7.5YR7/6 *	タ	タ	タ
117	タ	タ	6.7	1.4	5.5	—	に赤い橙色7.5YR7/4 橙色5 YR6/6 浅黄橙色7.5YR8/6 *	タ	G7-3	II層
118	タ	タ	6.8	2.1	5.0	—	浅黄橙色7.5YR8/6 *	I郭	G8-15-26	IV層

第6表 出土土器法量表5

插図 番号	種別	器種	法 量(cm)				色 調	外 形(断)	郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高					
119	土師質土器	小皿	6.8	2.0	5.2	-	にぶい黄色10YR7/4 にぶい橙色7.5YR7/4 にぶい橙色7.5YR7/4	II郭	F8-15	IV層	
120	タ	タ	6.8	2.1	4.4	-	タ	タ	タ		
121	タ	タ	7.0	2.0	5.6	-	橙色7.5YR7/6 タ	タ	タ	タ	
122	タ	タ	7.2	2.1	5.0	-	にぶい黄色2.5Y6/3 タ	タ	G7-13	I~II層	
123	タ	タ	7.4	2.3	6.0	-	にぶい橙色7.5YR7/4 タ	タ	F8-15	IV層	
124	タ	タ	7.8	2.0	6.2	-	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	タ	タ	タ	
125	タ	タ	7.8	2.1	4.7	-	浅黄橙色7.5YR8/6 橙色5YR7/6	タ	F8-20	タ	
126	タ	タ	8.0	2.1	6.0	-	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	I郭	OB-H-26	タ	
127	タ	タ	6.8	2.3	5.8	-	浅黄橙色10YR8/3 タ	タ	G8-5	II層	
128	タ	タ	7.0	2.5	5.8	-	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	II郭	F8-15	IV層	
129	タ	タ	7.4	3.0	5.3	-	浅黄橙色10YR8/4 タ	タ	タ	タ	
130	タ	タ	7.5	2.5	4.7	-	浅黄橙色7.5YR8/3 タ	タ	表探		
131	タ	タ	7.8	2.3	4.8	-	橙色7.5YR7/6 タ	タ	F8-15	IV層	
132	タ	小杯	4.9	2.5	3.8	-	浅黄橙色7.5YR8/3 タ	タ	G7-22	III層	
133	タ	小皿	6.4	1.6	3.4	-	浅黄橙色7.5YR8/6 タ	タ	G6-13	II層	
134	タ	タ	7.0	1.8	3.6	-	橙色7.5YR7/6 タ	I郭	H6-16	タ	
135	タ	タ	6.8	1.3	3.6	-	浅黄橙色7.5YR8/4 タ	II郭	C区	III層	
136	タ	杯	-	(3.2)	4.7	-	にぶい黄橙色10YR7/4 浅黄橙色10YR8/4	タ	G9-25	II層	
137	タ	タ	-	(3.4)	4.9	-	浅黄橙色10YR8/4 タ	タ	タ	タ	
138	タ	タ	-	(4.2)	4.8	-	浅黄橙色7.5YR8/4 タ	タ	F8-15	IV層	
139	タ	タ	-	(3.2)	5.0	-	浅黄橙色10YR8/4 橙色7.5YR7/6	タ	G8-6	II層	
140	タ	タ	-	(3.0)	5.0	-	浅黄橙色10YR8/4 タ	タ	G9-25		
141	タ	タ	-	(2.6)	5.2	-	浅黄橙色10YR8/3 タ	タ	タ		
142	タ	タ	-	(3.4)	5.4	-	浅黄橙色10YR8/4 タ	タ	タ		
143	タ	タ	-	(3.4)	5.5	-	にぶい橙色7.5YR7/4 にぶい黄橙色10YR7/3	タ	C区	III層	
144	タ	タ	-	(2.8)	5.6	-	淡黄色2.5Y8/4 タ	タ	H10-3	II-III層	
145	タ	タ	-	(2.6)	5.6	-	にぶい橙色5YR6/4 浅黄橙色10YR8/3	タ	C区	III層	
146	タ	タ	-	(2.1)	6.0	-	橙色7.5Y7/6 タ	タ	G8-6	II層	
147	タ	タ	-	(3.5)	6.0	-	にぶい橙色10YR6/4 タ	タ	G6-10	タ	
148	タ	タ	-	(3.2)	6.0	-	浅黄色2.5Y7/4 タ	タ	F8-15	IV層	

第7表 出土土器法量表6

擇図 番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(所)	郭	出土Grid	層位
			L径	器高	底径	高台高					
149	土師質土器	杯	—	(1.5)	6.0	—	淡黃褐色2.5YR8/4 浅黃橙色10YR8/4 にぶい橙色7.5YR7/4	II郭	G9-25		
150	タ	タ	—	(4.4)	6.2	—	+	タ	F9-5	II層	
151	タ	タ	—	(3.4)	7.0	—	にぶい橙色10YR7/3 +	I郭	H7-17	タ	
152	タ	タ	—	(3.5)	6.2	—	浅黃橙色10YR8/4 +	II郭	G9-25	タ	
153	タ	タ	—	(4.3)	6.1	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	F9-5	タ	
154	タ	タ	—	(2.8)	6.6	—	浅黃橙色10YR8/3 +	タ	C1区	III層	
155	タ	タ	—	(2.5)	8.0	—	にぶい橙色7.5YR7/4 +	タ	F8-15	IV層	
156	タ	タ	8.7	3.4	4.6	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	F8-20	タ	
157	タ	タ	10.9	2.7	5.0	—	浅黃橙色10YR8/4 +	タ	F8-15	タ	
158	タ	タ	11.0	3.3	5.2	—	浅黃橙色10YR8/4 +	タ	G7-21	タ	
159	タ	タ	11.0	3.2	5.0	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	G7-22	III層	
160	タ	タ	11.8	4.1	5.4	—	明黃褐色10YR7/6 +	タ	G7-3	IV層	
161	タ	タ	12.0	4.0	5.2	—	浅黃橙色10YR8/4 +	タ	G7-21	タ	
162	タ	タ	12.0	3.5	5.6	—	浅黃橙色10YR8/3 +	タ	G7-22	タ	
163	タ	タ	12.3	4.0	5.6	—	にぶい黄橙色10YR7/4 +	タ	G7-21	タ	
164	タ	タ	12.4	4.0	5.6	—	浅黃橙色10YR8/3 +	タ	タ	タ	
165	タ	タ	12.4	3.7	5.4	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	タ	タ	
166	タ	タ	12.4	4.1	5.4	—	黄橙色10YR8/6 +	タ	タ	タ	
167	タ	タ	13.0	4.9	5.0	—	にぶい橙色7.5YR7/4 +	タ	F8-15	タ	
168	タ	タ	13.8	3.2	6.2	—	浅黃橙色10YR8/4 +	タ	F8-20	タ	
169	タ	タ	10.4	3.1	4.6	—	浅黃橙色7.5YR8/6 +	タ	G7-3	II層	
170	タ	タ	11.6	4.3	5.4	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	F8-20	IV層	
171	タ	タ	11.7	3.9	5.6	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	G7-21	タ	
172	タ	タ	11.7	4.3	6.0	—	橙色5YR7/8 +	タ	タ	タ	
173	タ	タ	11.9	5.0	5.2	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	F8-15	タ	
174	タ	タ	12.0	4.4	5.8	—	にぶい橙色7.5YR7/4 +	タ	H10-3		
175	タ	タ	12.2	4.1	4.8	—	浅黃橙色7.5YR8/6 +	タ	F8-20	IV層	
176	タ	タ	12.2	4.2	6.0	—	にぶい橙色7.5YR7/4 +	タ	F8-15	タ	
177	タ	タ	12.6	3.8	6.0	—	橙色5YR7/8 +	タ	タ	タ	
178	タ	タ	12.7	4.8	6.1	—	橙色7.5YR7/6 +	タ	H9-21	II-2層	

第8表 出土土器法量表7

排号 番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(断)	幕	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高					
179	土師質土器	杯	12.9	4.8	5.2	—	浅黄橙色7.5YR8/6 ク	II幕	G7-12	IV層	
180	タ	タ	13.0	5.2	5.6	—	浅黄橙色7.5YR8/6 ク	タ	F8-20	タ	
181	タ	タ	13.1	3.8	6.2	—	浅黄橙色7.5YR8/6 ク	タ	タ	タ	
182	タ	タ	12.3	3.8	7.8	—	にぶい黄橙色10YR7-3 ク	タ	F8-15	タ	
183	タ	タ	11.7	4.0	6.5	—	浅黄橙色10YR8/4 ク	タ	タ	タ	
184	タ	タ	12.3	3.4	6.8	—	にぶい黄橙色10YR7/3 ク	タ	タ	タ	
185	タ	タ	12.7	3.4	7.0	—	浅黄橙色10YR8/4 ク	タ	タ	タ	
186	タ	タ	13.2	4.0	7.2	—	浅黄橙色7.5YR8/4 ク	タ	タ	タ	
187	タ	タ	13.4	3.7	7.4	—	浅黄橙色10YR8/3 ク	タ	タ	タ	
188	タ	タ	13.6	3.9	6.4	—	浅黄橙色10YR8/4 ク	タ	タ	タ	
189	タ	タ	13.8	3.9	8.0	—	浅黄橙色7.5YR8/4 ク	タ	タ	タ	
190	タ	タ	14.4	3.5	7.5	—	浅黄橙色7.5YR8/6 ク	タ	タ	タ	
191	タ	タ	14.6	3.7	8.0	—	橙色7.5YR7/6 ク	タ	タ	タ	
192	タ	タ	11.4	3.6	6.3	—	橙色7.5YR7/6 ク	タ	タ	タ	
193	タ	タ	12.2	4.0	6.8	—	浅黄橙色7.5YR8/6 ク	タ	タ	タ	
194	タ	タ	12.5	3.7	6.6	—	にぶい橙色5 YR7/4 ク	タ	タ	タ	
195	タ	タ	12.6	3.5	7.0	—	にぶい黄橙色10YR7/4 ク	I幕	H7-11	II層	
196	タ	タ	12.8	4.5	7.2	—	にぶい黄橙色10YR7/4 ク	タ	G7-10	III層	
197	タ	タ	13.0	4.0	6.5	—	橙色7.5YR7/6 ク	II幕	F8-15	IV層	
198	タ	タ	13.0	3.8	6.4	—	にぶい橙色7.5YR7/4 ク	タ	タ	タ	
199	タ	タ	13.1	3.7	7.0	—	浅黄橙色7.5YR8/3 ク	タ	タ	タ	
200	タ	タ	13.1	3.6	6.7	—	浅黄橙色10YR8/3 ク	タ	タ	タ	
201	タ	タ	13.2	4.0	7.0	—	浅黄橙色10YR8/4 ク	タ	タ	タ	
202	タ	タ	13.2	3.6	6.6	—	浅黄橙色10YR8/4 ク	タ	タ	タ	
203	タ	タ	13.6	4.2	6.6	—	浅黄橙色7.5YR8/4 ク	タ	タ	タ	
204	タ	タ	13.2	3.9	7.2	—	にぶい橙色7.5YR7/3 ク	タ	タ	タ	
205	タ	タ	13.3	4.5	7.8	—	灰色5Y5/1 ク	タ	タ	タ	
206	タ	タ	13.4	3.8	7.4	—	にぶい橙色7.5YR7/4 ク	タ	C区	III層	
207	タ	タ	13.6	3.9	5.6	—	にぶい黄橙色10YR7/4 ク	タ	タ	タ	
208	タ	タ	13.9	4.1	6.6	—	浅黄橙色10YR8/4 ク	タ	タ	タ	

第9表 出土土器法量表8

種別 器種 番号	種別 器種	法 量(cm)	外 色調 (内面)			郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高		
209	土師質土器	杯	14.4	4.9	6.8	—	浅黄橙色7.5YR8/-4 +	Ⅱ郭 F8-15 IV層
210	ク	ク	15.5	4.2	5.9	—	浅黄橙色7.5YR8/-4 +	ク ク ク
211	ク	皿	11.1	2.4	7.8	—	橙色7.5YR7/-6 +	ク G8-3 I層
212	ク	ク	11.6	3.0	7.0	—	にぶい黄橙色10YR7/4 +	ク F8-15 IV層
213	ク	ク	12.0	3.1	7.5	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
214	ク	ク	12.8	2.5	6.8	—	橙色5 YR7/-8 +	ク F8-25 III層
215	ク	ク	13.2	3.5	8.0	—	浅黄橙色10YR8/-3 +	ク C区 ク
216	ク	ク	12.4	3.3	7.6	—	浅黄橙色7.5YR8/-3 +	ク F8-20 IV層
217	ク	ク	12.9	3.3	7.5	—	黄橙色7.5YR8/-6 +	ク F8-15 ク
218	ク	ク	13.2	3.3	7.7	—	浅黄橙色10YR8/-3 +	ク ク ク
219	ク	ク	13.2	3.0	8.0	—	にぶい黄橙色10YR7/4 +	ク F8-21 ク
220	ク	ク	13.3	3.1	7.4	—	浅黄橙色7.5YR8/-3 +	ク G7-21 ク
221	ク	ク	13.6	3.0	7.8	—	浅黄橙色7.5YR8/-3 +	ク F8-15 ク
222	ク	ク	13.6	3.5	7.3	—	にぶい黄橙色10YR7/4 +	ク ク ク
223	ク	ク	13.6	2.7	6.6	—	浅黄橙色7.5YR8/-6 +	ク ク ク
224	ク	ク	13.6	3.1	7.0	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
225	ク	ク	13.8	3.7	7.0	—	浅黄橙色7.5YR8/-4 +	ク ク ク
226	ク	ク	14.0	2.9	7.3	—	浅黄橙色7.5YR8/-4 +	ク ク ク
227	ク	ク	14.0	3.0	8.4	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
228	ク	ク	14.4	3.0	8.7	—	浅黄橙色10YR8/-3 +	ク ク ク
229	ク	ク	13.4	3.2	7.6	—	にぶい黄橙色10YR7/4 +	ク ク ク
230	ク	ク	13.4	2.7	7.4	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
231	ク	ク	13.6	2.65	8.8	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
232	ク	ク	13.7	2.9	8.0	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
233	ク	ク	13.8	3.0	7.5	—	浅黄橙色7.5YR8/-3 +	ク ク ク
234	ク	ク	13.8	2.4	8.3	—	橙色7.5YR7/-6 +	ク ク ク
235	ク	ク	14.0	2.3	8.6	—	浅黄橙色10YR8/-4 +	ク ク ク
236	ク	ク	14.2	3.1	8.0	—	黄橙色10YR8/-6 +	ク ク ク
237	ク	ク	14.0	2.6	8.0	—	にぶい黄橙色10YR7/3 +	ク ク ク
238	ク	ク	14.1	2.5	8.0	—	浅黄橙色7.5YR8/-3 +	ク ク ク

第10表 出土土器法量表9

擇因 番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(面)	郭	出土Grid	層位
			口径	脚高	底径	高台高					
239	土質土器	皿	13.4	3.2	6.6	—	橙色5YR7/8 タ	II郭	F8-15	IV層	
240	タ	タ	13.8	2.7	7.2	—	橙色7.5YR7/6 タ	タ	タ	タ	
241	タ	タ	9.0	2.0	—	—	にぶい橙色7.5YR7/4 タ	タ	G9-25	II層	
242	タ	タ	9.6	1.8	5.6	—	にぶい橙色7.5YR7/4 タ	タ	F8-20	IV層	
243	タ	タ	9.0	2.0	—	—	にぶい橙色7.5YR7/4 タ	タ	G9-25		
244	タ	タ	10.7	1.4	7.8	—	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	タ	タ	II層	
245	タ	タ	13.2	2.7	—	—	橙色5YR7/6 タ	タ	F8-15	IV層	
246	タ	タ	12.0	2.5	—	—	橙色7.5YR7/6 タ	タ	F8-20	タ	
247	タ	タ	13.0	1.9	8.0	—	橙色7.5YR7/6 タ	タ	タ	タ	
248	タ	タ	11.9	2.3	—	—	橙色7.5YR7/6 タ	タ	F8-15	タ	
249	タ	タ	12.4	2.6	—	—	浅黄橙色7.5YR8/6 タ	タ	F8-20	タ	
250	タ	タ	13.6	2.5	9.0	—	浅黄橙色7.5YR8/6 タ	タ	タ	タ	
251	タ	タ	15.3	(2.3)	—	—	浅黄橙色7.5YR8/4 タ	タ	G9-25		
252	タ	タ	13.8	2.8	—	—	浅黄橙色7.5YR8/6 タ	タ	F8-15	IV層	
253	タ	タ	16.0	(3.2)	—	—	灰白色2.5Y8/2 タ	タ	G9-25	II層	
254	タ	タ	16.2	(3.0)	—	—	浅黄橙色7.5YR8/6 タ	タ	F8-20	IV層	
255	タ	タ	15.0	(1.5)	—	—	灰白色2.5Y8/2 タ	タ	G9-25		
256	タ	タ	13.5	(1.6)	—	—	灰白色2.5Y8/1 タ	タ	タ		
257	タ	盆	19.0	(3.5)	—	—	にぶい橙色7.5YR6/4 タ	タ	G8-2・3	I層	
258	タ	タ	16.8	(6.0)	—	—	黒褐色10YR3/1 明赤褐色2.5YR5/6	タ	G7-12・13	III層	
259	タ	タ	17.0	(8.3)	—	—	橙色2.5YR6/8 タ	タ	G7-13	II層	
260	タ	タ	16.4	(5.3)	—	—	橙色7.5YR6/6 タ	タ	G-23-24	I層 表土層	
261	タ	タ	22.0	(4.0)	—	—	赤橙色10R6/6 タ	タ	G7-3	II層	
262	タ	タ	21.8	(3.6)	—	—	にぶい橙色7.5YR6/4 にぶい黄橙色10YR7/4	タ	G8-6	タ	
263	タ	タ	21.0	(6.0)	—	—	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	タ	タ	タ	
264	タ	タ	21.2	(6.0)	—	—	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	タ	G7-19	I層	
265	タ	タ	21.0	(7.0)	—	—	にぶい黄橙色10YR7/4 タ	タ	G7-12・13	IV層	
266	タ	タ	20.0	(9.0)	—	—	浅黄橙色10YR8/3 タ	タ	G7-12・13	タ	
267	タ	釜	18.6	(5.7)	—	—	黒褐色7.5YR3/1 *(にぶい赤褐色SYR4/3)	タ	G8-1	I層	
268	瓦質土器	鍋	23.0	(3.9)	—	—	灰黄色2.5Y7/2 タ	I郭	H7-11	タ	

第11表 出土土器法量表10

掲図 番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(底)	郭	出土Grid	層位
			口径	身高	底径	高台高					
269	瓦質土器	鍋	24.0	(5.2)	—	—	に、ぶい、橙色5YR7/4 淡黄色2.5Y8/3	I郭	H7-11	I層	
270	タ	タ	25.7	(6.7)	—	—	灰白色2.5Y7/2 *	II郭	H9-22	II層	
271	タ	擂鉢	—	—	—	—	淡黄色2.5Y8/3 *	タ	G6-9	タ	
272	タ	タ	25.2	9.3	—	—	灰色N5/ *	I郭	H7-6	II・III層	
273	瀬戸・美濃系陶器	碗	16.8	(5.5)	—	—	オリーブ黄色5Y6/3 *	II郭	H9-21	II層	
274	タ	鉢皿	12.2	(2.7)	—	—	オリーブ黄色7.5Y8/2 灰白色5Y8/2 *(灰白色5Y7/2)	タ	F8-15	IV層	
275	タ	タ	15.7	4.2	9.0	—	淡黄色7.5Y8/3 *	I郭	H7-16	III層	
276	タ	碗	—	(3.2)	5.4	0.6	浅黄色2.5Y8/3 浅黄色5Y7/3	タ	タ	II層	
277	タ	天目茶碗	11.4	6.0	4.2	0.1	黒褐色10YR2/2 *(灰黄色2.5Y7/2)	タ	H7-6	III層	
278	タ	タ	11.8	7.2	4.4	0.2	黒褐色10YR2/3 *(灰黄色2.5Y7/2)	タ	H7-11	II層	
279	タ	タ	—	(1.4)	4.2	0.1	暗赤褐色5YR3/3 黒褐色2.5YR11/(淡黄色5YR5/3)	II郭	H6-17-18		
280	タ	タ	13.1	(5.6)	—	—	に、ぶい、黄褐色10YR5/3 に、ぶい、黄褐色10YR4/3 *(灰白色5YR4/3)	タ	G7-17	III層	
281	タ	タ	12.4	(5.9)	—	—	に、ぶい、赤褐色10YR2/3 黒褐色10YR2/3	I郭	H7-11	II層	
282	產地不明陶器	壺	—	(27.0)	14.0	—	黄褐色2.5YR5/6 褐色7.5YR4/4	II郭	F8-20 GR-13 G7-14-18	III層 採探	
283	備前焼	擂鉢	28.0	(6.6)	—	—	に、ぶい、黄褐色10YR4/1 褐灰色10YR5/3	タ	C区	III層	
284	タ	タ	—	—	—	—	に、ぶい、黄褐色7.5YR4/2 灰褐色7.5YR5/3	タ	タ	タ	
285	タ	タ	27.0	(7.0)	—	—	に、ぶい、黄褐色2.5YR に、ぶい、黄褐色10YR6/3	タ	G7-17	IV層	
286	タ	タ	—	—	—	—	灰赤色2.5YR4/2 *	I郭	G7-20	II層	
287	タ	タ	25.5	11.3	13.4	—	明赤褐色5YR5/6 に、ぶい、赤褐色5YR5/4	II郭	G7-13	IV層	
288	タ	タ	24.0	(6.7)	—	—	灰色N4/ *	タ	F8-20	タ	
289	タ	タ	27.0	(5.0)	—	—	に、ぶい、橙色7.5YR6/4 *	タ	G7-21	タ	
290	タ	タ	31.0	(7.8)	—	—	灰オリーブ色5Y5/2 黄褐色2.5Y5/4	タ	G8-6	II層	
291	タ	タ	28.0	(5.4)	—	—	暗灰褐色2.5YR5/2 灰色5Y7/2	タ	G8-1	IV層	
292	タ	タ	28.0	(6.0)	—	—	に、ぶい、黄色2.5Y6/3 *	タ	G9-25		
293	タ	タ	27.0	(7.0)	—	—	灰黄褐色10YR5/2 灰白色7.5Y8/2	タ	G8-1	IV層	
294	タ	タ	30.0	(8.6)	—	—	暗灰褐色2.5Y5/2 *	タ	F8-20	タ	
295	タ	タ	27.6	10.2	14.2	—	棕色7.5YR7/6 *	タ		I層 表上	
296	タ	タ	31.4	(8.3)	—	—	灰赤色10R4/2 *	タ	G7-13	E・E層	
297	タ	タ	—	(5.3)	13.6	—	暗灰褐色2.5Y5/2 灰褐色2.5Y6/2	I郭	H7-1	I層	
298	タ	タ	—	(5.2)	15.6	—	灰褐色2.5Y5/1 暗灰褐色2.5Y5/2	タ	H7-11	II層	

第12表 出土土器法量表11

掲出番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(研)	郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高					
299	備前焼	鉢	27.2	(6.5)	—	—	灰褐色5YR5/2 にぶい赤褐色SYR5/3	I 郭	G8-5	II層	
300	タ	タ	32.0	(7.2)	—	—	灰色5Y5/1 タ	タ	タ	タ	
301	タ	壺	16.0	(3.8)	—	—	黒褐色10YR2/2 タ	II 郭	G8-1	IV層	
302	タ	タ	—	—	—	—	暗赤褐色2.5YR3/2 黒褐色10YR5/1	I 郭	H7-6	II層	
303	タ	タ	—	—	—	—	暗赤褐色2.5YR3/3 灰赤色2.5YR4/2	タ	H7-16	タ	
304	タ	タ	22.4	(5.5)	—	—	暗灰黄色2.5Y4/2 タ	II 郭	G7-22-23	IV層	
305	タ	タ	21.0	(6.3)	—	—	にぶい赤褐色5YR5/3 黄灰色2.5Y4/1	タ	G9-1 G8-21	タ	
306	タ	タ	14.4	(9.9)	—	—	黒褐色7.5YR3/2 にぶい褐色7.5YR5/3	タ	G8-21 F8-20	タ	
307	タ	タ	14.3	(11.8)	—	—	灰褐色7.5YR4/2 タ	タ	F8-20 G8-15-20	タ	
308	タ	壺	26.8	(6.2)	—	—	灰赤色7.5R4/2 タ	タ	G7-13 G7-18	II-E層 G7-18	
309	タ	タ	34.0	(4.0)	—	—	にぶい赤褐色2.5YR4/3 褐色7.5YR4/3	タ	G6-8	II層	
310	タ	タ	31.8	(7.4)	—	—	暗赤褐色5YR3/4 暗褐色10YR3/3	タ	G7-12	IV層	
311	タ	タ	34.8	(5.8)	—	—	赤褐色10R4/3 *(灰褐色10YR6/2)	タ	G8-6 F8-10	II層	
312	タ	タ	40.0	(5.9)	—	—	灰褐色7.5YR5/2 灰褐色10YR5/2	タ	G8-11	タ	
313	タ	タ	41.0	(6.1)	—	—	黒褐色5YR3/1 灰色N5/	タ	F8-15 F8-21 F9-1	IV層	
314	タ	タ	38.6	(7.9)	—	—	灰褐色7.5YR4/2 にぶい赤褐色7.5YR4/3	タ		表探	
315	タ	タ	50.0	(7.0)	—	—	暗褐色7.5YR4/3 暗赤褐色2.5YR3/4	タ	F8-20	IV層	
316	タ	タ	36.6	(10.8)	—	—	暗赤褐色5YR3/2 灰褐色5YR4/2	タ	F8-15 F8-20	タ	
317	タ	タ	43.4	(15.7)	—	—	にぶい赤褐色5YR4/4 にぶい褐色7.5YR5/3	タ	F8-15	II-E層	
318	タ	タ	50.0	(7.2)	—	—	にぶい赤褐色2.5YR5/4 *2.5YR4/3	タ		表探	
319	タ	タ	43.6	(11.8)	—	—	灰褐色5YR4/2 にぶい赤褐色2.5YR5/4	タ	F8-20	II層	
320	常滑焼	タ	38.0	(12.4)	—	—	黄灰色2.5Y4/1 黒褐色2.5Y3/2	I 郭	G7-20	II層	
321	備前焼	タ	62.4	(86.0)	80.0	—	極暗赤褐色2.5YR2/2 暗赤褐色5YR3/2	II 郭	G7-13 G8-13	II層	
322	タ	タ	—	(8.1)	44.0	—	にぶい褐色7.5YR5/3 灰褐色10YR4/2	I 郭	G8-5	II層	
323	タ	タ	—	(8.4)	20.8	—	暗赤褐色10R3/2 *7.5YR3/2	II 郭	F8-20	IV層	
324	タ	タ	—	(20.6)	27.2	—	にぶい赤褐色2.5YR5/4 灰褐色7.5YR4/2	タ	G8-13-18	III層	
325	タ	タ	32.2	(20.9)	—	—	赤褐色10R4/3 タ	タ	G9-1-2 G8-16	II層	
326	青磁碗	タ	15	(4.8)	—	—	オリーブ灰褐色10Y6/2 *(灰白色10Y7/1)	タ	G7-18	II層	
327	タ	タ	13.2	(4.2)	—	—	オリーブ黄色2.5Y6/3 *(灰黄色2.5Y7/2)	タ	G7-23	III層	
328	タ	タ	—	—	—	—	灰オリーブ色2.5Y6/2 *(灰白色N7/ )	タ	G8-11	II層	

第13表 出土土器法量表12

插図番号	種別	器種	法量(cm)				色調 内(底)	外 郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高				
329	青	磁碗	13.9	(4.8)	—	—	オリーブ灰色10Y5/2 △(灰白色N8/)	I郭	H7-10	II層
330	タ	タ	14.0	(5.4)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 △(淡黄色2.5Y8/3)	II郭	G8-6	タ
331	タ	タ	—	—	—	—	オリーブ灰色10Y5/2 △(灰色7.5Y6/1)	タ	G8-11 F8-15	タ
332	タ	タ	—	—	—	—	オリーブ灰色10Y5/2 △(灰色5Y5/1)	タ	G7-15	タ
333	タ	タ	15.4	(2.6)	—	—	オリーブ灰色5GY6/1 △(灰色N4/)	I郭	表採	
334	タ	タ	13.0	(2.0)	—	—	明緑灰色7.5GY7/1 △(灰白色5Y7/1)	II郭	F9-5	II層
335	タ	タ	11.8	(3.9)	—	—	オリーブ灰色10Y5/2 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	F8-10	I層
336	タ	タ	14.0	(3.8)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 △(淡黄色2.5Y8/3)	タ	G7-18	III層
337	タ	タ	13.0	(2.5)	—	—	黄褐色2.5Y5/3 △(灰白色)	タ	G8-9	II層
338	タ	タ	12.7	(3.7)	—	—	緑灰色10GY6/1 △(灰白色5Y7/1)	タ	F9-5	タ
339	タ	タ	14.0	(3.8)	—	—	緑灰色7.5GY6/1 △(灰白色5Y7/1)	タ	G7-21	IV層
340	タ	タ	14.4	(4.5)	—	—	緑灰色7.5GY6/1 △(灰黄色2.5Y7/2)	タ	表採	
341	タ	タ	12.8	(4.6)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰白色N8/)	I郭	F8-20 G8-15・20	IV層
342	タ	タ	—	(2.5)	4.4	0.5	灰オリーブ色7.5Y6/2 △(灰黄色2.5Y7/2)		表採	表土層
343	タ	タ	—	(3.3)	4.4	0.5	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰白色5Y7/1)	II郭	G7-21	IV層
344	タ	タ	—	(4.9)	5.6	0.9	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰白色7.5Y8/1)		表採	
345	タ	タ	—	—	—	—	明緑灰色7.5GY7/1 △(灰白色7.5Y7/1)	II郭	F8-15	IV層
346	タ	タ	—	(4.7)	5.4	0.9	オリーブ灰色2.5GY6/1 △(灰色N6/)	タ	F8-20	タ
347	タ	タ	—	(4.2)	4.7	0.6	灰色10Y6/1 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	G7-13	タ
348	タ	タ	—	(3.9)	4.9	0.7	オリーブ灰色2.5GY6/1 △(灰白色N7/1)	タ	C区	
349	タ	タ	—	—	—	—	オリーブ灰色5GY5/1 △(灰白色N6/)	タ	表採	
350	タ	タ	11.9	6.6	4.8	0.7	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰白色7.5Y8/1)	タ	G8-16	II層
351	タ	タ	12.0	(3.3)	—	—	オリーブ灰色10Y5/2 △(灰白色)	タ	F9-5	タ
352	タ	タ	11.8	(2.4)	—	—	明緑灰色10GY7/1 △(灰白色10Y7/1)	タ	C区	III層
353	タ	タ	12.4	(3.8)	—	—	オリーブ灰色10Y5/2 △(灰白色5Y7/1)	タ	F8-20	IV層
354	タ	タ	15.4	(3.5)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	G7-14	
355	タ	タ	12.0	(4.6)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	表採	
356	タ	タ	14.4	(3.6)	—	—	オリーブ灰色2.5GY6/1 △(灰白色5Y7/1)	タ	G7-14	II層
357	タ	タ	15.3	(3.9)	—	—	明オリーブ灰色5GY7/1 △(灰白色N7/1)	タ	C区	
358	タ	タ	14.9	(4.4)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 △(灰色N6/)	タ	F8-20	IV層

第14表 出土土器法量表13

插図 番号	種 別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 内(断)	郭	出土Grid	層位
			口徑	器高	底径	高台高					
259	青	磁 瓶	14.7	(3.8)	—	—	オリーブ灰色2.5GY6/1 +(灰色5Y6/1)	II 郭	F8-20	IV層	
360	タ	タ	15.3	(4.2)	—	—	オリーブ灰色2.5GY6/1 +(灰色7.5Y6/1)	タ	タ	タ	
361	タ	タ	15.6	(2.8)	—	—	緑灰色7.5GY6/1 +(灰白色)	タ	C区		
362	タ	タ	14.0	(1.8)	—	—	緑灰色7.5GY6/1 +(灰白色)	タ	F9-5	II層	
363	タ	タ	14.4	(2.8)	—	—	灰オリーブ色7.5YS/3 +(灰色7.5Y6/1)	I 郭	H7-16 H7-11	タ	
364	タ	タ	14.3	(4.1)	—	—	緑灰色7.5GY6/1 +(灰白色N7/)	タ	G7-5	タ	
365	タ	タ	14.6	(3.4)	—	—	オリーブ灰色5GY6/1 +(灰白色5Y7/1)	II 郭	F8-15	IV層	
366	タ	タ	15.6	(4.0)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2 +(灰白色7.5Y7/1)	タ			
367	タ	タ	15.8	(4.6)	—	—	オリーブ黄色7.5Y6/2 +(灰白色7.5Y7/1)	タ	G7-12	IV層	
368	タ	タ	15.1	(4.0)	—	—	灰オリーブ色7.5YS/2 +(灰白色N7/)	タ	F8-15-20	タ	
369	タ	タ	15.0	(5.7)	—	—	灰オリーブ色7.5Y6/2 +(灰色N6/)	タ	F8-20	タ	
370	タ	タ	15.4	6.5	4.7	0.7	明緑灰色7.5GY7/1 +(灰色N6/)	タ	タ	タ	
371	タ	タ	16.3	(4.3)	—	—	緑灰色7.5GY7/1 +(灰白色7.5Y7/1)	タ	H9-16	II層	
372	タ	タ	17.7	(6.4)	—	—	オリーブ灰色5GY6/1 +(灰白色N7/)	タ	F8-20	IV層	
373	タ	タ	17.0	(5.0)	—	—	オリーブ灰色7.5YS/2 +(灰色N7/)	タ	F8-20	タ	
374	タ	タ	16.8	(5.3)	—	—	オリーブ灰色5GY6/1 +(灰黄色2.5Y7/2)	タ	タ	タ	
375	タ	タ	17.0	(4.0)	—	—	オリーブ灰色2.5GY6/1 +(灰白色N7/)	タ	G8-25	タ	
376	タ	タ	19.6	(3.4)	—	—	明オリーブ灰色5GY7/1 +(灰白色N7/)	タ			
377	タ	タ	18.0	(3.0)	—	—	灰オリーブ色7.5YS/2 +(灰色7.5Y4/1)	タ	F8-20	IV層	
378	タ	菊皿	10.0	(2.2)	—	—	明オリーブ灰色2.5GY7/1 +(灰白色5Y8/2)	I 郭	H8-17-18	I層	
379	タ	タ	10.8	2.0	—	—	灰白色2.5GY6/1 +(灰白色2.5Y8/2)	II 郭	H9-21	II層	
380	タ	タ	11.6	(2.1)	—	—	明緑灰色5G7/1 +(灰白色2.5GY8/1)	タ	G7-3	タ	
381	タ	タ	11.1	(2.2)	—	—	灰白色2.5GY8/1 +(灰白色2.5Y8/2)	タ	G8-11	III層	
382	タ	タ	12.1	1.9	—	—	灰白色10Y8/1 タ	タ	H9-22	II層	
383	タ	タ	—	(1.8)	4.8	0.5	灰白色7.5Y7/2 +(浅黄綠色10YR8/2)	タ	F8-15	IV層	
384	タ	タ	—	(1.7)	4.3	0.4	明オリーブ灰色2.5GY7/1 +(灰白色5Y8/2)	タ	G9-20		
385	タ	矮花瓶	12.1	(1.8)	—	—	灰オリーブ色7.5Y6/2 +(灰白色5Y7/2)	タ	I6-1	II層	
386	タ	タ	13.6	(2.3)	—	—	緑灰色5G6/1 +(灰白色N5/)	タ	G7-12-17	IV層	
387	タ	タ	13.8	3.0	5.8	0.5	灰オリーブ色7.5YS/2 +(灰色N5/)	タ	表採		
388	タ	タ	11.3	3.0	5.2	0.5	にせい青色2.5Y6/4 タ	タ	G6-7	II層	

第15表 出土土器法量表14

排図番号	種別	器種	法量(cm)				色調 外 内(側)	幕	出土Grid	層位	
			口径	器高	底径	高台高					
389	青	壺	枝花皿	11.2 (2.3)	—	—	—	オリーブ灰褐色5GY6/1 △(灰色10Y6/1)	II 郡	I 6-7	
390		タ		16.0 (2.8)	—	—	—	オリーブ灰褐色10Y5/2 △(灰色N6/1)	タ	G8-2-3	I 層
391		皿		7.0	2.4	4.0	—	灰オリーブ色7.5V5/3 △(灰色N7/1)	タ	H8-17-18	IV 層
392		タ		— (1.4)	4.6	4.6	—	淡黄色5 Y8/3 △(暗灰黄色2.5Y4/2)	タ	H9-23	II 層
393		壺		(3.6) (2.8)	—	—	—	灰色 S Y5/1 △	タ	G9-1	IV 層
394		タ		— (4.5)	6.0	0.9	—	オリーブ灰褐色5GY6/1 △(灰白色5Y7/1)	タ	F8-20	△
395		タ		— (3.5)	6.0	—	—	オリーブ色2.5GY6/1 △(灰白色5Y7/2)	タ	タ	タ
396		碗		— (3.3)	7.4	—	—	明青灰褐色5BY7/1 △(灰白色10Y8/1)	タ	C区	III 層
397		盤		23.0 (2.0)	—	—	—	オリーブ黄色5 Y6/4 △(にぶい黄褐色10Y7/3)	タ	H6-12	
398		タ		—	—	—	—	灰色7.5Y6/1 △(灰色5Y6/1)	タ	F8-20	IV 層
399		タ		24.0 (2.6)	—	—	—	灰オリーブ色7.5Y5/2 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	C区	
400		タ		—	—	—	—	オリーブ灰褐色2.5GY6/1 △(灰白色10Y8/1)	タ	G9-9	II 層
401		タ		24.3 (2.4)	—	—	—	明オリーブ灰褐色5GY7/1 △(灰白色2.5Y7/1)	タ	C区	
402		タ		— (2.5)	8.0	0.5	—	明オリーブ灰褐色5GY7/4 △	タ	F8-20	IV 層
403		タ		23.8 (3.8)	—	—	—	オリーブ灰褐色2.5GY6/1 △(灰白色5Y7/2)	タ	タ	タ
404		タ		24.2 (2.7)	—	—	—	灰オリーブ色7.5Y5/3 △(灰白色7.5Y8/2)	タ	C区	
405		タ		27.0	3.0	—	—	明緑灰褐色10GY7/1 △(灰色N7/1)	タ	F8-15	IV 層
406		タ		27.0	3.0	—	—	明緑灰褐色10GY7/1 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	F8-20	△
407		タ		— 5.5	8.0	0.4	—	灰オリーブ色7.5Y5/2 △(灰白色N7/1)	タ	タ	タ
408		タ		— 6.3	8.0	0.8	—	灰オリーブ色7.5Y6/2 △	タ	タ	タ
409		タ		— 5.4	8.0	0.9	—	灰オリーブ色7.5Y6/2 △	タ	F8-15	△
410		タ		24.6 (6.0)	—	—	—	明オリーブ灰褐色5GY7/1 △(灰白色5Y8/2)	タ	C区	タ
411	赤	繪	碗	13.2	5.4	4.1	0.7	灰白色N8/ △	タ	G7-3	II 層
412	染	付	皿	— (2.2)	3.9	0.3	—	灰白色5 Y7/2 △(灰白色7.5Y8/2)	タ	G6-9	△
413		タ		9.8 (2.2)	—	—	—	明オリーブ灰褐色2.5GY7/1 △(灰白色7.5Y7/1)	タ	G7-18	III 層
414		タ		9.4	2.5	3.7	0.2	明緑灰褐色10GY7/1 △	タ	G6-23	
415		タ		9.9	2.5	4.4	—	灰白色10Y7/1 △(灰白色2.5Y8/2)	タ	H8-17-18	
416		タ		10.9 (2.7)	—	—	—	灰白色10Y8/1 △(灰黄色10Y7/2)	タ	H6-13	
417		タ		— (1.8)	3.1	0.4	—	淡黄色2.5Y8/3 △(灰白色2.5Y8/2)	タ	H8-23	I 層
418		タ		— (1.8)	3.0	0.3	—	明オリーブ灰褐色2.5GY7/1 明緑灰褐色10GY8/1	タ	G7-18	IV 層

第16表 出土土器法量表15

揮因 番号	種 別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 内(断)	郭	出土Grid	層位
			口径	都高	底径	高台高					
419	染付	皿	—	—	—	—	明緑灰色 5 G7-/1 △ (灰白色2.5Y8/2)	II 部	G8-9	Ⅲ層	
420	タ	タ	9.6	(1.7)	—	—	灰白色5GY8-/1 △ (灰白色NB-/)	タ	F8-12	Ⅱ層	
421	タ	タ	—	(2.0)	5.1	0.4	灰白色NB-/ △ (灰白色7.5Y8/1)	タ	G8-2-3-4	I 層	
422	タ	タ	12.4	(2.3)	—	—	灰白色5GY8-/1 △ (灰白色7.5Y8/1)	タ	G6-24	Ⅲ層	
423	タ	タ	14	(2.4)	—	—	灰白色NB-/ △ (灰白色10Y8/1)	タ	H6-17-18	I層下	
424	タ	タ	13.8	(2.2)	—	—	明青灰色 5 BT-/1 △ (灰白色NB-/)	タ	G8-21	Ⅱ層	
425	タ	タ	8.8	(2.1)	—	—	明緑灰色10GT-/1 △ (灰白色2.5GY8/1)	タ	G8-7	タ	
426	タ	碗	12.6	(3.7)	—	—	明緑灰色10GY8/1 △ (灰白色NB-/)	タ	G9-3	タ	
427	タ	タ	12.2	(3.9)	—	—	オリーブ灰色10Y6/2. △ (にぶい黄褐色10Y6/4)	タ	表探		
428	タ	タ	13.7	(3.2)	—	—	灰白色10Y8-/1 △	タ	G7-12-17	Ⅳ層	
429	タ	タ	12.8	(3.8)	—	—	明緑灰色10GY8-/1 △ (灰白色2.5Y8/2)	タ	G6-19	Ⅱ層	
430	タ	タ	—	(2.8)	4.5	1.2	明緑灰色10G7-/1 △ (灰白色7.5Y8/)	タ	G6-9	タ	
431	タ	タ	—	(3.6)	5.3	1.0	明緑灰色5G7-/1 △ (灰白色5Y8/2)	タ	G7-4	Ⅲ層下	
432	タ	タ	—	(3.5)	4.1	0.7	灰白色NB-/ △ (灰白色5Y8-/1)	タ	G7-22-23	Ⅲ層	
433	タ	盤	—	(2.4)	8.5	0.9	灰白色NB-/ △ (灰白色5 Y7/1)	タ	H8-19	I 層	
434	タ	皿	12.8	3.5	7.0	0.5	明緑灰色10GY8-/1 △ 灰白色NB-/	タ	G8-13	Ⅲ層	
435	白磁	皿	10.6	(1.9)	—	—	灰白色7.5Y8-/1 △	タ	H9-23	Ⅱ層	
436	タ	タ	11.4	(2.1)	—	—	灰白色7.5Y8-/1 △	タ	G7-8	I 層	
437	タ	タ	12.4	(1.9)	—	—	灰白色7.5Y7-/1 △	タ	G8-11	Ⅱ層	
438	タ	タ	11.2	2.8	6.2	0.5	灰白色 5 Y7-/1 △ (灰白色2.5Y7/1)	タ	G8-1	タ	
439	タ	タ	12.0	3.0	7.0	0.4	灰白色2.5Y8-/2 △	タ	H6-17 G7-22-23	Ⅱ・Ⅲ層	
440	タ	タ	11.5	2.9	6.5	0.4	灰白色NB-/ △	タ	G7-17-18	Ⅱ・Ⅲ層	
441	タ	タ	11.6	2.8	6.8	0.4	灰白色10Y8-/1 △	タ	C区		
442	タ	タ	13.0	2.9	7.2	0.5	灰白色7.5Y8-/1 △	タ	G7-8	I 層	
443	タ	タ	12.8	2.8	7.6	0.4	灰白色7.5Y7-/1 △	タ	F8-15	Ⅱ層	
444	タ	タ	13.0	(2.7)	—	—	灰白色7.5Y8-/1 △	タ	G9-I G8-20	Ⅳ層	
445	タ	タ	13.6	(2.4)	—	—	灰白色7.5Y8-/1 △ (灰白色 5 Y8/2)	タ	H8-15		
446	タ	タ	13.6	(2.2)	—	—	灰白色10Y7-/1 △	タ	G8-7-11	Ⅱ層	
447	タ	タ	13.6	(2.9)	—	—	灰白色7.5Y7-/1 △	タ	G6-12		
448	タ	タ	14.0	(3.0)	—	—	灰白色10Y8-/2 △	タ	G7-12	Ⅳ層	

第17表 出土土器法量表16

地図 番号	種別	器種	法量(cm)				色調	外 内(断)	郭	出土Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高					
449	白	磁 盆	—	(1.3)	6.6	0.4	灰白色7.5Y8/-1 △		II郭	G6-14	II層
450	夕	夕	14.6	(1.8)	—	—	灰白色7.5Y8/-1 △		夕	G8-11	III層
451	夕	夕	14.5	3.1	7.3	0.6	灰白色7.5Y7/-2 △ (灰白色5Y8/-1)		夕	G7-18	II・III層
452	夕	夕	—	(2.0)	6.7	0.5	灰白色N8/-1 △		夕	H6-17-18	
453	夕	夕	9.8	(1.6)	—	—	灰白色2.5GY8/1 △ (灰白色7.5Y8/2)		夕	G8-6	II層
454	夕	夕	(8.8)	(1.7)	—	—	灰白色5GY8/-1 △ (灰白色5Y8/2)		夕	G8-16	夕
455	夕	夕	10.3	(1.9)	—	—	灰白色7.5Y8/-1 △		夕	C区	III層上
456	夕	夕	10.2	(1.4)	—	—	明綠灰色7.5GY8/1 △ (灰白色5Y8/2)		夕	G9-2	II層
457	夕	夕	10.3	(1.6)	—	—	灰白色2.5Y8/-1 (淡黃色2.5Y8/-4)		夕	C区	III層
458	夕	夕	10.8	(1.8)	—	—	灰白色7.5Y8/-1 △ (灰黃色2.5Y7/2)		夕	F8-20	IV層
459	夕	夕	10.9	(1.8)	—	—	灰白色10Y8/-1 △ (淺黃色2.5Y7/3)		夕	夕	夕
460	夕	夕	10.6	(2.1)	—	—	灰白色7.5Y8/-1 △		夕	C区	III層
461	夕	夕	12.5	(1.8)	—	—	灰白色5Y8/-1 △		I郭	G8-15-20	IV層
462	夕	夕	9.7	2.7	3.4	0.4	灰白色5Y8/-1 △		夕	G8-25	夕
463	夕	夕	11.4	(1.6)	—	—	灰白色2.5Y8/-1 △ (淡黃色2.5Y8/3)		夕	G8-15-20	夕
464	夕	夕		(2.4)	6.2	0.3	明オリーブ灰色SGY7/1 △ (灰白色5Y8/1)		夕	夕	夕
465	夕	夕	10.0	2.1	4.1	0.4	灰白色N8/-1 △		II郭	F8-20	夕
466	夕	夕	—	(1.6)	3.0	0.5	灰白色7.5Y8/-1 △ (灰白色N7/-)		夕	G8-13	夕
467	夕	夕	—	(1.3)	3.2	0.4	灰白色10Y8/-1 △ (灰白色5Y8/2)		夕	G7-21	夕
468	夕	夕	—	(1.3)	2.9	0.3	灰白色7.5Y8/-1 △ (灰黃色2.5Y7/2) (△)		夕	表探	
469	夕	夕	—	(1.2)	4.3	0.2	灰白色5Y8/-2 △ (灰白色7.5Y8/1)		I郭	G8-9	III層
470	夕	夕	—	(1.8)	3.4	0.3	灰白色7.5Y8/-1 △ (灰黃色2.5Y7/2)		II郭	F8-20	IV層
471	夕	夕	—	(1.6)	4.0	0.4	灰白色2.5Y8/-2 △		夕	表探	
472	夕	夕	—	(1.4)	3.3	0.5	灰白色5Y8/-1 △ (にじい黄褐色)10YR7/2		夕	夕	
473	夕	夕	—	(2.8)	4.2	0.3	灰白色N8/-1 △ (灰白色2.5Y8/2)		夕	G7-17	III層
474	夕	夕	—	(1.8)	3.8	0.4	灰白色5Y8/-1 △ (浅黄色2.5Y7/-3)		夕	表探	
475	夕	夕	—	(1.6)	3.4	0.4	灰白色10Y8/-1 △		夕	F8-20 G8-15-20	
476	夕	夕	—	(1.4)	3.6	0.5	灰白色7.5Y8/-1 △ (灰白色5Y8/-2)		II郭	C区	III層
477	夕	夕	10.1	(2.7)	—	—	灰白色10Y7/-1 △		I郭	H7-11	II層
478	夕	夕	7.9	(2.0)	—	—	灰白色7.5Y8/-1 △ (灰白色5Y8/-2)		II郭	F8-20	IV層

第18表 出土土器法量表17

拂岡 番号	種 別	器種	法 量 (cm)				色 調	外 内(断)	郭	出土 Grid	層位
			口径	器高	底径	高台高					
479	白	磁 盆	—	(1.4)	2.2	0.4	灰白色2SY8/1 + (灰白色10Y8/1)	II 郭	H6-I7-18	I層下	
480	タ	小杯	—	(1.6)	2.6	0.3	灰白色N8/ + (灰白色10Y8/1)	タ	F9-5	II 層	
481	タ	碗	—	(3.7)	5.0	0.6	明綠灰色10GY8/1 +	タ	G8-1-2	I・II層	
482	タ	タ	12.7	(2.6)	—	—	灰白色 5 Y8/2 + (淡黄色2SY8/3)	タ	G7-8	I・II層	
483	タ	タ	14.4	(2.4)	—	—	明綠灰色7.5GY8/1 +	タ	H9-18	II 層	
484	タ	タ	18.5	(3.4)	—	—	灰色10Y6/1 + (灰白色10Y7/1)	タ	G9-1 G8-21	IV 層	
485	タ	タ	—	(2.4)	6.8	0.6	灰色10Y6/1 灰白色5Y7/2 (灰白色7SY8/1)	タ	G7-I2-I7	タ	
486	タ	タ	17.8	(5.4)	—	—	明オリーブ灰色2.5GY7/1 +	タ	G9-1 G8-21	タ	

## VII 考察

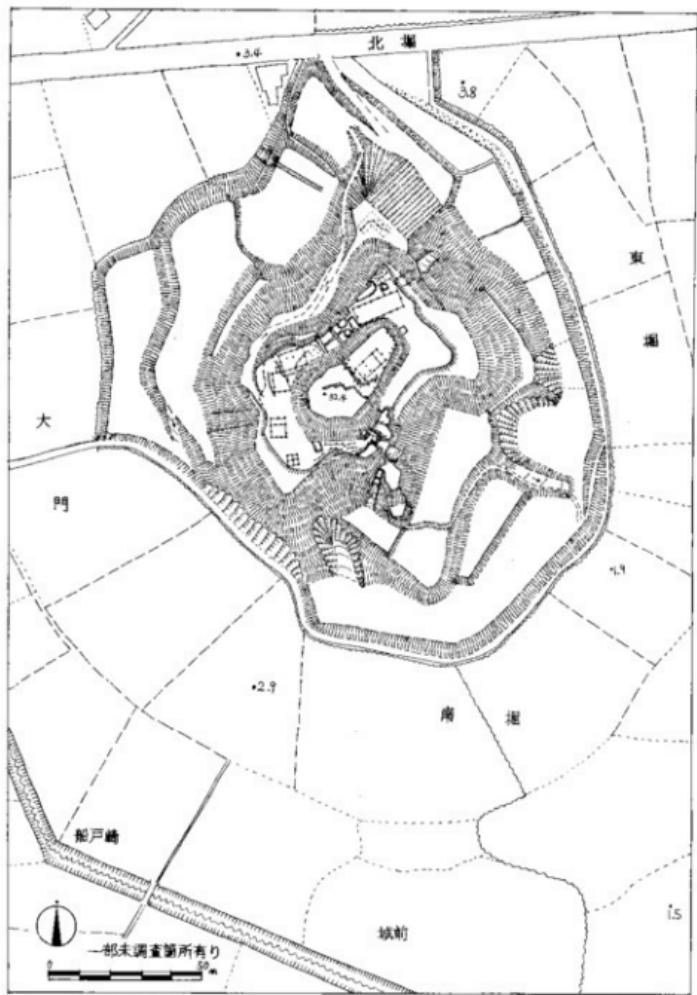
### 1 文献から見た芳原城跡

春野町に所在する中世城跡の中で、文献上から明確に城跡名を確認できるものはない。今使用されている城跡名は、一部軍記物とか城跡が所在する地名や、城主とされている伝承から付けられていることが多い。芳原城跡もその例外ではなく、地名から付けられている可能性がある。文献で芳原城跡の名前ができるのは、明治27年に土佐の古城跡を陪遊して記されている『土佐古城略史』の中である<sup>(1)</sup>。土佐の中世を研究するに欠かせない『長宗我部地検帳』では、地名で芳原所在の城と西分所在の城の二ヵ所が記載されている。所謂芳原城跡と木塚城跡の比定が不明確で、芳原所在の城と西分所在の城のいずれかが芳原城跡になる。この点に関しては、宅間一之氏の文献及び小字からの研究で<sup>(2)</sup>、芳原所在の城が芳原城跡であることが解明されている。

この芳原城跡について『長宗我部地検帳』では、「木津賀古城 左京進殿御分」とあり、城跡内のホノギでは「詰ノタン」とまず記載され、次に「北藏ノタン」「政所ノタン」「弓場ノタン」「北堀フチ」「南ニノヘ」とある。検地の行われた天正17年（1589）2月の芳原城跡の状況を知る事ができる。それぞれの「タン」は「下々定芝荒」とされており、城跡としての機能は無く、荒れた土地であったようである。昭和58年の堀状地形部分の発掘調査報告書<sup>(3)</sup>では、城跡内のそれぞれの「タン」が現在のどの位置にあたるか今後の検討課題としている。この点に関しては後述するが、今回発掘調査の成果として検出遺構とその性格を考察し試案を述べることにする。芳原城跡は、天正年間には完全に廃城となっている点や、城跡曲輪内の性格がホノギ名として残っていること等、資料的に良好な城跡ということができる。さらに土佐の中で「政所」の研究が行われているが<sup>(4)</sup>、城跡の曲輪内に「政所」のホノギが地検帳に残っているのも、芳原城跡が唯一である。

### 2 検出遺構と曲輪の機能分化

I郭で検出した遺構は、掘立柱建物跡と柵列跡である。掘立柱建物跡は詰の北東端部に位置しており、岩盤をL字状に削平し水平な面を造り出して構築している。南西部は、遺構を確認することができなかつたが、I郭の中で広い空間を有しており兵だまりの空間として利用していた可能性が強い。柵列は建物を取り囲むように東側から西側にかけて構築されている。西側斜面は傾斜が緩く、II郭からの登り口が想定できる。I郭は「詰ノタン」と記載されている場所であるが、望楼的建物跡は太平洋が望める眺望のいい北東端に構築し、南西部の広い空間は最後の防御機能としての兵だまりの空間として



土佐 芳原城 調査日：92.12.23 作図者：池田 城 高知県吾川郡春野町芳原城山

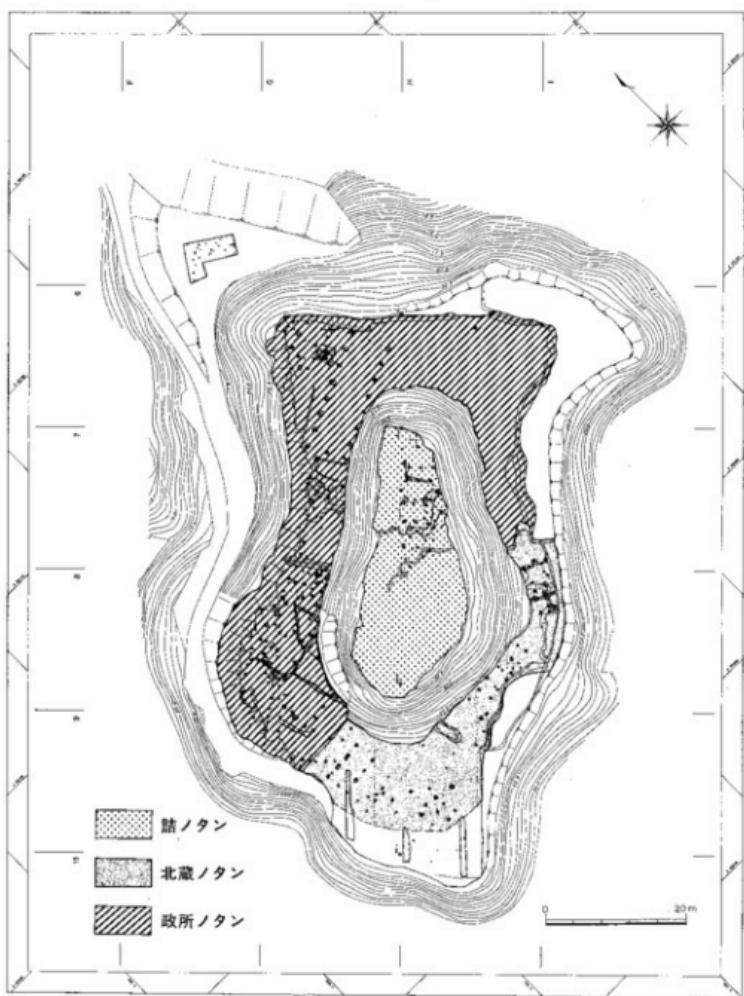
第58図 芳原城跡縄張り図

いる。この空間からは、虎口から進入してきた敵を上から攻撃できる構造になっており、詰の中での機能分化を読み取ることができる。

Ⅱ郭は、虎口・柵列跡・溝跡・掘立柱建物跡・土坑を検出している。掘立柱建物跡は、Ⅱ郭の南西部から北西部にかけて6棟検出している。SB2は2間×2間、SB3は2間×3間の建物である。この2棟の建物はⅡ郭の南西部に位置し、総柱の建物で蔵としての性格を考えることができる。西部に位置するSB4～6の建物は、互いに隣接して構築されている。周間に雨落ち溝を廻らせ、SB5を中心に同じ性格を持つ建物群と考えることができる。北部に位置する建物は、2間×7間と建物の中で飛び抜けて大規模なものである。芳原城跡の中で中心となる建物で、その性格が問題となる所である。これら建物群に関連して他の各遺構が存在しているので、Ⅱ郭にはいる虎口遺構から順に曲輪の使われ方を見ていくことにする。

Ⅱ郭に進入するには、南東部の虎口を除いて他にその道は無い。Ⅱ郭の周縁は急傾斜で落ち込んでおり、下の曲輪からの比高差は約10mを測ることができる。芳原城が構築される以前は、南東に頂上からの丘陵が延びていたと推定でき、この部分を利用して虎口を構築したと考えられる。虎口部分の詳細な検討は、次年度調査の成果で述べることにするが、虎口から北東部は虎口に関連する建物でさえぎられるため直接進入はできない。意図的に南西部の方向に進入させるようにしておらず、Ⅱ郭の各遺構は時計回りに配されている。虎口から西側に柵列SA2・3が存在するが、進入路の両側に柵列を配し、さらに前方部は狭く中程から広めの進入空間を造り出している。柵列はSD8の方向に向いているが、直進するとSD8にあたりここでSA2は屈曲している。SD8は、進入部とSB2・3が構築されている地点を明確に区別する曲輪境の機能を果たしている点と、虎口部分からSB2・3の地点を目隠しする役割を果す2点が考えられ、垣根等の遺構の可能性がある。SB2・3の建物が位置する地点は、ピット以外確認できず蔵としての性格を持つ建物のみが存在していたと考えられる。

Ⅱ郭南西部はSB4・5・6が隣接して存在しており、建物に伴う雨落溝もそれぞれの建物の脇を通り、北部に位置するSD6に流れ込んでいる。SD6から北東部は、基壇状地形の遺構に挟まれやや広い空間となっている。遺構は北東部に土坑が2基残存している。土坑のSK2・3は、土師質土器が多量に出土している。SK3の床面直上には人頭大の火を受けた河原石が認められ、さらにこの土坑は端部にピットを伴っており覆屋の可能性がある。SK2は土師質土器が重なるように出土しており、ハレの場で使用された<sup>(5)</sup>土師質土器を廃棄した場所と考えられる。土坑の東側に位置する基壇状遺構は、岩盤を削り残して形成されている。この遺構にはピットが2カ所掘り込まれており、詰に登る施設に関連する遺構の一部分である可能性がある。SB7は2間×7間(5.7×17.16m)と大規模な掘立柱建物である。土佐の中世遺跡の中で、これはどの規模を持った建物跡



第59図 I・II郭機能分化想定図

検出は初めてで、さらに城郭の中に構築されている点が注目される所である。この建物の北側には、SK 1 の土坑を検出しているが、SB 7 に伴うもので覆屋を持つ遺構である。この建物は前述したハレの場を行う所とを考えることができ、城跡の中での中心的な建物であり虎口からは詰を挟んで反対方向に位置する。

今回の調査で検出した各遺構の性格も含めて検討してきたが、次に『長宗我部地検帳』に記載されている城内のホノギとの関連性を考えていくことにする。地検帳の芳原城跡に関する「詰ノタン」からの記載順番と面積が重要な点と考えることができる。まず「詰ノタン」であるが、面積が「四十四代武歩」とされ壱代 $21\text{m}^2$ と考えれば約 $924\text{m}^2$ となる。この面積は、調査の結果Ⅰ郭の平坦部は約 $400\text{m}^2$ を測るので狭すぎる。斜面下部分までを含めると $980\text{m}^2$ となり、地検帳記載の面積とはほぼ一致する。検地の段階では、詰頂上まで登らず周囲を計測した可能性がある。

「詰ノタン」は明確にその場所を抽出することができたが、次に記載されている「北藏ノタン」からが不明とされていた問題の点である。検地では詰を測り次に「北藏ノタン」を計測しているから、詰に隣接している場所であることと、城郭の中心である「政所ノタン」に挟まれた地点であることが理解できる。調査前段階では、詰の北側にこのタンが位置するのではないかと考えていたが、「北」という方向は城跡の主屋敷と考えられるV郭や「大門」の小字が残る地点付近からみて「北」とすれば、必ずしも詰の北側に位置したと言えないのではないかと考える。調査の結果Ⅱ郭の南西部で、SB 2・3 の建物跡が検出でき総柱であることから倉庫的な性格を考えて見た。この建物跡が検出された場所を、「北藏ノタン」と想定することにする。「北藏ノタン」の面積は、「廿壱代」と記載され約 $441\text{m}^2$ となる。SB 3 と SB 4 の境から SD 8 の部分までの面積は $270\text{m}^2$ で地検帳記載と比べると狭い。しかし、検地当時は SD 8 の境界は確認できず虎口部分も含めている可能性がある。そこで虎口から SD 8 に向かう進入部分も含めて面積を計算すると、 $460\text{m}^2$ となりほぼ一致する。検地は、詰の周囲を測り次に虎口から含めて「北藏ノタン」として計測しているのではないかと考える。

「北藏ノタン」に隣接して「政所ノタン」は存在する。このタンの面積は「壱段七代三歩」と記載されており、約 $1,197\text{m}^2$ になる。調査の結果では、SB 4 から SB 7 を含めてさらに遺構を検出できなかった詰から見て東部にあたる地点を、政所ノタンと想定した。この場所は建物跡が多く、さらにSB 7 等の存在から「政所」の地名にふさわしい遺構が存在している。調査面積は、 $1,153\text{m}^2$ で地検帳記載の面積に近くなる。

「政所ノタン」から次に「弓場ノタン」に移るが、Ⅲ郭を考えていくことにする。Ⅲ郭は、近年の畠地造成工事によりその半分が削平されている。調査はこの部分にトレントを設定し、遺構の確認を行った。ここでもピットを確認することができ、建物の存在を想定できる。現況は約 $490\text{m}^2$ の平坦地であるが、造成前の状況を想定すると約 $1,000\text{m}^2$

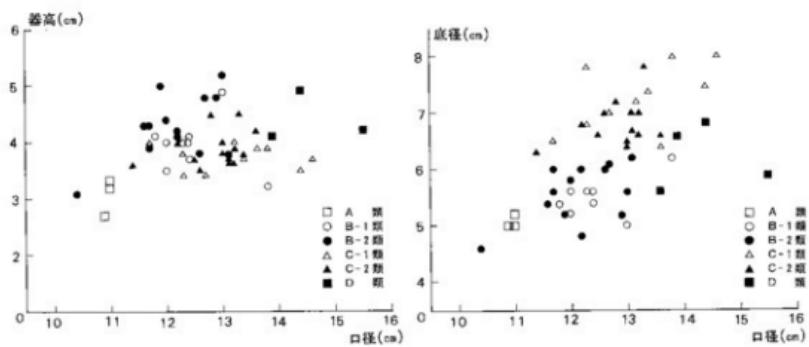
の曲輪であったと考えられる。「弓場ノタン」の記載は、「壱段六代」で約1176m<sup>2</sup>である。造成前の曲輪の状況を考えると、ほぼ近い数値を示している。さらにSB 7からⅢ郭に下りる落ち込みも確認できることから、「政所ノタン」から「弓場ノタン」に移動して検地が行われたことが考えられる。その後検地は「北堀フチ」に移っており、現況でⅢ郭を下れば北堀の小字が残る場所付近に来る。以上の点からⅢ郭が「弓場ノタン」と想定した。

I郭が「詰ノタン」でⅡ郭が「北蔵ノタン」と「政所ノタン」Ⅲ郭が「弓場ノタン」と想定して見た。地検帳に残るホノギは、城内に伝承として残る地名をそのまま使用しており、さらに検出遺構の内容と一致する例は県内の城跡の中では稀である。ここで想定が正しければ、Ⅱ郭の中で虎口からSD 8までの進入路としての空間、蔵として利用した空間、政所として利用した空間と明確に使い分けをしており、一つの曲輪の中での機能分化を見ることができる。さらに「政所ノタン」は、SB 4～6の空間とSD 6から基壇状遺構までの空間、さらにSB 7から東側にかけての空間とそれぞれ機能の違う空間を設けている。さらにⅣ郭からⅦ郭までの調査が進めば、城郭内各曲輪の全体像を浮き彫りにすることができる。

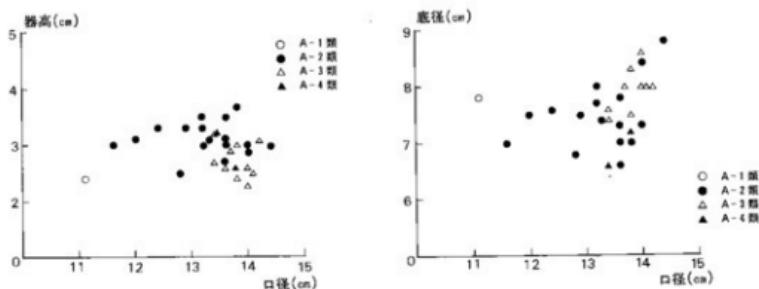
### 3 SK 2 出土の土師質土器について

出土遺物の中で、最も多のが土師質土器である。高知県の土師質土器の編年は、田村遺跡群で編年案が示されている<sup>(4)</sup>。この中でLOC42のSK96では、217個体分の土師質土器を一括廃棄しており、細蓮弁文の青磁碗破片が1点共伴していることから15世紀後半から16世紀前半にかけての良好な編年史料として位置付けられている。本城跡からも個体数を比較すると少ないが、土師質土器がまとまって出土したSK 2の土坑がある。SK 2からは、内外面無文の青磁碗と備前焼播鉢と共に土師質土器皿・小杯・杯が出土している。遺構外出土遺物で土師質土器の分類を行っているが、その分類では小杯C・D類、杯A・C-2類、ⅢA-1・2類が主に出土している。土佐に於ける14～16世紀の土師質土器は、田村遺跡群、芳原城跡、岡豊城跡<sup>(5)</sup>、中村城跡<sup>(6)</sup>、栗本城跡<sup>(7)</sup>、十万遺跡<sup>(8)</sup>等で検討されており、杯に関しては口径と底径の比率の差が認められる点を指摘している。時期が新しくなると、口径と底径の差が大きくなり体部は外上方に大きく開く傾向にある。皿は、守護領国体制下に盛行した手づくりの製品から16世紀にはいるとロクロ製品に変化することも考えられている<sup>(9)</sup>。SK 2出土の杯類は、A類の底径が狭くC類が広いタイプで、両者が混在している状況であるが量的にはC類が多く存在する。田村遺跡群のSK96では、芳原城跡の杯A類に属するタイプがほとんどでC類のものは1点のみである。SK96と時間的なものを比較すると、共伴している青磁からSK 2がやや古く位置付けることができる。杯を見ても口径と底径の差が小さいC類が多く出土して

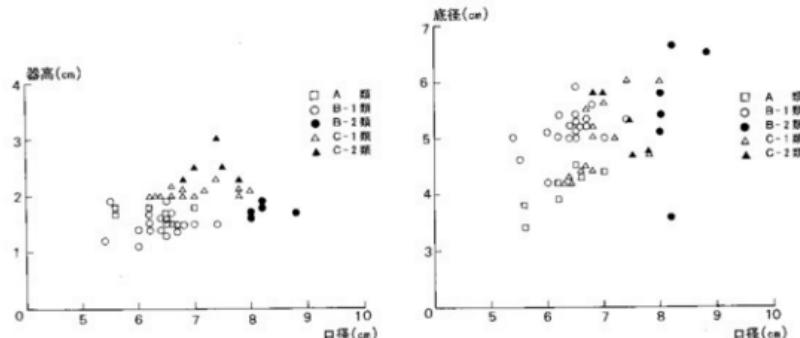
### 土師質土器 杯



### 土師質土器 盆



### 土師質土器 小皿



第19表 土師質土器杯・皿・小皿法量表

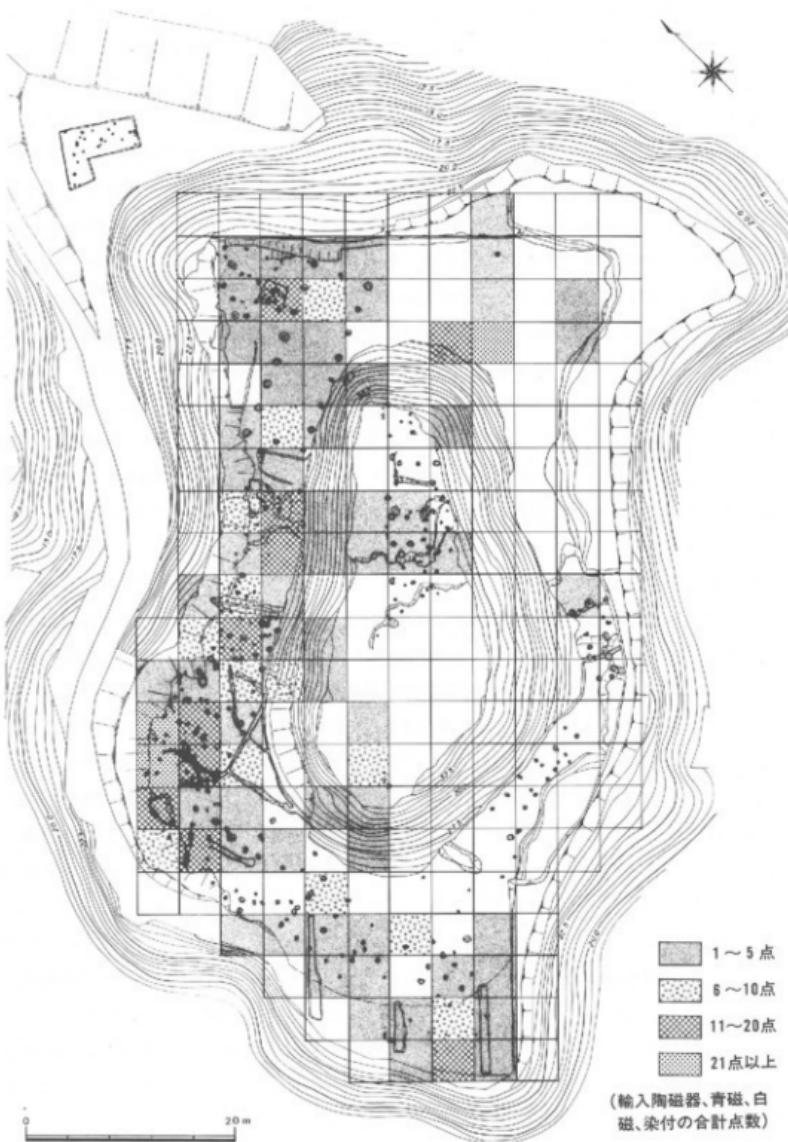
おり、古い様相を理解できるのである。しかしSK 2からは、手づくねの皿が出土しておらずすべてロクロ製品が占めている点検討すべき問題が内在している。

皿は前述した如く、守護領国体制下に於いて土佐で盛行した製品と考えているが、13世紀代に守護所と考えられている国衙周辺で出現を見る事ができ<sup>(12)</sup>、その後14世紀から15世紀代に土佐の中心域で盛行する製品と考える。その消滅は16世紀代を考えているが、手づくねからロクロ製品に変化する様相を今後検討することにより解明して行かなければならない。予察をするとSK96は、細川守護代館の中の遺構で芳原城跡検出のSK 2とは遺構の性格は同じと考えられるが、単純な比較はできず歴史的背景の中での工人集団の動向を考えいかなければならない。また15世紀前半代の十万遺跡のSD 1出土資料では、皿が61.5%・杯が38.5%とほぼ皿が占めているが、前回の芳原城跡堀状地形の調査では、皿2.5%・杯97.5%と逆転しており、皿製品が極端に減少している。今回の調査でも、手づくねの皿は出土しているが数少なく、ロクロの皿も法量的に杯と判別が困難な資料が多く存在する。この現象は、供膳具に認められる食生活様式の変化を具現しているものと考えることができる。SK 2の一括土器群は、十万遺跡SD 1⇒芳原城跡SK 2⇒田村遺跡SK96と位置付けられ15世紀後半段階の土器群と考えておく。

#### 4 輸入陶磁器の組成と数量比較

今回の芳原城跡調査で出土した輸入陶磁器は、破片も含め577点で全体の遺物量からすれば1.6%と少ない。前回の堀状地形部分でも、425点で全体の1.7%と同様な数値を示しており城内で使用された輸入陶磁器の使用頻度を推定することができる。輸入陶磁器の内訳は、青磁が182点で31.5%、染付が92点で15.9%、白磁が303点で52.5%である。前回の堀状地形部分では、総点数425点で青磁が291点で68.5%、染付が22点で5.2%、白磁が110点で25.9%である。堀状地形部分出土の遺物は、V郭からⅧ郭で使用された製品が廃棄されたものと考えられる。これらの数値を比較すると、I郭・II郭とV郭～Ⅷ郭の時期差、曲輪の性格の差を現している。I・II郭では白磁が多く、青磁・染付の順で出土しており、V郭～Ⅷ郭では青磁・白磁・染付となる。染付が多いということは、時期差を認める事ができるが、I・II郭で白磁が多いという点を考えて見たい。今回の調査で輸入陶磁器の出土状況を見ると、政所として想定したSB 5からSB 7の範囲で集中して出土している。政所としてホノギが残るこの地点で、輸入陶磁器が多く出土し中でも白磁が多いという点が興味深い。白磁の中でも、森田編年<sup>(13)</sup>でD類とE類の端反りの皿が同数出土している。E類が占めれば時期的に新しくなるので理解できるが、D類も同数出土しているので問題が残る所である。

長宗我部氏居城の岡豊城跡を見ると、詰から三ノ段までの1～5次調査では、土器総点数の0.6%で474点輸入陶磁器が出土している。内訳は青磁171点で36%、染付247点



第60図 輸入陶磁器出土分布図

で52.1%、白磁56点で11.8%である。四ノ段の6次調査では<sup>(14)</sup>輸入陶磁器総点数415点で、青磁49点で12%、染付235点で56%、白磁131点で32%を占めている。岡豊城跡は、詰・ニノ段から四ノ段までの調査で、出土点数からすれば芳原城跡の出土量とはほぼ同じである。しかし16世紀後半に盛行した岡豊城跡は、染付の量が半数を占めており明確に芳原城跡の組成とは異なる。さらに白磁を見ると、森田編年のE類で端反りの皿が多数を占めている。その他県内の城跡中で、中村城跡も同様の出土状況を見ることができる。以上輸入陶磁器の組成と数量比較から考えられる点として、時代が下るに従い青磁から染付が多くなる状況は、全国的に認められる点であるが<sup>(15)</sup>、白磁は各曲輪で出土量が異なり曲輪の性格で使用の仕方が異なる点を指摘しておきたい。輸入陶磁器の考察としては、物足りない点があるが小野正敏氏の指摘される<sup>(16)</sup>城館内の場の機能差や性格の違いを、芳原城跡でも読み取ることができると考える。

## 5 検出遺構の時期

掘立柱建物跡を中心に、欄列跡・溝跡・土坑等を検出しているが、遺構の時期を明確に押さえられるほど良好な遺物は出土していない。さらに15~16世紀の土佐に於ける土師質土器等の編年も確立されていないため、輸入陶磁器や国内産陶器の備前焼や瀬戸・美濃産の編年を援用し<sup>(17)</sup>、出土遺物の全体の様相を加味しながら検出遺構の時期を考えていきたい。遺物が出土している掘立柱建物跡は、SB 5・7である。SB 5は土師質土器の小皿と杯片が出土している。杯は底部破片であるが、特徴として底部径が狭く新しい様相を持っている。SB 7は、土師質土器杯と白磁の皿、備前焼の壺片が出土している。この中で備前焼の壺片(20・21)は、時期的に新しく<sup>(18)</sup>城館機能時の遺物とは考えられない。さらに柱穴の埋土上層でSB 7周辺で散在している礫と混じって廃棄された状態で出土している。これらのことからSB 7の時期を推定するには、白磁と土師質土器の杯のみとなる。白磁は森田編年のE類で端反りの皿である。欄列のSA 4も白磁の皿が出土しており、SB 7と同様な時期を考えることができる。

SK 1は、SB 7に付設する土坑である。土師質土器、天目茶碗、青磁菊皿、染付皿、備前焼壺が出土している。土師質土器は、底径がやや広めのもので、SB 5の製品よりは古く位置付けられる。天目茶碗は口縁部細片のため時期不明で、染付は小野編年<sup>(19)</sup>の染付皿C群の基筒底タイプがある。備前焼の壺は、真壁編年<sup>(20)</sup>のIV期後半のものである。SK 2は、土師質土器について先述したとおりであるが、上田編年<sup>(21)</sup>のD類青磁碗が共伴して出土している。SK 3は、土師質土器が出土しており杯のC-2類が占めている。SK 2とほぼ同時期として押さえができる。

溝跡は、SD 1~4・6から遺物が出土している。これらの溝は、SB 4~6に伴うもので、雨落ち溝という性格と、掘り込みが浅く上面出土という点から明確にはいえない

が出土遺物を見てもSBと同時期を考えたい。

遺構外の遺物は、実測掲載できたものでも471点ある。土師質土器の供膳具・輸入陶磁器以外を概観して見る。土師質土器の鍋は、肩部に三角形状の突帯を持ち胴部外面に斜位のタタキが施されるタイプが占めている。播磨型とされている製品<sup>(22)</sup>であるが、土佐の15世紀代から16世紀前半代の遺跡で多く見られるものである。16世紀後半の岡豊城・田村遺跡群等ではこのタイプの製品で突帯が消滅するものとなる。瓦質土器の鍋は、15世紀に多く見られるもので在地産のものである。さらに瓦質土器の擂鉢が出土しており、この出現は東播系須恵器が搬入されなくなる時期と備前焼の擂鉢が搬入され始める間を埋める製品と考えており14世紀前半代と考えている。芳原城出土のものは、瓦質土器擂鉢最後の段階のもので16世紀には認められない。瀬戸・美濃系の天目茶碗は、体部外面化粧がけされるものとそうでないもののが存在するが、およそ大窯のⅠ期からⅡ期の製品が多いと考えられる。備前焼は、壺・壺・擂鉢が出土している。大壺の一部でⅤ期にあたる製品<sup>(32)</sup>があるが、これらは包含層の上層出土のものである。その他はⅣ期の製品で占められるものが多い。

土師質土器の編年が未完成な現段階では、国産陶器類で時期を求めるなければならないのが土佐の現況である。さらに天目茶碗等一定の使用期間を考えなければならないが<sup>(23)</sup>、瀬戸産の擂鉢が出土しない現状では、備前焼や瀬戸・美濃系天目茶碗の編年を基準に考えざるをえない。これらの点から遺構外の製品を含め総合的に検討すると、建物群を始め各遺構は16世紀の中頃まで存続していたと考えられる。しかし城跡全体の機能した全盛期は、明応2(1493)年銘の護符等も考慮に入れて15世紀末から16世紀前半代を推定しておきたい。天正年間に実施された検査では、廃城となり荒れ果てた土地になっていることから後半まで機能していたとは考えられない。

## 6 芳原城跡の歴史的評価と問題点

城郭の概念として、城の独自面は集落一般と区別させている軍事面にみると村田修三氏は指摘している<sup>(24)</sup>。この研究面に横山勝栄氏は、領主権力側から見た城郭論でなく村や民衆の側から城郭を見つめ直すという新たな視点を捉えている<sup>(25)</sup>。芳原城跡は、前回の堀状地形部分調査で多量の木製品が出土し、報告書中でも軍事的側面以外に城跡及び周辺の人々の生活史の一側面も捉えることができたと述べられている。たしかに出土した大足・鏹等は、城内の人間が農業生産へのかかわりを持っていたことを理解でき、護符・陽茎・人形等は人々の心の支えとした信仰面まで語っている。小規模城館で議論され市村高男氏が「民衆にとって城郭とは何であったのか」と述べられている<sup>(26)</sup>。これらの点について、芳原城跡の調査で語ることのできる歴史的評価と問題点を若干述べまとめとしたい。

1983年に実施された堀状地形部分調査では、堀跡の明確な遺構は確認できず、湿地帯を堀の機能としていたと考えられる。その湿地帯に遺物が捨て始められるのが15世紀後半と見ている。多量の木製品を含む出土遺物は、V郭からⅦ郭で主に使用されたものが廃棄されたと考えるのが妥当である。これらの曲輪は、未調査のため推定になるが出土遺物からすると城跡内の居住空間を想定することができる。小字を見るとV郭の前面が南堀、VI郭が東堀、Ⅶ郭が北堀、Ⅷ郭が大門とそれぞれ曲輪の前には小字が残る。さらに南堀の南側は城前の小字、南堀の西側には船戸崎の小字も残る。船戸崎からは現在でも小河川が太平洋にむけて流れている。芳原城跡が機能した時代、流通の手段としてこの河川を利用していたことが想定され、船形木製品の出土からも裏打ちすることができる。このように大門から南堀・東堀にかけての部分が城跡内で居住空間の中心部分であると推考できる。さらに遺物もV郭・VI郭の前から多く出土している。V郭を中心としてⅧ郭までの曲輪は、出土遺物・小字・繩張り図等から生活空間としての機能を果たしていたと考えられる。

今回の調査では、I郭・II郭を中心に解明できた。検出遺構・出土遺物は前述したとおりであるが、虎口の検出等でIV郭～Ⅷ郭とは性格が異なり軍事的様相が強い曲輪と考えられる。調査の結果II・III郭から下の曲輪は急傾斜で10～15mの比高差を持つ。II郭には、虎口を通らないと登ることができず、虎口部分では堅固な防御及び攻撃ができる施設も確認できている。さらにII郭からI郭には5～7mの比高差を持つが、登山道が確認できないため基壇状遺構からはしご状のものを利用していた可能性がある。I郭は、掘立柱建物と兵だまりの空間で占められるが、II郭に比べると常滑焼の製品や瓦質土器など時期的に古いものが出土しており、城跡構築初段階から利用されていたと考えられる。この点に関しては、東京稻城市の大丸城発掘調査成果が参考になり<sup>(27)</sup>、その成果から西股總生氏が指摘されているように<sup>(28)</sup>、頂上部を削平する形で築城が行われその後防衛強化のためII郭を改修したとも考えられる。これらのことから、V郭からⅧ郭の生活空間と詰が使用され始め、II郭がその後軍事的緊張から一部改修も含め整備されたと考えられる。

建物跡についてであるが、II郭北東部の一部破壊されている部分で、礎石と考えられる河原石が出土している。しかし明確に礎石建物が存在していたかは不明で、主流は掘立柱の建物といえる。中井均氏は、主要城跡の礎石建物の使用状況を掲載している<sup>(29)</sup>。その中では、横山城跡の大永年間から天文年間が古く、観音寺城跡が天文～永禄年間となっておりその他は元亀から天正年間となっている。全国的に見ても礎石建物跡は、大永年間から天文年間に出現しているようである。土佐においても、16世紀後半段階には久礼城跡<sup>(30)</sup>・波川城跡・古井の森城跡<sup>(31)</sup>・中村城跡・岡豊城跡などで礎石建物跡が検出されている。掘立柱建物跡で構成される城は、ハナノシロ城跡<sup>(32)</sup>・栗本城跡・扇城

跡<sup>(33)</sup>があげられる。主に機能した時期は、芳原城跡と同じであるため礎石建物跡が土佐で出現するのは16世紀半ば以降と考えられる。天正年間にはいると、中村城跡・岡豊城跡で瓦を葺き石垣も構築されるようになる。土佐の城郭でも、大きく「土造りの城」から「石造りの城」に変化してくるが、この変化を検討するには、芳原城跡は欠かせない重要な資料となる。

芳原城跡廃城の時期であるが、吾南平野の歴史的背景の中で見ると、大永年間から天文年間にかけて本山氏との攻防が続き、弘治3（1557）年本山氏が吾南平野を含め春野地方を支配する<sup>(34)</sup>。その後永祿5（1562）年長宗我部氏が支配する。出土遺物から見ても、この時期に芳原城跡は廃城となっている。芳原城跡の城主は不明であるが、本山氏に支配されるまでこの地に支配していたのは吉良氏である。芳原城跡の城主は、他城跡に認められない建物跡・虎口遺構や硯・銅碗等の遺物から見て、吉良氏と深い関係のある人間を想定せざるをえない。この問題に関しては、周辺の城跡の縄張り研究や文献面の広い検討が必要である。

芳原城跡は、守護代細川氏の帰京で守護領国体制が崩壊し戦国時代に突入する時期に、機能した城跡と位置付けることができる。この歴史的な流れの中で、城跡使用の仕方も変化して来るのではないかと考える。つまり在地集落在住者が領主を中心として、自らの生活と生産を守る目的で構築され、領主管理のもと集落在住者によって維持され日常性の強い施設から、守護領国体制の崩壊とともにⅡ郭の改修等、軍事性の強い施設を造り出したと考えることができる。ここでは民衆と一体となった城造りが行われ、長宗我部氏四国制覇の原動力となった一領具足の萌芽を感じることができる。これらの点をさらに解明していくには、生活空間と想定したⅣ郭からⅦ郭までの調査が必要となるし、周辺も含めた学際的研究が必要になる。今回の調査成果をまとめて見たが、十分に検討することができなかつた。さらに今後の調査の必要性を痛感するが、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ郭は調査終了後削平される計画である。城と地域の安寧を願った明応2（1493）年銘の護符が出土しているが、ちょうど今年はその500年目にあたる。

## 註

- (1) 宮地森城『土佐国古城略史全』土佐史談復刻業書（1） 1989年
- (2) 宅間一之『木塚城跡』春野町教育委員会 1988年
- (3) 宅間一之・出原恵三『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- (4) 矢野城樹『土佐の政所』高知市民図書館 1989年
- (5) 小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
- (6) 松田直則・下村公彦『小結』『田村遺跡群第10分冊』高知県教育委員会 1986年
- (7) 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡第1～5次発掘調査報告書』高知県教育委員会

1989年

- (8) 松田直則他『中村城跡』中村市教育委員会 1985年
- (9) 木村剛朗他『栗本城跡』中村市教育委員会 1985年
- (10) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年
- (11) 松田直則「高知県における中世土器の様相」「中近世土器の基礎研究Ⅲ」日本中世土器研究会 1989年
- (12) 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第11集』高知県教育委員会 1991年
- (13) 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究 No 2」日本貿易陶磁研究会 1982年
- (14) 森田尚宏『岡豊城跡Ⅱ－第6次発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年
- (15) 小野正敏「第4回貿易陶磁研究集会・その成果と課題」「貿易陶磁研究No 4」日本貿易陶磁研究会 1984年
- (16) 小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
- (17) 井上喜久男「瀬戸・美濃窯の近世への変容について」「貿易陶磁研究No 7」日本貿易陶磁研究会 1987年
- (18) 伊藤 晃「備前焼の流れ」「木村コレクション古備前図録」1984年
- (19) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究No 2」日本貿易陶磁研究会 1982年
- (20) 真壁忠彦・藍子「備前焼研究のノート (1)～(3)」「倉敷考古館研究集報」1・2・5倉敷考古館 1966・1967年
- (21) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」「貿易陶磁研究No 2」日本貿易陶磁研究会 1982年
- (22) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」「国立歴史民俗博物館研究報告第19集」国立歴史民俗博物館 1989年
- (23) 藤澤良祐「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
- (24) 村田修三「城郭概念再構成の試み」「中世城郭研究論集」新人物往来社 1990年
- (25) 横山勝栄「山間地域の小型城郭」「中世の城と考古学」新人物往来社 1991年
- (26) 第8回全国城郭セミナーでの市村高男氏「最近の中世城郭研究の動向」の発表内容
- (27) (財)東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡』昭和60年度(第4分冊)1987年
- (28) 西脇紹生「多摩川周辺の城砦群」「中世城郭研究第4号」中世城郭研究会 1990年
- (29) 中井 均「織豊系城郭の画期－礎石建物・瓦・石垣の出現」「中世城郭研究論集」新人物往来社 1990年
- (30) 宅間一之他『久礼城跡』中土佐町教育委員会 1984年

- (31) 宅間一之『古井の森城跡』土佐山村教育委員会1980年
- (32) 松田直則「ハナノシロ城跡」『中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書 I』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
- (33) 森田尚宏『扇城跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
- (34) 春野町『春野町史』1976年

# 図 版



芳原城跡遺景

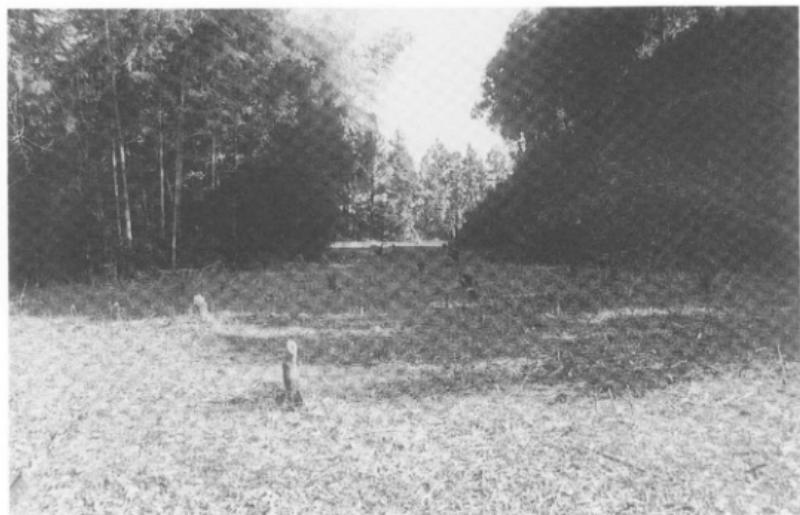


I・II 郭調査前近景

図版 2



Ⅱ 郭西側調査前近景



Ⅱ 郭東側調査前近景

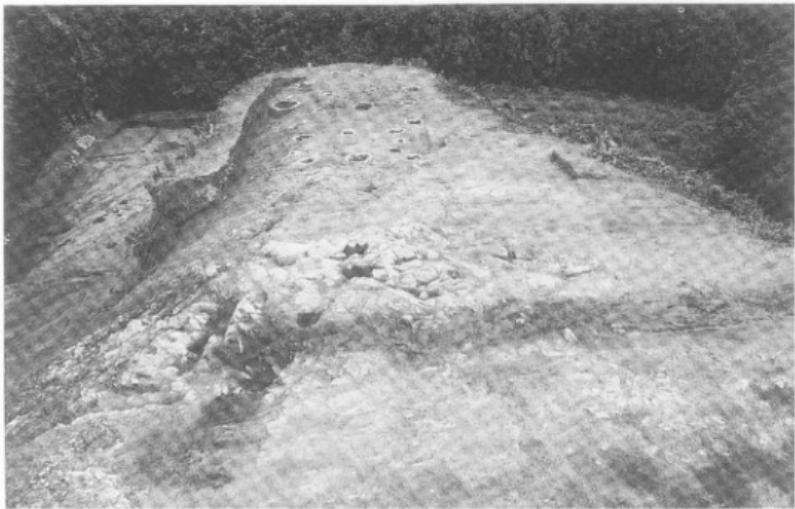


芳原城跡航空写真



I-郭調査状況

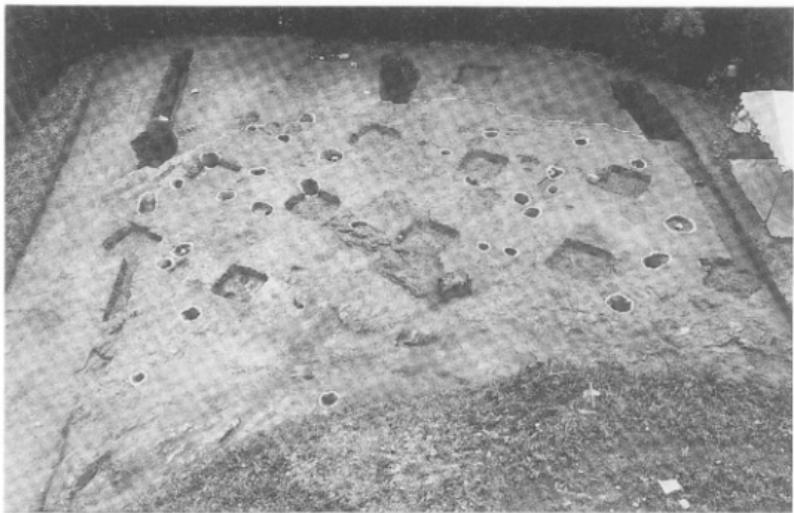
图版 4



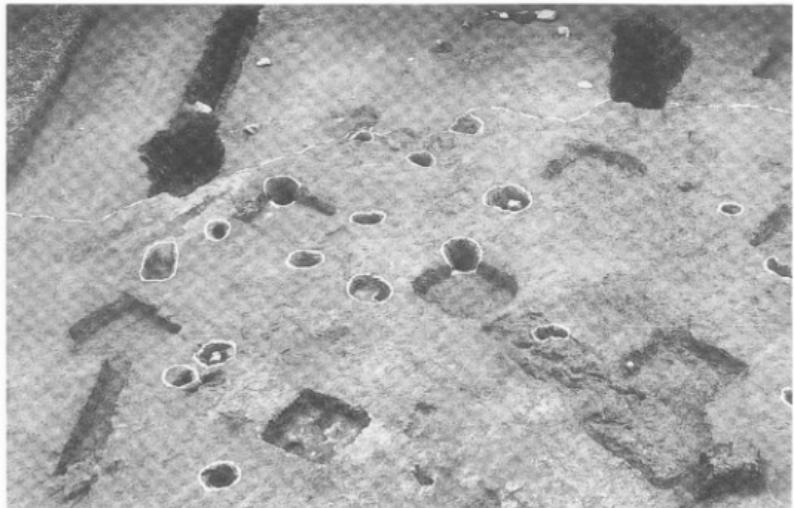
I 郭完掘状况



SB1

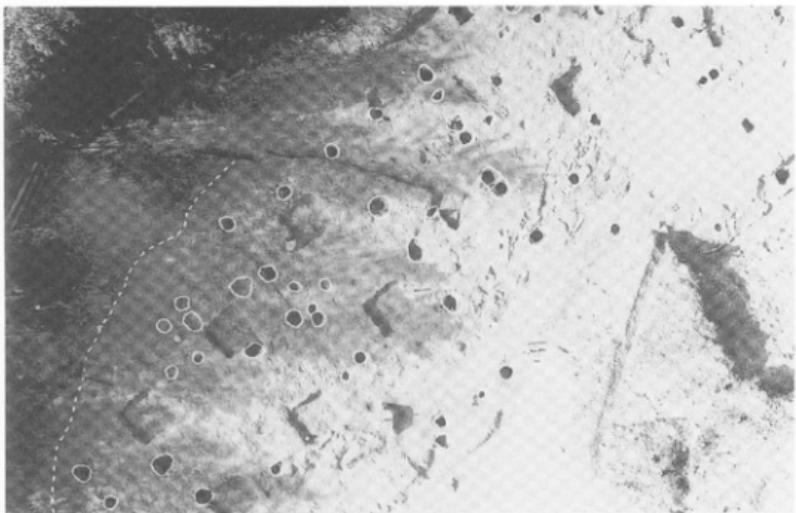


II 郭一B区完掘状況

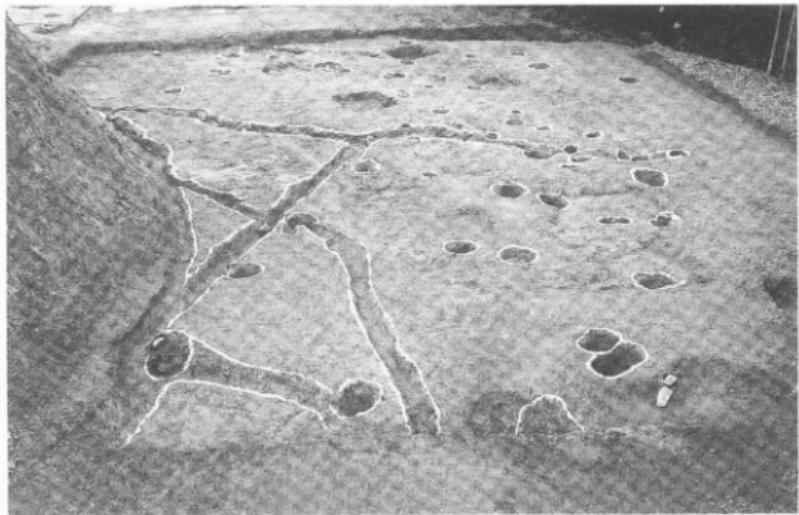


SB 2

図版 6



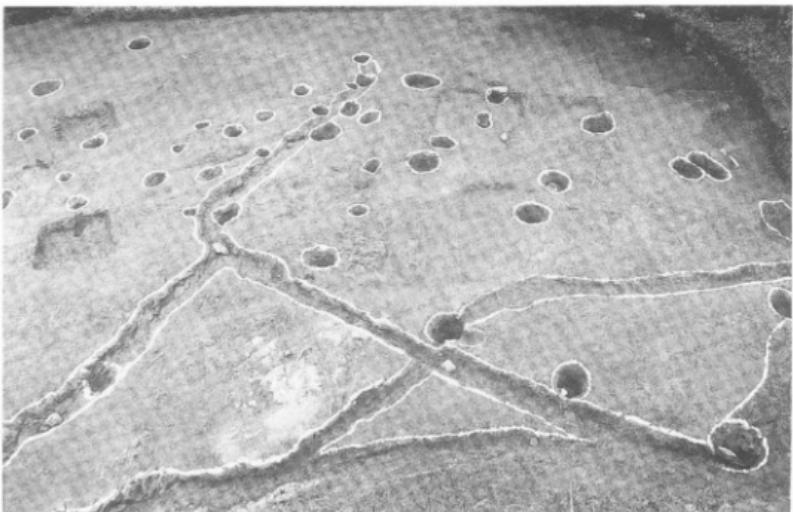
SB 3



II 郭一C区完掘状況

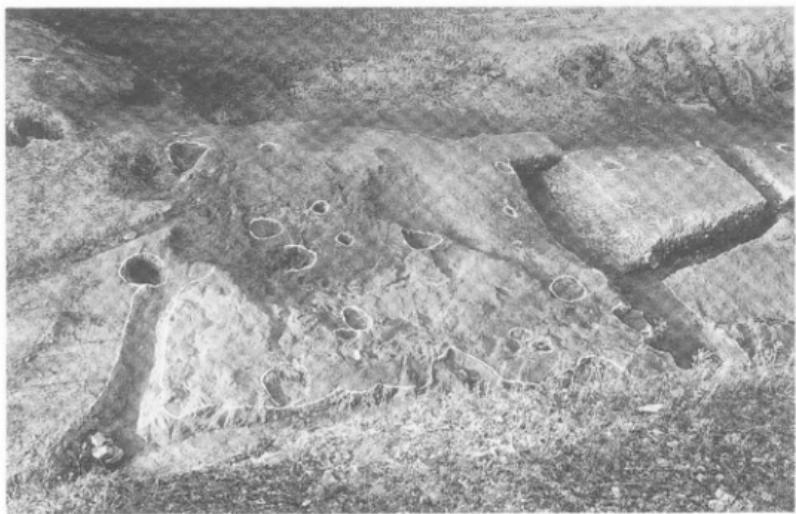


SB 4



SB 5

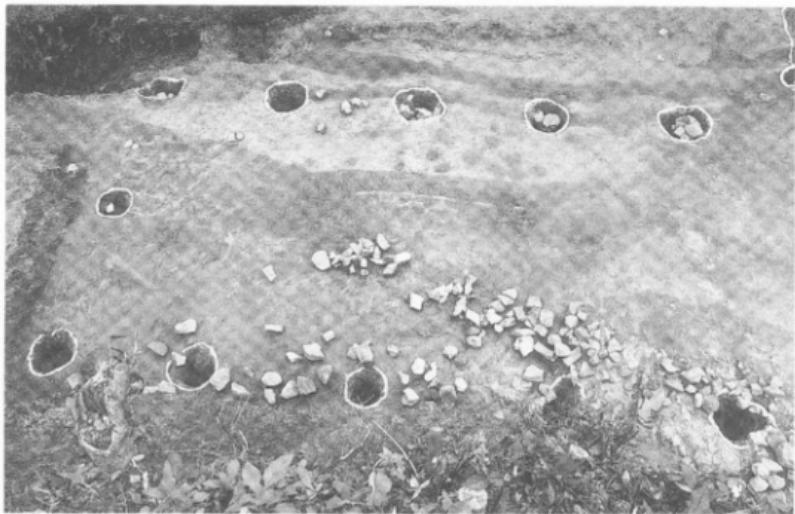
図版 8



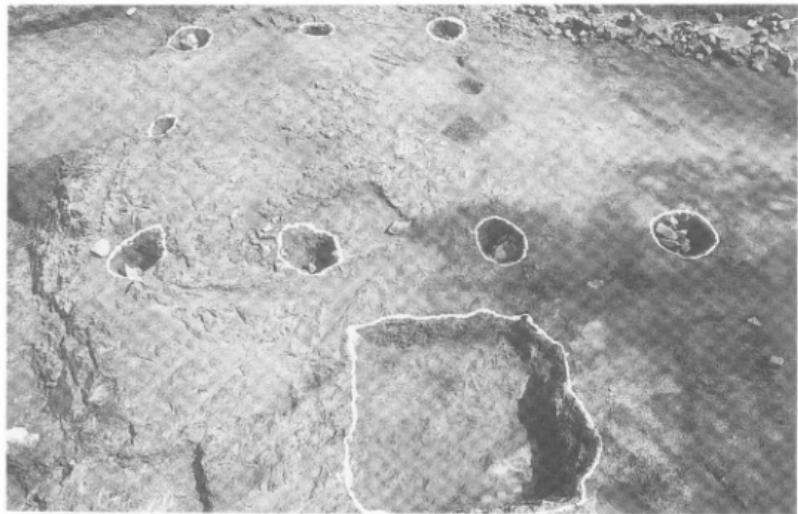
SB 6



SB 7



SB 7 周辺



SB 7、SK 1